
天使で悪魔

Sandalu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使で悪魔

【Nコード】

N0641T

【作者名】

Sandalu

【あらすじ】

幼馴染と訪れることになった花火大会。幼馴染はというと好き放題して最終的には逸れてしまい僕は慌てて探すハメに。幼馴染を探すためにあちこちと走りまわってもうへとへと。そんな時に入った公園で一人の女の子と出会う。天使のような容姿に目を奪われてしまう。そして彼女との話の中で自分は天使だと言い出す。電波な人だったのか！僕がそう思っているときに彼女は僕の右手を触る。その時に微かに光が・・・

僕と幼馴染と天使（前書き）

初めての投稿なのでおかしな表現や言動、他にも多々あると思いますがよろしくおねがいします。感想など貰えればとても嬉しいです。

僕と幼馴染と天使

雲の上の空で飛び交う二人の少女。

白い翼を生やした少女は、手から光の弾を作り出し放つ。

その光の弾を軽くかわす少女は黒い羽を生やしていた。

「そんな攻撃当たらない」

淡々と言い放ち、黒い羽の少女は右手で黒く光る玉を作りだす。

「これでおわり」

黒い羽の少女が黒い弾を放つ。

「きやあつ」

その弾は一瞬のうちに白い羽少女をとらえる。

白い羽の少女はこの雲の上の空から落ちていった。

「うわっ、あついな」

窓を開けてあたたかすぎる風をあびながらつぶやく。

今は夏、七月の後半あたり。

「今日から夏休みか」

夏休みになったからってやりたいこともないし、夏休みは大抵宿題をして友達と遊ぶ。毎年そうだ。

ブルルルル、ブルルルル

携帯に誰かからの着信。

画面を見て誰からの電話かを確認する。

「そう君、今日ひま？」

電話をかけてきた相手は、僕の幼なじみの一高野結衣くこのゆいく。

幼稚園の頃からずっと一緒にやんちゃっ子とでも言えばいいのか、結衣にはいつも振り回されている。僕の事を弟として舌つてくれているらしいけど、僕からすれば妹みたいなものかな。

ちなみに僕の名前は「神木奏吾」かみきそうごく。

だから結衣は僕のことを昔からそう君と呼んでいる。

「僕は別に暇だけど」

「よかった。今年も花火大会があるからいつしよに行こ」

結衣はうれしそうにしながら言った。

花火大会は、毎年夏休みの始めに川の近くで開かれている。

「やっぱり夏休みの始めはそう君といつしよに花火見に行かないと」

「僕は遠慮しとくよ。友達といつてきたら？」

「何いつてるの！ 毎年いつしよに行ってるじゃん」

「そうだけど、やっぱり僕はやめとく」

「なんで！？ いつもはいつしよに行ってくれてたのに・・・」

結衣の声が段々涙声になってくる。

「いいもん。一人で行くもん」

やばいかな、結衣が一人で行くなんて・・・

「ちょっと待って！ やっぱ僕も行くから」

心配すぎる。結衣の性格からして、何かやらかすことは目にみえている。

「だから一人で行かないで待っててね。結衣の家まで向かいに行くから」

「うん、浴衣着て待つてる。早く来てね」

それから別れを告げて電話を切った。

「結局今年も行くことになっちゃったな」

何も起こらないようにだけ祈っておくことにしよう。

玄関で靴を履いていると、

「あら、奏ちゃん。今年も結衣ちゃんと花火？ ラブラブね」

「何いつてるの母さん！」

この人は僕の母さんで一神木 奈々>かみきなな>。

「お母さん、今日からお父さんの所行ってくるから」

「えっ！？ 単身赴任先のアフリカに？ 何でそんな急に。ご飯とかどうしたらいいの！」

「冷蔵庫のものでも適当に食べておいてね」

「適当につて。いつ帰ってくるつもりなの？」

「あれ、もしかして寂しいの？ 高校生にもなっても甘えん坊さんなんだね」

「違うよ！ 普通に気になることじゃないか！」

「そんなに照れなくても大丈夫だよ。奏ちゃんが電話くれたらすぐ帰るから」

「電話つて、携帯も持ってないくせに」

「それじゃあ行つてらっしゃい。お母さんも支度してもう出ないと行けないし、それに結衣ちゃんも待つてるわよ」

「わかったよ。それじゃあ行つてきます。」

ほんとに勝手なんだから。そういえば母さんパスポート持ってたっけ？ 母さん海外行ったこと無いよな。母さんの事だから何とかすると思うけど。

こんなことを考えているうちに着いた。しかも待ち合わせの二十分も前に。

家が本当に近いな。

「はい。ちよつと待つてね。」

インターホンを鳴らしてそう言われてからもう五十分も経つ。

なんでこんなにまたされてるの！？ ビックリだよ！！ 早く来てつて行つたの結衣なのに・・・

「待たせてごめん。どう、似合ってる？」

息が一瞬止まった。

花柄の浴衣、腰まで伸びている長い紙を後ろで束ねてあり、少し化粧もして少し大人びた雰囲気さえも感じる。

いつも見慣れているはずなのに、浴衣を着たり、化粧をしたりするだけで、何だかいつもと違う雰囲気が漂っている。

要するに、とてもかわいかった。

「どうしたの？」

結衣の言葉で我にかえる。

「な、何でもないよ。はやく行こう」

少し赤くなつた顔を見せないために結衣の前を歩く。こんな顔、結衣には見せられない。

話も僕の方は相槌をうつつ位で結衣が殆ど話をしていた。

「わーっ！　すごい！」

花火会場に着くなり結衣がそう言った。

「なんだか去年よりすごくなつてない？　人でいっぱい」

たしかに今年は倍の人数がいると思う。

「今年は花火以外に何かあつたっけ。そう君知ってる？」

「いや、僕も知らないよ」

「そう君も知らないのか。うーん、まっ、いつか。はぐれないようにしないかね」

そう言つて行つてしまふ結衣。行つてしまふ？

「ちよつとまつて、結衣！」

先に行つてしまつた結衣を追いかける。

それから結衣はあれこれとお祭りを楽しんでいるみたいだ。僕はというと、楽しんではいるよ、うん。

「ねえねえ、りんごアメが食べたい」

「食べたいなら買つたら？」

「もうお金ないもん。だから買えない！」

そう言っている結衣の頭にはお面を付けていて、手にはゴムヨーヨーやら、金魚、どんぐりアメ、そして結構高いわたあめの大きい袋のやつまでもぶら下げている。

どう見たつて使いすぎなのは一目瞭然。

「考えて使わないからだろ。あきらめるしかないね」

僕がそう言つと結衣の目に段々涙がたまつていく。

しかも、その涙がたまつた目で僕を見てくる。

「わかつたよ。僕が買つてあげるから」

そついうと結衣は僕に笑顔を向ける。

女の子の涙は卑怯だ！

「へへっ。ありがと、そう君。」

りんごアメを買ってもらって無邪気にはしゃぐ結衣。
でもこの笑顔を見ると良かったと思う。

「はしゃぎすぎるとアメ落とすよ。落としても、もう買わないから」

僕の財布も大分寂しくなったし。

「わかってるよ。落とす訳ないじゃない」

そういった矢先、通行人とぶつかる。

「あっ」

りんごアメが手から落ちる。

「あ~~~~~~~~っ!!」

その声を聞いて僕は結衣の方を向く。

結衣はそれをすごい速さで拾う。そして口のほうへ。

「いや、食べちゃだめだよ!？」

「そうくん。3秒ルールを知らないの？」

3秒ルールとか、子供か!

「ダメだよ。ほら、砂とかもすぐくっついてるし」

アメだからか、ものすごい量の砂や何か汚い物が付いていた。

「それじゃあもう一つ買って。りんごアメ食べたい」

結衣がそう言いながら迫ってくる。

「もう買わないって言っただろ。気をつけないからだよ」

「気をつけてたよ。ぶつかった人が悪いんだから。私は悪くない!」

そんなえげなから言うことじゃないと思うけど。

「ほら、花火始まるからいくよ。今年は人も多いから早くしない
といい場所で観れないよ。」

とりあえずはぐらかしとこう。

「あっ、ちよつとまってよ!」

いつもの花火スポットまで向かう途中、結衣は落ち込んだように見える。いつもと変わらず元気なままだけど。

なんだか胸のあたりがズキズキする。

「花火始まるみたいだよ。ちょうどいい場所が取れてよかったね」
川に着くと思ったとおりすごい人の数だ。

川の土手のポジションを運よく確保することができた。

「そうだね」

結衣と並んで座り、花火が始まるのを待つ。

結衣は元気がないまま。

ドーン、ドーン、ぱらぱら。

花火の打ち上げが始まり、多くの人は、花火があがり、はじける
度に歓声があがる。

僕は結衣の方に目をやる。

「そう君、今年も花火すごいだね。去年のよりもすごいかも」

結衣の元気が空元氣に見える。さっきのリング飴、買ってあげて
たらよかったかな。なんで僕がこんな後ろめたい気持ちになるんだ
よ。結衣の呪いにもかかったみたいだ。

・・・苦しい。この空気は体に悪すぎる。

「結衣ちよつとまって。りんごアメ買ってくるから」

結衣の顔が花が咲いたように笑顔になる。

「ほんとに！？ほんとにいいの！」

「いいよ。だからおとなしく花火みてまってね」

「うん。わかった！」

結衣の元氣のいい返事を聞いて何だか嬉しくなってくる。僕も甘
いな。妹を持つ兄の気持ちかわかった気がする。

「うん。また落としそうだし二つ買っとこうかな」

夜店の前で一人つぶやく。

りんごアメを二つ、手に持ちながら結衣が待っている土手へと向
かう。

それにしても人が多い。

「あれっ、結衣はどこだ？」

結衣がいるはずの場所に結衣がない。

一瞬、場所を間違えたのかと思ったけど、毎年来ているところだ。間違うはずがない。

「はっ、おとなしく待っててって言ったのに」
ため息をつきながら言った。

はぐれてしまったからといって家も近いし、心配することはないんだけど。

「心配だ」

今までこんな事態に陥いったことがなかったから考えた事なかったけど、こんなに人がいれば変な奴がいてもおかしくない。

結衣は見た目がかわいいし、あの性格だ。りんごアメでつられてしまうかも。

「結衣が危ない。はやく探さない」と

汗を垂らしながら懸命に結衣を探す。

しかし今年はやけに人が多い。まったく見つかる気がしない。

「結衣どこだよ。こない心配かけて」

時間が経つにつれて悪い想像が次々と浮かんでくる。

いつの間にか、僕はがむしゃらに走って結衣を探した。

気がつくと川の近くにある公園に来ていた。

花火の打ち上げが始まっていたせいか誰もいない。

ちなみにこの公園は草木が生い茂っていて、花火を見る事ができない。

結衣のことを考えすぎていて気がつかなかった。

ふとあることを思い出す。

「・・・ケータイがあるじゃないか」

気が動転しすぎていて携帯電話があることをすっかり忘れていた。アドレス帳を開いて結衣に電話をかける。

「あっ、そう君。いまどこ？　りんごアメまだ？」

「はっはっ」

安堵の息がもれる。

「どこじゃないよ！　結衣こそどこにいるんだよ！　待っててっ

ていったじゃないか!!」

僕が息を荒くして言う。

「だって花火がキレイだったんだもん」

普通は花火がキレイだったからと言ってどこかにいったりはしない。

大きなため息がでる。

「心配したんだから。今どこにいるの？」

「え？ たこ焼き屋の前だけど」

「たこ焼きや？ お金ないんじゃないの？」

「お金は大丈夫。さっきお母さんにあってお小遣いもらっちゃった」

「え！ それじゃあ別に僕がりんごアメ買わなくてもよかったんじゃない・・・」

「それとこれとは別だよ。りんごアメはちゃんと買ってきてね」
「なんだよそれ。勝手だな。」

「わかったから、結衣はさっきの場所にいてよね」

「わかってるよ。そうくんこそ場所間違えないでね。それじゃあ電話が切れる。切られる。」

あの、迷子になったの結衣だよな？

疲れた。心も体も。

トボトボと俯きながら結衣がいる場所へと歩いて向かう。

突然気配を感じて顔をあげる。

そこには同じ年くらいの女の子が立っていた。

髪はつややかで腰の方まで伸びているおり、体つきは少し大人なびた感じ、背は僕と同じくらいで白いワンピースを着ていた。

まるで神話に出てくる天使のよう見えた。

僕はつい見とれてしまっていた。

「ぐっっ」

その音で我に返る。

彼女の目をよく見ると僕の右腕を見ていた。

いや、正確には僕が握っていたりんごアメを見ていた。
すぐく見つめている。

「えっと、よかったら食べる？」

あまりにも見ていたので持っていたりんごアメをひとつ差し出す。
彼女は目を輝かせながら

「ほんとにいいんですか？」

と聞いてくるので僕は小さくうなずく。

「ありがとうございます！ いただきます」

ガリっ、ガリゴリガリ。

僕はそれをただ呆然と見ていた。

相当お腹が減っていたようで、固いアメを数分でりんごの芯も残
さずきれいに食べきっていた。

「すこし固かったけど、甘くておいしかったです。ありがとうございます」
ざいました！」

彼女は笑顔で言うてくれた。

彼女の目はもう一つのりんごアメを見つめて、僕の方をチラチラ
とみる。

「・・・もう一つ食べる？」

そんな目くばしに耐えられなくなつてつい言ってしまった。

さらに笑顔になる彼女。

「それじゃあ・・・いただきます」

今度は遠慮の言葉もなく、僕が差し出したりんごアメにかぶりつ
く。

さつきよりもすごい勢いで食べ進める。

「これはなんて言う食べ物ですか？」

突然、彼女がそんな質問をしてくる。

「りんごアメっていうんだけど、知らないの？」

「はい！ りんごアメっていうんですか。とくても甘くて美味
しいんですね。気に入っちゃいました。」

彼女の目は輝いている。

それにしてもりんごアメを知らないなんて珍しい。

僕はそんなことを考えながら、彼女が食べ終わるのを待った。

「ごちそうさまでした。すいませんでした。二つもあったということは誰かに上げる物だったんではないですか？」

「気にしないでいいよ。そんなこと無いから」

実はそうなんだ。なんて言いづらいな。

「それより、君はなんでここにいるの？」

この公園は昼間でも人があまりいないのにこの時間帯だ。周りが草木おいしげる中、しかもこんな暗闇の中で女の子一人で来ところではない。

「ちよつと帰れなくなりまして・・・」

笑顔は消えて俯きかげんでそう言った。

この周辺はこの町の人なら迷うはずがないので

「どこから来たの？」

すると彼女は空を指差した。

僕は上を見上げた。そこには無数の星が散りばめられたきれいな空が広がってた。

「・・・空から!？」

つい声が出てしまった。

空からなんてあり得ない。

そうだ。飛行機に乗ってきたんだろう。

「空から落ちてきたんです。」

どうしよう。電波な人だったなんて。

「あゝっ、信じてくれてませんね!」

僕の顔を見て彼女はそっくり背を向けた。

白いワンピースをはだけさせて背中を僕に見せつけていた

「これで信じてくれましたか？」

どこに信じられる要素が存在するんだろう。ただ、とてもキレイな背中があるだけじゃないか。

僕は彼女の背中をまじまじと見る。

「聞いているんですか？」

彼女がこつちを振り返った。

鼻からすこし暖かいものが垂れてきた。

咄嗟に鼻を押さえる僕。

「大丈夫ですか！？」

彼女は着ているものはだけさせながら近づいてきた。

僕は彼女の背を向ける。

心配そうに僕の顔を覗こもつとする彼女。

胸見えてるから。それを僕に見せないで！

そろそろ耐えられない。

「と、とりあえず服着てください！」

「えっ・・・きゃ~~~~~~~~」

しゃがみ込んで胸を抱えながら叫んだ。

それから気まずい雰囲気が出る。

「そ、それで・・・信じてくれたんですか？」

彼女は顔を赤くしながら言った。

「えっと・・・」

まともに彼女を見る事ができない僕。

「わからなかったんですか？ し、しっかり見てください」

彼女はそう言ってまた僕に背中を見せつけてくる。

もつまともに見れない。

「ほら。これでわかって・・・あれっ？」

彼女は自分の背中を見ながら考えているようだ。

「あつ、そうでした。だから帰れなかったんです。そうでした、

そうでした。」

なんだか一人で納得してしまっている。置いていかれた気分だ。

「勝手に納得しないで説明してほしいんだけど」

「もういいです。証拠がありませんでした。」

「いや、その証拠がなかったのか気になってるっていうか。」

なんだか話が噛み合わなくなってきた。

「それは忘れてください。今日はありがとうございました。この恩はいつかお返しします」

「なんだかまとめに入ってるないか？」

「それでは！」

彼女は走って行ってしまった。

「りんごアメおいしかったです！」

彼女は最後に振り返りそう叫び行ってしまった。

僕はそのまま立ち尽くしてしまっていた。

それから少ししてから結衣の元へと急いだ。

「ごめん。本当にごめん！」

僕は結衣に謝りたおす。

「来るのおそ過ぎだよ。とくに花火終わっちゃってるんだよ」
周りはほとんど人がいなくなっていた。

僕があの特徴的な女の子という間に花火大会は終わってしまった。
た。

正直全く気がつかなかった。

そういうわけでさっきからずっと謝ってるんだけど。

「絶対に許さないもん。りんごアメあげちゃうし。そう君なんか嫌いだよ」

嫌いとか言われると傷付くからやめて！

「それは仕方なかったんだって。さっきも説明したじゃないか。」

結衣になんて来るのが遅れたのか説明した時はふてくされた顔を
してるだけだったけど、りんごアメをあげたことを話した所で結衣
の機嫌が悪くなってしまった。

「もう屋台だって無いんだよ？ もうりんごあめ買えないじゃない
い！」

りんごアメでどれだけ怒るんだよと思ったり、半分は結衣のせい
じゃないかとも思ったりしたけど、結衣をこのままにはしておけな
い。後で何されるかわからないし。

なんとか結衣の機嫌を取り戻さないと。

「僕が悪かった。ほんとにごめん。いや、ごめんなさい！ 何でもするから許してもらえないかな？」

僕、どんだけ謝ってるんだろう。

「ほんとになんでもしてくれるの？」

僕のその言葉を待っていましたとばかりに聞いてくる。

「それじゃあ、明日の夏祭り一緒に行ってくれる？」

「えっ、いや、それは」

さすがに夏休みに2回も振り回されたくない。

「なんでもっていったじゃん！ それにお祭りでならりんごアメ買えるし」

また僕に買えってことか！？

「そうは言っただけど、友達と約束してるっていったじゃないか！ 結衣も約束してるんだろ？」

「大丈夫！ いっしょに回ればいいんだよ」

「いっしょに回ればって・・・」

「それじゃあ決定！ 連絡するね」

「ちよつとまって！ 勝手に進めないでよ」

「残念。もうメール送っちゃった」

「送っちゃった じゃないから！ それにそっちの友達が良いっていうかもわからないし」

「いって」

「もう返信きたの！？ 速いよ！ なんなの、打ち合わせでもしてたの！？」

「打ち合わせなんてしてないよ。仲がいいから以心伝心でもできたんじゃない？」

なんだ？ あの含みのある笑顔。絶対打ち合わせしてたな。

「いや、でも。ほら、ぼくの方はまだ了解得てないわけだし」

「それじゃあすぐにメールして！ 電話でも可！」

「いや、だからむりだっ、うおっ」

ポケットに入っていた携帯が鳴りだす。

「ちよつとごめん」

僕は結衣に誤って携帯をポケットから取り出す。ディスプレイを確認する。

「だれから？」

「亮介からだよ」

結衣にそう答えながら電話にでた。

「もしもし、どうしたの？」

「明日の夏祭りどうすんの？ まだ何も決めてないじゃん。慎弥にも早く伝えにやらんし」

今電話で話しているのは同じクラスで友達の一田野 亮介>たのりようすけ>。

それと亮介が言っている人は一市ノ瀬 慎弥>いちのせ しんや<つていう。慎弥も同じクラスの友達だ。

「あつ、田野くん？ 明日いっしょに夏祭り行かない？」

いつの間にか結衣に携帯を奪われていた。

「ちよつと！ なに勝手に話してるの！」

結衣から携帯を取り替えそうとするけど結衣は僕の手をうまくかわす。

「ほんとに？ うんわかった。それじゃあ明日ね。ばいばい」

電話を切ってしまう結衣。

「ちよつ、なに勝手に電話切ってるの！？」

「いっしょでもいいって。これでいっしょにいけるね」

僕は携帯を取り返して急いで亮介に電話をかける。

「亮介！ さっきの話は無しでお願い！」

「もう慎弥にも連絡しちまったし、おまえだけ夏休みエンジョイするなんてずりーぞ。俺も結衣ちゃんと花火みてイチャイチャしたいわ！」

「イチャイチャなんてしてないから」

「うそつけ！ 花火見ながら手とかつかないじゃったりしていい感じになってたんだろ！ それぐらい俺位のレベルになれば感じとれ

る！ だから今度は俺が結衣ちゃんとイチャイチャしてやるわー！
！」

いや、レベルってなんだよ・・・もう手がつけられない。

「んじゃ、そゆことだから。結衣ちゃんによろしく言つといて」

「ちよつ、亮介！」

切れてしまった携帯をただ見つめてしまう。

「ほら早く帰ろう。遅くなっちゃうよ」

結衣に右手を握られて引っ張られる。

ややこしいことになった。結衣だけでも手一杯なのに亮介もブラ
スされるなんて。もう疲れるのは目にみえている。

・・・楽しいんだけどね。

帰り道、結衣があの子の事を話題に持ち上げてきた。

「それで、その女の子はどんな子だったの？」

「どんな子って・・・」

あのハプニングな場面が僕の脳内を埋め尽くしていく。

「どうしたの？ 顔赤いよ。あつ、もしかしてそう君・・・」

何かに気づいたのか！？ 結衣にも亮介のいうレベルに到達して
いるとでもいうんだろうか。いやそんなことは、だけど、あんなこ
と知られると僕の学校での立場が。

「熱があるんじゃないかな！ もしかして私のせい！？」

・・・僕の焦りはなんだったんだろう。

「大丈夫、熱なんかないから。」

「ほんとに？ ほんとに大丈夫なの？」

「本当だから。本当に大丈夫だから心配しなくていいよ。ほら、

結衣の家に着いた」

「私、そうくんの家まで送るよ。やっぱり心配だし」

結衣がまたあの子の話題を出しそうだし、さつさと逃げよう。

「いいって、大丈夫だよ。というかすぐそこだろ？ それじゃまた
連絡するから」

「もう、わかったよ。気をつけてねー！」

自転車があればすぐ家に着くんだけど、今日はしかたないか。

「それにしても、今日も結衣に振り回されっ放しだったな。結衣とどこかに行くと必ず僕は疲れている気がする。本当に疲れた」いつもそうだ。

去年は今年みたいに迷子にはならなかったけど、花火がうち上がった時に興奮しすぎて僕の手をひっぱって走り回されたり、一昨年なんか結衣が花火の見える方向に拳を振り上げた時に、僕の顔面に当たって鼻血とまらなくなったっけ。僕の服も血まみれになって、そのまま家に帰ったら母さんビクリしてたっけ。誰にやられたの？　なんて、木刀持ち出すんだから。

「それにしても、今日の女の子は誰だったんだろう。この近くで見た事無い顔だったけど。よそから来たのかな」ちよつと電波だったし。

そういえば迷ってるみたいだったけど、無事に家にかえれたんだろうか。少し心配になってきた。良く考えてみると、この町の人じゃないという事は道がわからなかったんじゃないや。やってしまった。あんな所一人でいるなんて危険すぎる。

「自転車に乗って行ったほうが速いかな」

僕は自転車に跨って勢い良くペダルを漕ぎ始めた。

「はあはあ、どこに行ったんだろう。結構時間経っちゃてるし、この近くにはもういないのかな。早く見つけないと」

公園につくと自転車から降りて彼女の搜索を始める。

夜も深くなつて、周りから人の気配がなくなっている。

この時間帯で、ましてやこの町の事をわからない女の人が一人、危険要素が満載だ。とにかく彼女と出会った場所にいてみるしかない。

「やっぱりもういないか。走って行っちゃったしな。町をやみくもに探しても見つかるとは思えないけど探すしかないか。・・・なんだろ、あれ？」

草むらから何か出ている。

「あつ、痛つ。あれ？ぬけない」

聞き覚えのある声。

「ちよつと待って今助けるから動かないでじつとしてね。服が茂みに引っかかってるみたいだから。これで、よし多分抜けるよ」
ゆつくりと出てくるのはやっぱり彼女だった。以外に簡単に見つかった。

「ありがとうございます！何度もお世話になりっぱなしで申し訳ないです」

彼女は僕の方を向いて深々とおじぎをする。なんだか少しだけ照れる。

「全然いいよ。そんなことよりあんなところで何してたの？」

「実はですね・・・」

彼女が両手をこつちにさし出してきた。

「これは、小鳥？怪我してるみたいだけど」

「そうなんです。あの木から落ちちゃったみたいで」

「さっきの茂みの近くの木？結構高いところから落ちたんだ。早くケガの治療をした方がよさそうだね」

「そ、そうですよね。けど私普通の治療方とか良くわからないんですけど・・・」

「普通？良くわからないけど結構弱っているみたいだし、危ないかもしれない。ちよつとケガの具合を診たいからその子貸してくれる？」

「あぶないんですか！？おねがいします！何とか助けてあげてください！」

彼女は僕に小鳥を手渡す。軽く手が触れる。

「うんわかつてるから。あれっ？」

「どうしたんですか！そんなにその子の怪我ひどいんですか！」

「いや、違うよ」

さっき彼女の手が光った気がするけど気のせいかな？

「怪我はあんまりひどいモノじゃないみたいだけど、病院には連

れて行ったほうがいいかも・・・？」

なんだろう。彼女の雰囲気が変わったような気がするんだけど。なんというか彼女の後ろに白い羽が見えるような。

「羽！？」

「ど、どうしたんですか！？ 羽って・・・あれ？ 力が、力が戻ってます！」

「力ってなに！？ それより羽なんて、どうして？」

「それよりこれでその子を助けられます！ 早くその子をかして下さい！」

「えっ、あっ、ちよつと、って」

混乱してきた。この状況で言う言葉が選択できない。

「早くしてください！ その子を早く治してあげないと」

「あっ、はい。ごめんなさい」

謝ってしまった。

「もう大丈夫ですよ。すぐに治してあげますからね」

彼女はそう言って小鳥を手で包み込むようにして持った。その時彼女の手が白く優しさを感じる光を放った。

「これで大丈夫ですね。ほんとに良かったです」

彼女は僕に満面の笑みを向けながら、包みこむようにして持っていた小鳥を僕に見せてくれる。

なんで？ どうして？ どうやって？ 手品？ それとも他の何か？

わからない、分かんない。理解できない、答えが僕の脳内には存在しない。どうやってたらこんなことが、小鳥が完全に完治しているなんて。

「あの、大丈夫ですか？ どこか悪いところでも？ でしたら今の私に任せてください。何でも治してみせますよ」

いや、なんでも治すって。どうゆうこと？

「君は一体何なの！？ どうしてこんな力が君に！？」

「それは私が天使だからですよ。最初にあったとき言ったじゃないですか。あっ、小鳥さんを巣に返してあげないと」

そう言つて彼女は自分の背中にある羽を広げて僕よりも高い場所に、いとも簡単に小鳥の巣までいつてしまった。

いやいやいや、天使つて普通にいつてるよ・・・

やっぱり彼女は天使なのか？信じられない。本当にそんな曖昧な存在が現実には、しかも僕の目の前に現れるなんて。結衣なら喜んだらうな。いや、そんなことを考えている場合じゃない！今のこの状況をどうしたらいいか考えないと。

「これでよしと。もう大丈夫ですよ。もう落ちたらダメですからね」

彼満面の笑みを小鳥に向けていた。

「ありがとうございます。いろいろとお世話に、というか心配ばかりかけてしまつてごめんなさい。でも力も戻つたのでこれで帰れます」

小鳥を巣から返してから僕の方に飛んで戻ってきた。そして僕にもあの笑顔を向けてくれる。

「あつ、いや全然いいよ。それより帰るつて・・・」

「はい。空の上ですよ」

電波さんじゃなかったのか。というか天使とわかつた時点で気づいてはいたけど。

「そ、そつか。元に戻つてよかったね」

「はい。それじゃあさつそく」

そういつて翼を大きく広げた。

ふわりと地から足が離れる。それと同時に薄く透けた羽を羽ばたかせる。

そして僕から段々と離れていく。

色々あつたけど帰れるみたいでよかった。あれっ？

「あの！　なんだか羽透けてない？」

彼女に届くように大きな声で言う。

「はい？　ほんとですね。でも跳べているのですから。大丈夫ですよ」

そういつて彼女はもつと高く飛ぶためなのか、また大きく翼を羽ばたかせた。

でもなんだかみるみる羽が透けていつているような・・・

「あれっ？なんだか背中軽く・・・ちよっ、うわ~~~~っ」

あゝあつ、やつぱり羽きえちゃってるよ。

「やつぱり落ちてくるよね。ってそんなこと言ってる場合じゃない！」

どうしよう。やばいよ。てかちよっ、高すぎ！

僕は彼女の落下地点であろう場所に駆け出す。

「くっ、間に合え！」

僕は彼女の落下地点であろう場所にダイブする。

その時不覚にも目をつぶってしまったけど仕方ない。

顎を摩り剥きながら地面を滑べる。

手には何の感触もない。腕には何の重みも感じ無い。

彼女をキャッチできてない！？

それじゃあ彼女は・・・

周りを見渡す。

んっ！？ いない・・・

「た、たすけてください！」

木の方から声が。

木の上の方に引っかかっているみたいだ。

「だいじょーぶー？」

「はい。だいじょうぶです！」

ほんとに大丈夫でほっとする。てか、僕のスライディングは！？

恥ずかしすぎるし。周りに誰もいなくてよかった。顎いてっ。

「今助けるからじっとしててね！」

今日はこの木に縁があるみたいだ。

「ほら抜けた。大丈夫？」

なんか今日は大丈夫しかいってないな。

「大丈夫ですよ。ありがとうございました。今日は何だかお礼を

言っただけですね」

僕にまた満面の笑を向けてくれる。

「何かありましたら声をおかけください。出来る限り力になります。それでわ！」

走って走ってしまう。

走って走ってしまう？

僕の目的はなんだったわけ？

「ちよつ、ちよつとまって！ ちよつとまってよ！！」

僕は彼女を追いかけてながら叫ぶ。

「はい？ なんでしよう」

何とか彼女に追いつくことができた。走るの早いよ。

「これからどうするのかと思って。寝るところとか、食べ物とか」

「どこでも寝られますし食べ物だってなんとかなりますよ！」

何とかって、というかどこでも寝られると言っているということ
は住むところもないということだね。

く~~~~っ

彼女の方から聞こえたのでそっちに目をやると、顔を赤くしながらお腹を抑えていた。

「す、すいません。そろそろご飯探したいので、失礼してもいいですか？」

探さないとして、まあ無理だろうな。仕方ないか。ここで出会ったのも何かの運命と思う。

「それじゃあ家に食べにくる？」

今日は幸いというか、母さんもないことだし。

「いいんですか！？ 私なんかがお呼ばれしちゃって！お邪魔じゃないですか？」

「いや、むしろ大歓迎だよ！一人で食べるより、二人で食べた方が美味しいって言うし」

「それでわ、よろしく願います！」

彼女は僕に向かって深々と頭を下げながら言った。

「うん。それじゃあ、かなり遅い時間だから二人乗りしてさっさといこうか」

「はい！」

彼女を船頭して自転車のあるところへと向かい、僕は自転車へとまたがる。

彼女は僕の自転車の荷台に両足を同じ方向に出して座る。

「危ないからしっかり捕まってるね」

「あの、どこに捕まればいいのかわからないのですか・・・」

「二人のりしたことないの？」

「二人乗りというか、こういった乗り物はなかったもので、飛べますし」

そういえば本物の天使だったんだっけ。

「それじゃあ、僕にでも捕まってる。落ちないようにね」

「分かりました。しっかり捕まってますね」

「つくひゃ！」

変な声を出してしまった。いや胸あたってるし！これは注意するべきなんだろう。だけどこの幸福な時間を大事にしたいし、いやでも僕の良心が・・・

「どうしたんですか？早く行きましょうよ！」

「そ、そうだね。それでは、行きます」

そのままの状態僕は自転車を漕ぎ始める。僕は悪い子です。

「そういえば名前、言っただけだね。僕は神木奏吾って言うんだけど、君の名前は？」

「あつ、はい。私の名前はルリエル・キュール・シュトラレーゼです。みんなはルリって呼んでいるので、奏吾さんもルリって呼んでください」

「うん、わかった。それじゃあ、よろしくルリさん」

「さん付けなんてしないでくださいよ、奏吾さん。気易くルリって呼んでください」

気安くって・・・

「それじゃあ、ルリさんもさん付けしないでいいよ。」

「そんな分けにはいきません。命の恩人の名前を呼び捨てにするなんて、とてもとても、私には出来ません。それとまたさん付けしてますよ。気をつけてください」

なんだか折れそうもないし、諦めて僕だけ呼び捨てで呼ぶか。

何だか恥ずかしい。結衣以外の女の子を呼び捨てしたことなんかないし。

「改めてよろしく。ル、ル、ルリ」

恥ずかしすぎて今絶対顔赤い。そして呼びづらい。

「はい！よろしく願います。奏吾さん」

家に着くまで数十分、彼女を呼び捨てにすることや、背中に当たる感触のせいで、まともに話をする事ができなかった。

僕達と・・・

数分後、幸せな時間を味わいながら自分の家に着いた。

「着いたよ。ここが僕の家」

「すごいです！ 大きい家ですね」

ルリは自転車から降りてそう言った。

「あつ」

「どうしたんですか？」

「な、なんでもないよ」

つい声にでちゃった。背中が寂しい。

「それより早く中に入ろう」

ポケットの中の鍵を取り出してドアを開ける。

「そうくん！ どこに行ってたの！ 心配で来てみたら帰ってきていなかったし、心配したんだよ！」

「結衣！？ なんで家の中に??」

「そんなことよりも・・・って、その子は誰!？」

結衣の顔がものすごい事になっている。こんな顔見るの久しぶりだな。

って落ち着いてる場合じゃない！結衣になんて説明したらいいんだ。天使とかいっても信用してくれないだろうし、どうしたら・・・

「えっと、彼女は」

「私はルリエル・キュール・シュトラレーゼと言います！」

突然挨拶を始めるルリ。

「ル、ルリエル??」

「はい！ ルリと呼んでください！奏吾さんの妹さん！」

「い、妹??？」

結衣の体がプルプルと震えてる。

「いや、この子は妹じゃなくて」

「きやははは！ 私がそうくんの妹？ ぜんぜん違うよ。私はそ

うくんの幼なじみ。それに私はどちらかというとお姉さんかな」

「いや、どちらかというと妹だと思っただけだ」

「そうくん、今、何かあった？」

結衣の顔は笑っているのに、なんだか殺気を感じる。

「いや何も・・・それより自己紹介！　ほら、ルリはもうしたんだから、次は結衣の番だよ」

「そうくんは呼び捨てで呼んでるんだ。そういった関係なの？」

「何言ってるの！？　そんな訳ないだろ！」

「もう、声大きいよ。冗談だって。私は高野　結衣。そうくんとは幼稚園からずっと一緒なんだ。よろしくね、ルリちゃん！」

笑いかけながらルリにいった。

その笑顔からは、さっきの殺気が混じったものではなくて、僕が今まで観てきた中での最高の笑顔をしていた。

ほんと、嫌味がまったく見られない笑顔なんだから。

「はい！　よろしくお願いします。結衣さん！」

「結衣さんとかいいよ。なんか堅苦しいし。結衣ってよんでもしくは結衣ちゃんで」

自分でちゃん付け要求するな。

「それでは、よろしくお願いします。結衣ちゃん！」

僕にはさん付けなのにな。僕もちゃん付けしてもらおうかな。

「それじゃあご飯にしようか。早速つくるから、リビングにでも行つてちよつとまっててね。結衣も食べていく？」

「そうくん！」

なんかこつちを見て笑ってる。

さっきの笑顔とちがって何か怖い。

「な、なに？」

「私にご飯つくる！　だからそうくんはルリちゃんと待ってて」
「なんだって！？」

結衣がご飯を作る！？

あんなにおつちよこちよいとはレベルが違いすぎる結衣が！？

「いやいやいやいや！ 遠慮しとくよ！ 結衣も疲れてるだろ？ 僕がつくるから」

なんとか回避しなければ、結衣が料理なんてキッチンが爆発しかねない。そうでなくてもポイズン料理が出てきかねない。

「そんなに遠慮しなくていいよ。そうくんも疲れてるじゃない」

「全然だよ！ すごく元気！ 元気すぎるくらい元気！！」

「そうなの？」

「うんうん！ そう！ だから料理はぼくにまかせて」

「なら、私が料理作ってる間に部屋の掃除でもしたらどう？」

「部屋？」

「うん。どこの部屋も、ものすごく散らかってるよ？」

「泥棒！？」

「泥棒じゃなくて、はいこれ」

そういつて結衣は僕に一枚の紙切れを渡す。

『そうくんへ』

部屋の片付けよろしく（笑）

「（笑）ってなんだよ！ 片付けくらいしていつてよ。」

「それじゃあ、料理つくってくるね！」

・ ・ ・ 結衣がキッチンにいつちゃった。

手紙にツツコンでる場合じゃなかった。

「私は料理の方はあまり得意ではないので、部屋の掃除手伝いますね」

「あ、うん・・・ありがとう」

この後どんな物食べさせられるんだ。
もう腹をくくるしかない。

「先にリビング片付けちゃうからルリも一緒に来て」

「分かりました！ リビングですね。必ずお役に立って見せます
！」

「ルリはすごいやる気だね。そんなに掃除すきなのか？」

「いいえ。ですが奏吾さんには恩を返さなくてはいけないので。」
そんなに恩なんか感じ無くていいんだけだな。

「あれっ？ 奏吾さん。全然綺麗じゃないですか？」

僕達がリビングに入るとルリが言った。

確かにきれいだ。母さんが散らかして行っただんじやなかったけ？

「あつ、そうくん！ リビングは私が片付けといたから。」

「結衣が！？」

「なんでそんなにおどろくの？」

「い、いや、別に、おどろいてなんか」

びつくりした！！

ゆいが掃除できたなんて、整理整頓できたなんて。考えられない。
もしかして結衣、嘘を付いてるんじゃないか？それかあんまり散らかしてなくて、簡単に片付けられたか。そうだ！そうに決まってる！！

「奏吾さん。どうしてにやけてるんですか？」

「にやけてなんかいないよ。そんなことより結衣！リビングも片付いてることだし、手伝うよ！」

これで変なものの食べさせられずに済むぞ。

「そういえば結衣。どうやって家の中に入ったの？」

幼なじみだからといって合鍵を渡しているわけでもないし、玄関の鍵だつて一度帰ってきたときにしっかり確認したのに。

「そうくんのお母さんに、そうくんのことよろしくっていつて鍵、渡されちゃった。その時にご飯も作ってあげてって」

か、母さん！ なんて余計なことを。助けになるところか、逆に負担になってるから！ それにいつ鍵渡すタイミングなんてあったんだ？ 家が出るのが遅かったみたいだ。今頃空港くらいかな。飛行機に乗り遅れなければいいけど。

「ってことで、私が作っちゃうね。材料も家から持ってきたから」
「そうなんだ。助かるよ。それじゃあ、僕も手伝うね」

結衣が安全にキッチンから生還できるように監視をしておかないと。

「ありがと。でも、二階の掃除はしなくていいの？」

「二階？」

「うん二階。すごいことになってるから。手、付けてないし」

すごいことと言ってもどうせすぐ終わるだろう。結衣がリビング綺麗に出来るくらいだし。

「わかった。二階をササツと片付けてくるから、そしたら料理、作るの手伝うからね」

「わかったから、はやく片付けてきたほうがいいよ。ご飯できたら呼ぶね」

結衣のやつ、終わらないと思ってるな。結衣が片付けられたんだ。僕にできないわけがない。ルリもいることだし。

「それじゃあ、いこっか」

「はい！ 頑張りましょうー！」

それじゃあ二階に上がってっと

前言撤回。

なんだよ、この散らかり用。ドアというドアが開いていて、そこから服やら靴下、かばんと、あらゆる物が飛び出している。そのせいで廊下は足の踏み場もない。

「すごいですね！ やりがいがありますー！！」

「はあーっ。一体どうしたらこうなるんだ？」

とりあえず足の踏む場所を確保しないと。

「ルリ、廊下にある物拾っていいこうか」

「はい！ 廊下にある物ですね」

元気良く返事して、ルリは素早く服やら何やらを拾って行く。僕もそれに続くように拾っていく。

「うわっ、僕の部屋まで散らかってるし。」

だいたい拾い終え、今は部屋の中の確認をしているところで

「なんで僕の部屋が一番ちらかっているんだ？」

「ホントですね。他の部屋よりすごいです」

二階の部屋の数は3つで、一つは僕の部屋、一つは親の部屋、それでもう一つは、物置みたいになっている部屋がある。

物置部屋は、鞆が少し出ているくらいで散らかっているという感じではなかったけれども、両親の寝室は服や靴下、下着なんかも出しっ放しになっているし、ベッドのシーツやらも散乱している。そんな部屋よりも僕の部屋が一番散らかっている。

服などの散乱はもちろんのこと、机の上にあったCDが落ちて踏まれて粉々になっているし、コンポの配線は誰かが引きちぎったみたいになっているし、ベッドは横にして立てかけてあるし、椅子は倒れているし、棚がただの板になっているし、漫画や教科書は散乱してるし……

言い切れないくらいに散らかっている。というより、ここで一騒ぎあつたくらいになっている。

「なんで僕の部屋だけ」

大切なCD達が……

なんだろう。目がしらがあついや。

「あの、私さつき拾ったお洋服たんじゃいますね」

そういつてルリは僕の部屋を後にした。

今日中に終わりそうもない自分の部屋をやるよりも、先に両親の部屋でも片付けようかな。それに今日は片付ける気が起きない。

とりあえず僕もその部屋を後にした。

「なんで終わらないんだ？」

どれくらいたったんだろう。

僕が両親の部屋を片付けて、ルリが服などを畳み終わったくらいに結衣が僕達を呼びに来た。

「ご飯できたよ！ 掃除も終わったみたいだし、ちょうど良かったね」

「僕の部屋以外だね」

「へ、へ。そうくんの部屋そんなに散らかってるんだ」

「そうなんです。誰かが暴れたみたいになっっているんです」

「そ、それはたいへんだね！ あとで手伝うよ」

なんだか結衣が明らかに動揺している。

「結衣。僕の部屋で何かした？」

「な、なんにもしてないよ。そうくんの部屋にいたら、そうくんが見えたから急いで降りようとしたときに配線に引っかかって机に当たって、CDが落ちてきて踏んじやって、その後本棚に激突したなんて事全然なかったんだから」

それで僕の部屋だけ散らかったのか。というか、隠すの下手すぎ。バレバレだから。

「あれ？でもベットが横になってたのわ・・・」

「そ、それは多分そうくんのお母さんが、そうくんのもってるいかがわしい本でも探そうとしたんじゃないかな」

「結衣は僕の部屋でそんなことしてたのか！」

「ち、違うもん。私じゃないもん！ そうくんのお母さんだっていつてるじゃない！」

「なんで海外行こうとしている人が出発前に、息子のエロ本の隠し場所を探すんだよ」

「え、エロ本だなんて！ そうくんはやっぱエッチな本たくさん持つてるんだね！ 変態さんなんだね！！」

「エッチな本はもってないし、変態なんかじゃないよ！ なんてエッチな本持つてるだけで変態になるんだよ！ もしそうだとしたらこの世の男性の殆どは変態になるじゃないか！！」

「じゃあやつぱりエッチな本持つてるんだ！ 変態さんなんだ！」

「だから違うって！」

「いったいなんでこんなこと言い合っているんだ？」

「うそだよ。男の子なんだから一冊や二冊くらい逆に持ってないと変だよな」

いや、そう言われると何だか逆に恥ずかしい。

「あのー、すみません。ご飯が冷めないうちに食べにいきません」

か？」

「あつ、ごめんルリちゃん！ルリちゃんはお腹へってるんだつたよね。それじゃあ降りて食べよっか！」

そういつて何事もなかったのように階段を降りていく結衣とルリ。「なにしてるの？早くしないと冷めちゃうよ。そうくん！」

僕の部屋を荒らしたこと、怒るタイミングを逃した。怒っても仕方ないからいいけど。

「それにしても結衣の料理か」

「そうくん何か文句あるの！」

「え！いや、文句なんてこれっぽっちもないよ」

「そうですよ、結衣ちゃん。女の子の手料理が食べられるというのに、文句なんか言うはずじゃないですか！」

「そうだよな。それに私が作ったんだし、文句なんかはないはずだよな。というかあるわけないよね」

結衣の機嫌がよくなったみたいだ

それにしても結衣の料理か、どんな物が出てくるんだ？美味しくなくてもいいから普通で。そうでなくても、せめて食べられる物でありますように。

そう願いながら料理が並んでるであろうリビングへ。

「うーん いい匂いです。それにとっても美味しそう！」

リビングに入るとルリが言った。

テーブルの上には結衣が作った料理が並べられている。

確かにいい匂いだし、見た目も想像してたものより断然いい。いや、美味しそうに見える。

「美味しそうじゃなくて美味しいんだから！ふたりとも早くすわって！ルリちゃんはこっち」

椅子は4つあって、僕が座った正面には結衣、その隣にルリがそれぞれ座った。

「私、お腹すき過ぎてもう限界です」

実は僕も、さっきの片付けとかで結構お腹すいてるんだよな。

「それじゃあ、早速たべちゃおう！いただきます」
「いただきます！」

そう言つて、結衣とルリは勢い良く食べ始めた。

「んっ~~~~」

ルリが目を大きくしてうめき声を上げた。

「ルリ！ 大丈夫！？ やっぱり何か変なものでも」

「なんですかこれ？！と~~~~つても美味しいじゃないですか！」

「お、美味しい！？」

何だつて！？ 結衣の料理がおいしい？

「ふっふん そうでしょそうでしょ。そうくんも早くたべてよ。

ほら、早く~~~~」

ごっくん

とりあえず生唾を飲み込む。

ルリがあんなに美味しそうに食べてるんだ。大丈夫。きっとこれは美味しいんだ。そうに違いない。でもルリは天使なんだし、味覚だったり、僕達が食べれないような物も食べられるのかも知れない。でも結衣はたべれてたな。ということは僕が食べても安全なのか？

「もうそうくん！ ほら」

「ほごっ！？」

結衣は僕の口の中に唐揚げらしき物を無理やり突っ込んできた。

「どう？ 美味しい？」

なんだ？この味は。外はカリッとしていて中はジューシー。唐揚げなのにしつこくなく、何個でもいけそうな今までで食べたことの無い味。

「・・・美味しい」

「でしょー！ 私、料理得意なんだ」

他の料理にも手を伸ばす。

ヤバイ。美味しいじゃないか！何なんだこの料理は。

「なんで結衣がこんなに料理できるんだ？」

「お母さんにみつちり鍛えてもらったの。そうくんをいつか驚かせてあげようと思って。頑張ったんだからね」

ものすごく驚きましたよ。

あのドジばかりする結衣が料理や掃除ができるなんて。

「ルリちゃんって、そうくとどういった関係なの？」

結衣が突然そんなことを言い出した。

「奏吾さんは私の命の恩人なんです！ほんとに助かったんですよ！」

「助けてもらった？　そうくに？」

「うん、いや、どういった関係かというと。ほら、りんごあめあげた子の話したじゃないか。その子がルリなんだ」

「ルリちゃんが、私が食べられなかったりんごあめたべちゃったの！？」

「えっ！？　あれ結衣ちゃんのだったんですか？　すみません！私が二つも食べたせいで、食べられなかったなんて。本当にすいませんでした！！」

ルリは椅子から立ち上がって頭を下げた。

「謝らなくていいよ。ルリちゃん！　あげたのはそうくんだし、ルリちゃんは一つも悪くないんだから。もし悪いとしたらそうくんが全部悪い！　そう、そうくんが全部悪いんだよ。だからそうくんは私の言う事一つくらい聞いてよね」

なんか僕に飛び火きたーっ。

「なんでそうなるんだよ。願い事って一緒に夏祭り行っくっていうのがもうあるじゃないか」

「違う！　またそれとは別のお願い。だってルリちゃんに二つあげたんだよ？　りんごあめ」

「うん、そうだけど・・・」

「ということだよ。りんごあめ一つで一つ。二つあげたんだから二つは聞いてもらわないと、数があわないじゃない」

「あわないじゃないって、ちよっとそれは違うんじゃない」

「全然違うないよ！　そうくんは算数もできないの？　2引く1は1になるんだよ？　ということは1残ってるじゃない。そうだよね？」

結衣はニコツリした顔を僕に向ける。

「わ、わかったよ。それじゃあもう一つお願いってなんなの？」

「今はいいよ。また今度お願いするね」

「う、うん。わかったよ」

何要求されるんだろう。あんまり考えたくない。

「うんうん。素直でよろしい　　そういえばルリちゃんってどこから来たの？」

やっぱりきたかーっ。当然その質問は本気で答えられない。空から来たなんて言ったら、僕が最初に思った通り電波さんと思われるでしょう。

それはどうしても阻止したい。

「えっとですね。私は」

ルリがしゃべりだす前に、

「ほら、あれだよ、あれ。」

「ん？あれって？」

ルリの発言は防げたけど何にも思いついてない！ここで下手に親戚とか言っちゃうと後々めんどくさいことになるそうだし、だからといって、迷子の人を家にいれたなんて言ったらまた変態扱いされかねない。どうしたら。

「どうしたの？　そうくん。あれってなんなの？」

「あれってというのは・・・」

「いうのは？」

「それは・・・」

「それは？」

「空のことですよ！」

「そう！空のことですよ。」

「ソラ？そらってあの雲とかある空の事？」

しまった~~~~！もたもたしてる間にルリが答えちゃった。しかもそれに賛同してしまった！どう言い訳したらいいんだ！？

「はい。私、天使なんです。だから正確にいうと、その空じゃ無いですけど。そのもつと上にあるところの事になるんですが」

それ以上ややこしくしなくてくれ、ルリ！

フオローする言葉が全然見つからない。

「あの、結衣。違うんだよ。これはちよつと」

「すごい！空からきたなんて。一体何しに來たの？どうやって來たの？空の世界はどうなってるの？空の上ってことは宇宙に住んでるの？あとあと」

なんか信じちゃってるよ！よくこんなつくり話みたいなこと信じれるな。僕なんか実際に天使の力見るまで信じられなかったし。というか、見ても信じられなかったのに。

「そんなに一変に聞かれても困ります！一つずつでお願いします」

「そうだよな。ちよつと興奮しちゃった！だって本物の天使に見えるなんて夢みたい！私、小さい頃から天使に会いたかったの。もう嬉しすぎ！！そうくんありがとう。ルリちゃんと合わせてくれて！！なんて笑顔するんだ。悪い気が全くしない。」

「うん。よかったね」

なんだかわからないけど、信じてもらえてよかった。

「ルリちゃん！それじゃあまず一つ目。なんで空から地上に降りてきたの」

「そういえば僕も聞いてなかったな。どうしてなの？」

「えつとですね。それはちよつと恥ずかしい話なんですけど、あんまり笑わないでくださいね」

「うん。そんなに笑わない」

ちよつとは笑うんだ。

「えつとですね。私、ジャジちゃんと鬼ごっこをしてたんですよ」「ジャジちゃん？」

「はい。私の友達のジャジちゃんです。それでジャジちゃんが鬼

で私はジャジちゃんの攻撃をうまく避けていたんですけど」

「えっ？ 攻撃って何！？ 鬼ごっこなんだよね？」

「そうですよ。鬼ごっこといえば、鬼が攻撃してくるのを避けては逃げる。そういう競技じゃないですか」

「競技なの！？」

「？ 攻守を分けて決着が着くまで戦かう競技じゃないですか。空の世界では今、もっともブームな競技なんですよ。こっちは無いんですか？」

「そんなの無い！」

なんて危なっかしい競技なんだ。地上の鬼ごっことはえらい違いがあるみたいだ。

「ないんですか。残念です。奏吾さん達ともやりたかったんですけど」

そんな危ない競技、普通はしたがないよ。

「私、やってみたくーい！」

・ ・ ・ 普通はね。

「いや、やってみたいじゃないから」

「いいじゃん、いいじゃん。とっても面白そうだし。やってみたい！」

「やってみたって、ルールもいまいちわかんないし」

「教えてもらえばいいじゃんか。ね、ルリちゃん！」

「はい！私でよければ」

「そんなのいいに決まってるよ。ルリちゃんしか分かる人いないしね。」

「それでは、えっとですね」

「いや、話が逸れてるから！ルールなんて後でもいいんじゃないかな？」

「良くない。今聞きたいの！」

「簡単なルールなんで、説明なんてすぐ終わりますよ？」

「わかったよ」

ルリがこつちに来た理由を早く知りたいのに。

「まず、鬼をどちらがやるかを決めます」

「じゃんけんとかでもいいの？」

「何でもいいじゃん。」

「決め方は自由ですよ。ちなみに私達はじゃんけんできめましたけど」

その情報は別にいらないから。

「それで決まった鬼は、相手を、天力などを使って攻撃をします」

「天力？」

「はい。私達の力の事です」

「あの小鳥を助けた時の力のこと？」

「そうですね。力の種類は少し違いますが」

力の種類ってなんだ？

「それでそれで。どうしたらいいの？」

結衣が話を急かす。

「それですね。相手を撃ち落としたほうが勝ちです」

「撃ち落とす！？」

「はい。撃ち落とします」

「すごく危険な遊びじゃないか！」

「遊びじゃありません！ 競技です」

「そんなのどっちだっていい！ 競技でも危険なことには変わらないから！」

「それでルリちゃん負けて落ちてきたんだね！」

「恥ずかしながら」

「いや、恥ずかしながらとかじゃないよ！ 怪我とかしなかったの！？」

「なんとか力を使つてうまく着地ができたので、無傷です」

「それはよかったよ。もしルリちゃんが怪我なんてしてたら、とっても大変なことになってたから」

「いや、ほんとに良かった」

心から思う。

「二人とも心配してくれてありがとうございます！」

ルリは席をたって深々とお辞儀しながらお礼を言った。
いちいち立たなくても。

「そしたらルリちゃん、天使っていっぱい地上に落ちてきてるの？」

結衣がルリにそんなことを言った。

確かに僕もそう思う。競技になっているくらいだから普通に一般人にも人気がありそうだし、必ず一日は誰かがやっていそうだし。

「そんなことは無いですよ。私の場合は特別なんです。私がいた空の世界は特別な力が働いていて、その力で下には、地上には落ちないようになっているんです。だから、普通は地上に落ちる前にその力で防いでくれるのです」

「特別な力って、さっき言ってた天使の力のこと？」

ルリの世界は僕の知らないことが多すぎる。

「天使の力とは違います。正確には天使の力を使っているんですけど」

「ルリちゃん！ そうくん！ もういいじゃない。そんな話、ぜんっぜんわかんないよ。はい、だからこの話はおしまい」

「おしまいとか、僕はもっと聞きたいことが」

「なら後で聞いて！ 私が面白くないじゃない？ 暇になるじゃない？ 楽しくないじゃない？ そしたら、寂しいじゃない！！ だ・か・ら、終わりなの」

「そんな強引な・・・」

「ごめんなさい！ こんな美味しい料理をつくってくれた結衣ちゃんに寂しい思いにさせてたなんて。今はもうこの話はいたしません」
「いや、それはちよつと困るんだけど」

「そうくん！ わかつてるよね」

まだ聞きたいことがたくさんあるんだけど、また結衣の機嫌が悪くなっても困るしな。

「わかったよ。この話はおしまい」

「うん　さすがそうくんは物分かりがいいね」

物分りって・・・結衣の機嫌を保つのも大変だ。

「それじゃあルリちゃん、ルリちゃんのいた所の話を教えて」

「いやいやいや、さつきこの話しは終わりって結衣は言ったんじゃないか！」

「違うよ。私が言ったのは難しい話は終わりって言ったの。そうくんはルリちゃんのこと知りたくないの？私はもっともっとルリちゃんの事知りたい。友達の事は何でも知りたいじゃない！」

さつきから僕は知りたがっているのに、邪魔してるのは結衣じゃないか。

ルリの方に目をやると呆けた顔をしている。

「友達・・・ですか？」

「そうだよ！　私達はもう友達に決まってるじゃない！」

「決まってるんですか？」

「そうだよ、決まってるの！　私達はあつたその時からもう友達。それはもう決まってたことなの。そうだよ？　そうくん」

「そうだね」

全く、結衣はいつもこうだよな。「友達に決まっている」結衣はこれで誰とでも友達になるんだよな。この言葉は何だか知らないけどそんな気にさせる。友達であることが決まっていたと思わせられる。洗脳されているみたいない方だけど、それとは全く違う。運命を感じるみたいな感じなのかな。言い表しにくい。要するに全く悪い感じがしないってことなのかな。

「私、とっても嬉しいです！　私も何だか結衣ちゃんと奏吾さんとは友達になることが決まってたみたいに思えてきました」

ルリは笑顔を僕と結衣に向けてくれた。その笑顔は、さつきまでの笑顔とは違ってとても柔らかく、温かみのある物に思えた。

「それじゃあ、ルリちゃん！　ルリちゃんの事もっと知りたいからいっぱい教えてね。私たちの事もしっかり教えてあげるから。心

配しなくていいよ」

「はい！ お互いを知ることとはとっても大事ですもんね。と、友達の話は」

ルリは少しうつむきながら言った。その頬は少し赤に染まっている。

「さつきはルリちゃんの話聞いたから、今度は私の事を、で、其の次はそうくんね。それからルリちゃんの話聞くからね」

「ね　じゃなくて、今はルリの事少しでも知りたいんだけど、今後の為にも」

「別に時間はまだまだあるんだしいいじゃない。それにルリちゃんも私たちのこと知りたいだろうしね」

結衣はニヤけた顔をしてルリに視線を向ける。

「そうですね。私も二人のこと知りたいです！私、二人のこと名前くらいしか知りませんし・・・」

「ほら、そうくん。ルリちゃんだって私たちのこと知りたいんだよ。だから私たちのこと話そう。いいよね？」

「いいよねというか・・・」

「いうか？」

なんて目で見てくるんだ。そんなキラキラした目で見られると、
「わかったよ。結衣の言うとおり時間もあることだし、僕達の話も話そう。僕もルリに自分の事を知ってもらいたいし」

それに地上の常識も話しておきたいし。さつきからルリの話聞く限り、空とは常識が少し違うみたいだし。

「うん　それじゃあ私の事から、もう一度自己紹介から始めるね。私の名前は高野　結衣。ぴちぴちの高校二年生です」
ぴちぴちとか自分というな。

「それでそうくんとは幼なじみなの。えっとね、幼稚園の頃からずっと一緒に、小学校、中学校、高校とずっと一緒にクラスなの。すごいでしょ」

「すごいですね。私も幼なじみがいますけど、そんなずっと一緒に

のクラスなんてなかったですよ！」

「ルリちゃんも幼なじみがいるんだ！どんな人なの？」

人の質問を遮るな！

「ルリのこととはあとで聞くんじゃないの？」

「いいの。聞きたい時に聞くのがいいの。こういうのはノリが大事なの」

いや、ノリとか、さっきと全然話が違うし。

「えつとですね、私は幼なじみが二人いて、一人はさっき話したジャジちゃん、もう一人はオルカちゃんです。二人とは小学校の頃からずっと一緒に遊んでる仲なんです」

「ジャジちゃんとオルカちゃんか。二人も幼馴染みいるなんてすごいね！」

「はい！でも最近オルカちゃんが一緒に遊んでくれないんです。私なんかしたのでしょうか」

「ルリちゃんがなんかする訳ないじゃない。気にすること無いよ」

「そういつてもらえると嬉しいです」
なんか人生相談みたいになっちゃってる。たいして良いアドバイスになっちゃいないけど。

「結衣。とりあえずルリのことは置いて、自分のことを話したら？学校の事とか、友達のこととか」

「しかたないな。ルリちゃん。そうくんが私のこと知りたいみたいだから、私のこと話してもいい？」

「僕は結衣のこと知ってるよね！？それにさっきから結衣の話をしているんじゃないかな？たんだっけ！？」

「それは仕方ないですね。私も結衣ちゃんのこと知りたいから話して下さい」

「いや、だから」

「えつとね」

僕の話聞いてよ！

ピロリロリ〜ン

「あつ、ごめん。私の携帯。お母さんからだ。もしもし、お母さん、どうしたの？ えっ、うん。そうだけど。うん、大丈夫だから、そうくんいるし。迷惑なんかかけてないよ。でも、うん。わかったよ。わかったつてば。うん。それじゃあね」

「どうしたの？おばちゃんから？」

「うん。そうくんに迷惑が掛かるからもう帰ってきなさいつて。私迷惑なんかかけてないよね？」

さすが結衣のお母さん。娘の事は良くわかっていなさる。

「わかったから、結局帰るの？」

「うん。怒られちゃうしね。ルリちゃんごめんね。私の話あまりできなくて。明日またくるからその時いっぱい話そ」

「はい！また明日お願いします」

「それじゃあ、僕が送るよ。もう時間も遅いし」

「いいつて。私よりルリちゃんを一人にしておくほうが危ないよ？」

「私の事は心配しなくても大丈夫ですよ。私だって留守番くらいできます。子供では無いですから」

子供とかの問題じゃないんだけだな。結衣の言う通りルリの事は心配だ。一人にしておくことはできない。

「ルリちゃん。私も一人で帰れないような子供じゃ無いんだよ。家も近いことだし、こっちの世界に慣れてないルリちゃんを一人にするほうがよっぽど危ないよ」

「・・・でも」

「そうくんはいいよね？」

「わかった。だったら僕の自転車使って帰りなよ。子供じゃないし、家が近いと言っても結衣は女の子なんだから。それでルリも安心出来るだろうし」

「わかった。そうさせてもらうね。もう！どれだけ私のこと心配してくれるの、ルリちゃんは。とくくくくても嬉しいじゃない！！」
ルリの納得していなくて心配そうな顔をみて結衣が言った。

その言語を聞いたルリの顔は照れくさそうな笑顔に変わっていた。

「それじゃあ結衣。また明日」

玄関をでて自転車にまたがる結衣に別れの挨拶をする。

「本当に気を付けてくださいね」

「わかってるって。ルリちゃんも大変そうだけど頑張ってね」

「はい。奏吾さんもいるので私は大丈夫です」

「だよ〜。けどそうくん以外と頼りないから気をつけてね」

結衣は目を細めてこっちを見る。

「なんだよ、その目は。それじゃあね」

「はいはい。それじゃあね。ルリちゃんもまた明日」

「はい！それでは気をつけてください」

結衣はペダルに足をかけて勢い良くこいでいった。

結衣の姿はすぐに見えなくなっただけ、その間ルリはずっと結衣を心配そうな目で見守っていた。

なんだ！？ この気まずい雰囲気は。

結衣を見送ってからリビングに戻ってテーブルに着いた僕とルリ。さっきまで賑やかな結衣がいたので会話には全く困らなかったけど、いきなり二人になると話すことが何も浮かばないぞ。ルリに聞きたいことはある程度聞いたし、結衣がいないときにあんまり聞いてしまうと、明日結衣がスネるだろうし。何を話題にして切りだしていけばいいんだろう？

「これってテレビですか？」

「ん？そうだよ。そっちの世界にもテレビってあったの？」

「テレビはあります。番組も結構あって退屈しないです。こっちの世界ではどんな物があるのか見てみたいです」

「そうなんだ。それじゃあ付けるよ」

僕はテレビの電源を付けた。

そこでは料理番組が映しだされた。

「とっても美味しそうです」

テレビに目をやりながらヨダレを垂らす。

それにしてもテレビに食いつきすぎじゃないか？

「ルリは食いしん坊なんだね」

「それは否定しませんが、こっちの料理はどれも魅力的で美味しそうなんですよね。食べたくなるのは当然です！」

ルリの顔は笑顔になっていた。その笑顔をみた僕は、自然と緊張が解けていた。

「あつ、そうだ。お風呂どうする？」

「どうするって、一緒に入るかって事ですか？」

「違うから！ そんなやましいことなんかこれっポツチも思っていないから！！僕が聞きたかったのは今入るかどうかってこと」

「そうだったんですか。私はてっきりいっしょに入るのがこっちでは常識かと思って」

「常識じゃないから！ そんなエッチな常識はないから！！」

こっちの常識しらないにもほどがあるって程度じゃない！？ 勘違いすら通りこしてる。

僕の言葉に反応してか、ルリの顔が一気に赤く染まる。

「別に私がエッチなのではなくてですね。エツトですね、それよりお風呂ですよ！ 私が先にお呼ばれしてもよろしいでしょうか！
！！！！」

「わかった、わかったから！」

恥ずかしがりすぎて声にちからが入りすぎだから。ご近所迷惑だから。明日苦情とか言われなきゃいいけどな。

「お風呂はリビングをでたところの左の廊下をまっすぐ行つたところにあるから。タオルは置いてあるの使つていいよ。着替えは後で持っていく」

「わ、分かりました。でわ、行つてきます！」

そう言つてルリは勢い良く出て行つた。

「ふっ。これからどうしよう」

何日かは家に置いてあげることが出来るだろうけど、母さんが帰ってきたらなんて説明したらいいんだ？さすがに母さんだって身も

知らない女の子を家に上がらせてるだけでなく、何日かは泊まったことになるのだから。何を言われるのか。言われるだけならまだいいけど。

「まっ、母さんが帰ってくるまで何日かはあるんだ。ゆっくり考えよう。それよりもルリの着替えを早く持つていかないよ」

お風呂上がりのルリと鉢合わせなんてことにはなりたくないからね。一度ルリの胸を不可抗力とはいえ観てしまったのだから、これ以上そんなハプニングが起こると変態のレッテルをはられかねない。着替えはとりあえず母さんの服でいいとして、下着は今日着ていたヤツで我慢してもらうしか無いかな。明日くらいに結衣にでも頼んで買ってきてもらおうか。

2階に上がって一番でかいサイズのパジャマを取り出してルリが入っているお風呂場へと向かう。

家のお風呂は少し広めの脱衣所があつて、そこには洗濯機が置いてあり洗面台もある。なので、ルリがお風呂場にいる限り決して覗きにはならないということ。安全に着替えを待つていけるということだ。

脱衣所に続く扉をノックする。シャワーの音は聞こえるけど用心に越したことは無い。

「返答なしっ」と

風呂場にいるとこのノックは大抵聞こえない。これで安心して中に入れる。第一試験突破といった所かな。

ドアノブをひねって中に入る。

「なっ!？」

脱衣所には丁寧にたたまれた服と下着が綺麗に別れて置いてあった。

なんなんだこれわ!？ 僕さつき着替え持つて行くつて言つたよね! こういう時つて普通下着は隠すよね! 僕は試されてるの!？ とりあえず落ち着こう。ここで慌ててしまつては駄目だ。変態のレッテルをはられるのはごめんだ。これから顔を合わせづらくなる。

ここは冷静に判断しろ、僕！脱いだ服は洗濯したほうがいいから洗濯機の中へ入れよう。

とりあえず服を洗濯機の中へ入れる。

次は下着。変えが無いからこれはそのまま。触ったのがバレれば変態……

とりあえず、予想外の出来事だったけど第二試練突破！

このまま、あとは着替えを持って来たことをルリに告げて置いていけば任務完了。これが最終試練だ！ 今までの試練の中で一番ハードルの低い試練、ここで失敗する余地はない。

しかし、ここで考えるべきことはルリにどうやって知らせるかと言う事。「ノックで知らせる」か、最初から「声をかけて知らせる」の二択。ノックは突然の音にびっくりさせてしまうかも知れないし、不審者が来たかも知れないという恐怖心を与えてしまうという危険を犯さなければならぬ。ということは答えは一つ。「声をかけて知らせる」だ。これなら多少はびっくりさせてしまうという危険は伴うけど、誰が来たかは分かる。こっちの世界に慣れてないルリの事だから怪しいやつが来たのと勘違いさせてしまったら申し訳ない。「……でもちよつと緊張するな」

こういう感じは初めてだからすごく心臓がバクバクしている。段々耐えられなくなってきた。そろそろ試練を終わらせないと。シャワーの音でかき消されないように大きめの声で言おう。

僕が息を大きく吸い込んだと同時にシャワーの音が止まる。

「ルリ！」

ガチャリ 扉が開く。

「はい！なんで……きや~~~~~~~~~~~~つ」
「いだっ！！」

おもいツきり顔を殴られた。いたい！それにまた赤い物が垂れているような。これは殴られたから垂れているに違いない！そうであって……何だか視界が薄れて

「ご、ごめんなさ~~~~~~~~い！！！」

「謝る前に・・・服を着よう」

そこで僕の意識はどこかへ行ってしまった。
弁解することもできずに。

僕が気がつくところはまだ脱衣所のような。

一瞬意識を失っていたみたいだ。

そういえばなんで意識なんか失っているんだっけ？

「あつ！」

自分がやってしまったことを思い出して勢い良く起き上がる。

「奏吾さん！大丈夫ですか？ごめんなさい私のせいで」

ルリは僕が持ってきた服に着替えていた。というより、服を羽織っていたというのが正しいのかな？ボタン止まってないよ。

「奏吾さん！また鼻血が出てます！」

それは君のせいです。

「大丈夫。あの、こつちこそさつきはごめん。覗くとかそんな変な気持ちはなくて」

「はい。奏吾さんが覗きなんかないのは分かっています。脱衣所の外から声をかけているのかと思ってお風呂から出てきてしまったのは私ですから」

それでドアを開けたのか。でもなんだか不可抗力だと思ってくれているみたいだし、良かったのかな？でもこのままじゃあ接しづらくなってしまう。なんとかしないと。

「それじゃありビングの方に帰ろうか。それとルリの服は洗濯機の中に入ってるから。後で洗濯しておくね」

「はい。よろしくお願いします」

「あと、ボタンは閉めようね」

「えっ？はい。すみません！」

会話がつながった。これでなんとか沈黙という最悪の結果はまぬがれたよ。

二人でリビングへ移動。ルリはさっきのことがなかったかのように僕に接してくれる。やっぱりルリはいい子だな。またテレビを付

けるとルリは食い入る様に見ていたので次は僕がお風呂に入ることにした。

「今日は一日いろいろあったな」

結衣に振り回されたり、ルリに動揺させられたり、正直疲れた。僕がお風呂から上がるとルリはうとうととしていた。

「ルリ。もう寝ようか」

体がビクとなるルリ。

「一緒にですか？」

「違うって!!」

このやりとり今日で二回目だから!その流れはもういいよ・・・

「ルリは母さんのベットで寝なよ。客間で寝るよりそのほうがずっと寝やすいだろうし」

「・・・はい」

つぶやく用に返事をする。ルリにも今日は大変な一日だったろうし相当疲れてるだろう。

ルリを立たせて二階まで連れて行く。

「大丈夫?ほら、しっかり立って」

「・・・ふあい」

そろそろ限界のようだ

両親の部屋に入って母さんのベットまでルリを連れて行った。

「今日はここで寝てね」

「・・・」

駄目だ。もう返答が無い。

「ほらベットに入って」

ルリはもそもそとベットに入っていた。すぐにルリのスヤスヤという寝息が聞こえた。

「ふあ~~~~っ。僕も眠い。明日に備えて寝よう」

明日は今日より大変な一日になるような気がするし。

僕は自分の部屋のベットにもぐりこんで熟睡を決め込んだ。つもりだった。

ギシギシギシ

階段から誰かが上がってくる足音が聞こえる。

なんだ！？その足音はルリが眠っている部屋の前で止まる。ドアが開く音がしてその足音が消える。

部屋に入ったのか！？泥棒？やばいぞ。ルリに何かあったらどうするんだ、僕。

どんどん

走って誰かがこっちにやってくる。

もしかしてルリ？僕に助けを求めにきたのか？

ベットから出てルリの元に向かおうとしていた足が止まる。

ばんっ！！

勢い良くドアが開く。

「奏ちゃん！この子誰なの？可愛いじゃない！！」

「へっ？」

そこには僕の母さん 神木奈々が立っていた。ルリを抱えて。

「ルリ！！」

「ふえい？」

寝ぼけてる！？

一体どうなってるんだ？父さんに会いに海外にいつてるはずの母さんがどうしてここにいるんだ？なんで？どうして？

眠気やら、体の疲れやらで僕の頭の中は何も考えられなくなっていた。

というより何も考えたくない。

今日はもう寝かせて！！

「それで、なんで母さんが家にいるの。今頃飛行機の中のはずなのに」

今はリビングで母さんと二人。ルリは起きていられる状況じゃなかったのもまた母さんのベットに。

「えつとね、それが・・・飛行機乗り遅れちゃった。テヘツ」
やっぱり乗り遅れてる！それより

「テヘツ。じゃないから！可愛くいつてもダメだから！だからって首を傾げても可愛くないから！」

「可愛くないってひどいじゃない。奏ちゃんはお母さんが不細工だとしても言うの？それともブサイクなお母さんが好みだっていうの！？」

「ブサイクな母さんが好みなんて誰もいつてないだろ！」
「そりゃ可愛いほうがいいけど」

「・・・じゃなくて！父さんとは連絡とったの？父さんきつと心配してるよ」

「大丈夫。お父さんには元々連絡してなかったし。テヘツ」

「テヘツって、だから可愛くないから！何回使っても可愛くならないから！歳を考えてよ。もういくつになったと思ってるの！？」

「いくつって。女の人に歳を聞くの？奏ちゃんも男の子なんだからそういうところ気を付けないと。女の子にもてないぞ」

「もてないぞって・・・今はそんな話をしてるんじゃないで。父さんに連絡してないってどういうこと！？」

「お父さんをびっくりさせようと思つて。だってその方がおもしろいんだから」

「だからって・・・僕さっきから何々ってしか言えてない！？ふざけてないでまともに話をしない！？」

「お母さんはさっきからずっと真剣に話をしているじゃない。だから、あの子は誰なのって聞いているの」

母さんの笑顔が

「えっ？えつと、そんな話をしているんじゃないで」

「そんな話？私がない間に若い女の子を家に入れて、そればかりか私のベットまで使わせえ挙げているなんて。それが、そんな話なの？」

「・・・ごめんなさい。勝手に女の子を連れ込んで」

「はい、分かりました。許します！」

「単純！？そんな簡単に許してもらっていいの！？」

「ん？許してほしくないの？それとも、もつと怒りたいの？奏ちゃんMなの？」

「違うから！Mじゃ無いから、勘違いしないで！だって理由も聞いてないのに許す何て、どうしてって思ったから」

「どうしてって、奏ちゃんのことだから何か分けがあるのは分かっているし、そんな奏ちゃんの易しさを叱ることなんてできない。でも訳は聞かせてね」

そういつて母さんは笑顔でいつてくれた。

母さんにこんなに信頼されているなんて、何だか照れくさい。

「うん。訳は話すよ。ちよつと長くなるんだけど」

僕は母さんに今日あつた事を話す。

「長くなるんないいや。今日はもう疲れたしハズだつただけだな。」

「でも今話しをしておいたほうが僕はいいんだけど何があつたか繊細に話もできるし。」

「でも、あの子も一緒にいた方がよさそうだしねそれもそうか」

「それじゃあ明日、朝食の時にも話すよ」

「そうして。あつ！でもあの子の名前だけでも教えてくれる？」

「うん。彼女はルリエル・キュール・シュトレーゼつて、僕達はルリつて呼んでる」

「わかつた。ルリちゃんね。それじゃあ私は寝るから。電気消しといてね」

「ねるつて、母さんのベットはルリが使っているんだし、父さんのベットでネルの？」

「ルリつて、呼び捨てにしている仲なの？二人は」

「ち、違つて！そんなんじゃないなくて」

顔が暑い。火が出そうだ。

「はいはい。それも明日聞くから」

あくびをしながらリビングを出て行く母さん。

「もう、勝手なことばかりいつて。結局僕がいったことスルーして行くし」

ほんとに調子がいいんだから。それにしても、僕もそろそろ限界。「・・・寝よ」

僕はリビングの電気を消して自分の部屋へと向かった。

途中、母さんとルリが寝ている部屋の扉が空いていたのでちらっと目をやると、一緒にベットに二人して寝ていた。

とっても寝にくそうだ。

僕は部屋に戻ってベットに潜り込む。今日あったことを考えながら。

そして、僕はいつの間にか深い眠りについていた。

迷子と3人で（前書き）

書いてたら長くなってしまった（焦

迷子と3人で

「ん〜っ。ふう」

ベットから起きて大きく伸びをする。時間は午前6時。

「4時間くらい寝れたかな」

そんなことをつぶやきながら窓をあけて部屋の換気をする。

今日も晴れ。これで昨日洗濯した服を乾かせられる。

「そうだ。朝食の支度を始めないと。母さん朝から結構食べるしな。それに」

ルリだっている。今もあまり信じられないけど、女の子が寝ている部屋に勝手に入って確認するなんてできないし。ほんとにあったんだよね？

僕はルリと母さんが寝ている部屋を通って階段を降り、キッチンがあるリビングへと向かう。

「あれ？ 何だかいい匂いがする」

母さんがもう起きてきたのかな？ そういえば昨日空いていたドアも閉まっていたし。

「それならもつと寝ててもよかったかな」

そんなことを考えながらうとうとした頭でリビングへと入る。

「そうくん！ おはよう！！」

「ずわっ！」

「ずわってなに？ そうくん。朝の挨拶はおはようございますだよ？」

驚いた。結衣がいることもだけど、結衣の声にすごく驚いた。

「結衣が大きい声出すからだろ。だから変な声が出ちゃっただけだよ！」

「そうくん。朝の挨拶は元気よく。一日の始まりの挨拶に元気がないと、その日一日元氣のない日になっちゃうんだよ。わかったら

そつくんも元気よく挨拶。はいっ、おはようございます!!」

元氣いい挨拶と声の大きさはあまり関係ないと僕は思うけど。

「・・・おはようございます!」

「うん! よろしい」

結衣は満足したような笑顔を僕に振りまいてキッチンの方へと入った。

「結衣が朝食つくってくれているの?」

「そうだよ。さっき部屋を覗いたら皆寝てたみたいだったし。それにそつくんの事は奈々さんから頼まれていたしね」

本人はもう帰ってきているけど。

「そっか。でも何だか悪いね。結衣には昨日もつくってもらったし」

「そんなことないよ。私も自分が作った料理を美味しく食べてもらえて、とっても嬉しいんだから。気にしないでね。それより顔、洗ってきたら?」

「うん。そうさせてもらうね」

僕はリビングを出て洗面所兼脱衣所に向かった。

昨日はここでルリに蹴飛ばされたんだっけ。

そんなことを考えながらささと用事を済ます。

「結衣。僕も何か手伝うよ」

リビングに戻って結衣に申し出る。結衣ばかりに任せっきりっていうのも悪いし。

「ありがと。でも、もうできちゃってるから大丈夫だよ」

テーブルを見るともう豪華な朝食が並んでいた。

「それじゃあ私はおばさん達をおこしてくるね」

結衣はエプロンを外してリビングを出て行く。

「あっ、そつくん」

結衣がドアを開けたところで止まる。

「なに?」

「つまみ食いなんてしたらだめなんだからね。皆でいただきます

して一緒に食べるんだから」

「子供じゃないし、そんなことしないよ」

「だよね」

結衣は僕に笑顔をみせてからリビングを出て行った。

「それにしても美味しそうだな」

昨日食べたのも僕の予想を見事に打ち砕いてくれた味だったし。
食べたい。

「ごくっ」

生つばを飲み込む。

「でも、結衣とは約束したし。つまみ食いなんて・・・」

くっ、まさか結衣の料理にこんな中毒性があるなんて。目の前にあつたら耐えられない。

「なら目をそらせばいいだけじゃないか」

テーブルとは反対の方向を向いたらいいだけ。

「の筈なのに。匂いが・・・」

我慢出来ない。我慢ができない。

でも、確か結衣はつまみ食いはダメって言ってたけど、味見をしてはいけないとは言ってなかったよね？それにこれは本当に美味しく出来ているのか確認しないとイケないんじゃないかな？ルリや母さんにも美味しいものを食べてもらいたいし。それに結衣がもし味付けに失敗していることに気づいてなかったら？それで僕達と一緒に食べているときにそれに気づいたら？結衣は大恥をかくかも知れない。僕は全然気にしないし誰も気にしないと思うけど、変に気を使う訳にもいかないし。こんなに朝早くから来てくれた結衣に申し訳ない。だからこれはつまみ食いとは言わない。そう、これは味名！

「ということで、いただきますーす！」

テーブルの上に並んであつたソーセージをつまんで口の方まで持っていく。

バンっ！！

「うわっ」と

僕はソーセージを落としそうになりながらも音がした方へ、つまりリビングのドアに恐る恐る眼をやる。

「そうくん。今、いただきますって聞こえたんだけど」

「えっ？ なんのこと？」

何とかとぼける。

「じゃあ、その手に持っているソーセージはなんなの！！」

「いや、これは味見を」

「もう！そうくんは朝御飯抜き。反省しなさい！！」

「そんな・・・」

「朝からどうしたんですか？喧嘩はいけないことなんですよ」

ルリが眠そうな顔をしながら、その後ろから母さんがリビングに入ってきた。

「喧嘩じゃないわよ。そうくんが悪さをしたから叱っていただけ。ほら、早く座って！せつかくの料理が冷めちゃうよ」

「そうだったんですか。奏吾さん、悪さなんてして結衣ちゃんを困らせちゃ駄目です。ご飯食べさせてもらえなくなっちゃいますよ」
もうなっちゃんいました・・・

「はい、みんな席についたね。それじゃあ皆で食べよう！そうくんも食べていいよ」

「えっ、いいの！？」

「反省しているみたいだし、それに皆で食べたほうが美味しいしね」

良かった。もうちょっとでこの美味しそうなものを食べ損なう所だったよ。

「そうですね。昨日も皆で食べてとても楽しかったですし。それにまた結衣ちゃんの手料理を食べられるなんて、こんなに幸せなことなんてありません！」

「ルリちゃんもわかってるじゃない！そうくんもルリちゃんを見習ってよね」

「はいはい」

「・・・あの〜」

「どうしたの？ルリ」

「まだ奏吾さんのお母さんが寝ているんですが、いいんですか？」

「それなら大丈夫だよ！もうちょとしたら覚醒するから」

「覚醒？ですか」

ルリは首を傾げる。

「あと十秒」

「あつ！ 九」

結衣が反応する。

「どうしたんですか二人共！？」

「カウントダウンだよ。八！」

「七」

僕もカウントする。

「六！ほらルリちゃんも」

「は、はい！五」

「四、三、二、一」

ルリと結衣が声をあわせてカウントする。

「「「零」」」

三人の声が重なる。

「おっはよ〜〜〜〜〜！！」

母さんが元気良く挨拶をする。

「おはよう、母さん」

「おはようございます、奈々さん！」

僕と結衣は挨拶を返す。

ルリは呆気にとられた顔をしている。

「ルリちゃんもおはよう！」

挨拶を返さなかったルリにもう一度言う。

「お、おはようございます！」

「どうしたの？ そんな変な顔なんかしちゃって」

「ビックリしたんですよ！まさかカウントダウンが終わるとお母

さんが起きるなんて」

「またカウントダウンなんかしてたの」

「まあ、何回見てもおもしろいし」

「そうだよ！だって起こしてから五分ちようどで覚醒するなんて、そんな人奈々さん以外に見たことないんだから」

結衣はニコニコしている。

「ふふ、私の特技といったところかしら」

「特技と呼べるような事でもないと思うんだけど」

「それじゃあ奈々さんも起きたことだし、冷めない内にたべちゃおう！」

「そうだね。せっかく結衣ちゃんが作ってくれたみたいだしね」

「これ、結衣が作ったってなんでわかったの？」

「ん？匂いかな」

「匂い？そんなので分かるの！？」

「わかるよ。それがお母さんと言うものです」

全国のお母さんにそんな能力はない。

「それじゃあ、いただきます」

母さんが先人を切り、それに続いて僕達が続く。

「美味しい　さすが結衣ちゃん。奏ちゃんの事任せて正解だったみたい」

「そうだよ、奈々さん！私がいれば何の問題もないんだから！」
誇らしげに胸を叩く。

「ルリちゃんどうしたの？さつきからずっと黙っているけど」

黙々とご飯を食べていたルリに話しかける。

確かに、昨日よりも口数が少ない気がする。

「えっと、ですね」

困惑しているようだ。

「そういえば母さんの事、何にも話してなかったっけ」

「そうなの！？　そういう事は早くに言いなさい。私の名前は神木　奈々って言うの。覚えてくれたかな？」

「は、はい！バツチリと脳に焼き付けさせてもらいました。奈々さん！」

「うん、よろしい」

「あつ、せっかく自己紹介したんだし、ルリの事を詳しく話しておかないと」

僕は昨日あったことを要約して説明をした。

「それならルリちゃんは空の世界から来たってこと？」

「そういう事。信じるのは難しいとは思っけど信じて欲しいんだ」
「信じるも何も・・・そうだ！ルリちゃん。住むところが無いんだつたよね？」

「はい。そうなんです」

その声には元気がない。

「それなら、ここに住みなさい」

「それはいいんじゃないかな！これでルリちゃんは安心してこっちの世界で生活できるじゃない！」

「僕もそれがいいと思うけど、ルリはどうなの？」

みんなの視線がルリに集まる。

「あのできれば、よろしくおねがいします！」

ルリの顔が赤く染まっている。

「はい、よろしくおねがいします」

「ルリ、よろしく」

「ルリちゃんよろしくね」

「結衣は関係ないんじゃない？」

「関係ないことないよ？私、今日からここに住むし」

「え・・・えーっ！？」

「奏ちゃん。そんなに驚いてどうしたの？」

「どうしたのって、結衣が住むなんて聞いてない！」

「んゝ。私も聞いてないよ？」

「聞いてないの！？ 結衣これはどういう事？」

「今言っただじゃない。ね、奈々さん」

「うん、そうだね」

「そうだね〜って言ってる場合じゃないから！そんなのでいいの！？」

「悪くわないと思うよ。だって結衣ちゃんがいれば安心だし」

「安心？ 何のこと言ってるの？」

「だって。私またお父さんの所に行かなくちゃいけないし

「また行くの！？ ルリも住むことになったんだし、できれば家にいて欲ほしいんだけど・・・」

「だから結衣ちゃんがいれば安心でしょ？」

「結衣の前に母さんがいてくれた方が安心なんだけど」

「そうくん！ 私じゃ不満だっていうの？」

やめて！ その目はものすごく怖いから。

「不満とかじゃなくて、子供だけじゃ心もとないと思わないの？」
とりあえず思ってもないことを言ってみる。

結衣と一緒に住むことが亮介にばれたら、ややこしい！

「何言ってるの？ 今までも留守番なんて何回もあつたじゃない。
今更そんなこと言つたつて、説得力が無いよ」

おっしやるとおりです。

「奏吾さん！ 私も一生懸命頑張るので、安心して下さい」

留守番をどう頑張るの？

「それじゃあ、お母さん、明日行くから」

「明日！？ せめて一週間はいてくれても」

「なんで？ 本当は昨日行っているはずだつたんだから問題ない
と思うけど」

「・・・」

もう流れは変えられないか。

「わかったよ。それなら母さんと父さんの部屋を二人につかつて
もらうから。いいよね？」

「オッケーだよ」

母さんの返事はいつもゆるいな。

「ルリちゃん一緒に寝ようね」

「はい！ 夜が楽しみですね」

ハハ、修学旅行かい！

「それでは今日の予定を発表しまゝす！！」

母さんが突然立ち上がって言った。

「発表って、今日はどこに出かけるの？」

「奏ちゃんは鋭いね。正解でゝす。今日はデパートに買い物に行きまゝす」

「やったー！ 私欲しい服があったんだ」

「デパートに何しにいくの？」

「決まってるじゃない。ルリちゃんの服を買いに行くの。私の服や奏ちゃんの服をずっと着てもらうわけにはいかないでしょ」

「そんなの悪いですよ。私は今のままで十分です」

「そう？ でもこのままいくと着る服がなくなっちゃうよ。私も服は持っていないといけないし。裸で過ごすの？」

「そ、それは・・・困ります」

「それじゃあ、ご飯食べたら出発しまゝす。さっさと食べて準備してね」

「はいい！」

結衣の元気の良い返事。

「はい・・・」

ルリの申し訳なさそうな返事。

「はいはい」

「奏ちゃん！ そんな返事じゃ連れて行ってあげないぞ」

「僕は別にいいんだけど・・・」

「そうくん。何か言った？ 一緒に行くよね」

「ハハっ・・・」

この三人で行かせるのは心配だから付いていくけど。それから他愛もない話をしながら朝食を食べ終えた。
「それでわみなさん。ごちそうさまでした」

「ごちそうさま!!」

結衣の元気なご馳走様。

「ご馳走様でした」

ルリの落ち着いたご馳走様。

「美味しかったよ結衣。ご馳走様」

僕も結衣にお礼を言ってからご馳走様を言う。

昨日と同じで結衣の料理は絶品。今日はこの美味しい朝食を食べただけで幸せ。

今日も頑張ろうって気持ちになるな。

「そんな、そうくんにそう言ってもらえると作ったかいがあるよ」

「

結衣は嬉しそうな顔を僕に向けながら言った。

「それじゃあ三十分後にいくよ」。さっさと用意を済ませてね」

「はい!!」

ルリと結衣が元気良く返事をする。

「ルリちゃんは私と一緒に部屋に来て。結衣ちゃんは一回家に帰る?」

「もういろいろと持ってきてるから大丈夫!」

Vサインをしながら言う。

それであんなに大きな鞆が置いてあったのか。

「うん、よろしく。それじゃあ着替えよっか。」

僕も早く着替えてしまおう。

それぞれ部屋に入って着替えを始める。

結衣は着替える必要くない?

それから僕は着替えてリビングで待つこと五十分。

「用意が遅い!三十分ここにここを出るんじゃないか?一休いつまで待てばいいんだよ」

僕の関わる女の人は何でこんなにマイペースなんだ?

僕はテレビを見ながら三人が支度が出来るのを待つ。

「奏ちゃん!用意できたよ」

三人がリビングに入ってくる。

「ごめんね。ルリちゃんのお洋服を選んでたら遅くなっちゃった」

「いや、別にいいんだけど・・・ルリに何したの？」

僕は飛び込んで来た不思議な光景を目にしていた。

「何したって、お化粧したに決まってるじゃん。私と奈々さんの共作なんだ！かわいいでしょ？」

「目がパンダじゃないか！」

ルリの目の周りには黒々とした物が塗ってあった。

「パンダじゃないよ。今の流行りなんだって。そうだよね結衣ちゃん」

「そうそう　これが今風のお化粧なんだよ」

「いやいや！　どう見ても塗りたくり過ぎだから！　それはおかしいからね！？」

「おかしくないよ。奏ちゃんはお化粧つてものを知らないからそんなことが言えるんだよ」

「知らないも何も、似合っていないから！　ルリには不釣り合いな化粧だよ！！　化粧しないほうが絶対可愛いって」

「そんな、可愛いだなんて。嬉しいです・・・」

ルリは顔を赤らめる。

「もう、せっかくお化粧したのに。どうする？　ルリちゃん？」

「・・・お化粧はやめておきます」

「残念、私もおそろいのお化粧しようと思ってたのに」

・・・パンダが増えなくてよかった。

「それじゃあ、さっさと落とそう！　早く出かけたいしね」
いや、時間をかけたのは結衣じゃないか。

それからルリは化粧をおとしにいつて、みんなで出かける。

「今日は車でいくからね」

家には軽自動車一台ある。

「私は助手席」

結衣が助手席に乗り込む。

「それじゃあ、僕達は後ろに乗ろうか」

僕はそう言つて、後部座席があるドアを開ける。

ルリは荷台のある方のドアを開ける。

「いや、後ろつてそこじゃないからね？」

冷静に突っ込む。ルリのこれは天然なのか？

「すいません。車・・・ですか？ 初めてなので」

そうか。天然なんじゃなくて無知なのか。無知というのは少し言い過ぎなのかも知れないけど。なんせここの世界は初めてなんだから。仕方ないのか。

「気にしないで。こっちに乗ってね」

僕は奥に詰めてルリが座れるスペースを作る。

ゴン

「・・・痛いです・・・」

痛そうな音だった。どうやら天然なのはあたってゐるのかな。

「大丈夫！？」

結衣が心配して声を掛ける。

「すごい音がしたね」

母さんは感想を述べる。

心配もしてあげて。

「ルリ、大丈夫？」

僕も心配の声を掛ける。

「大丈夫です・・・少し痛いですけど」

なにか涙を流してるみたいだけど。ルリは我慢づよういな。

「じゃあ、そのドアを閉めてくれる？」

「はい！」

そう言つてルリがドアをおもいきり閉める。

その勢いは凄まじかったようで、ドアが壊れるかと思うくらいの音がした。

「びつくりした!!」

結衣が思わず感想を漏らす。

「すごい音がしたね」

母さんはそれしか言えないの？

ルリが放心状態になっている。ビックリしすぎ！

「・・・ルリ、大丈夫？」

「だ、大丈夫です・・・」

「それじゃあ、出発しまゝす」

「はい！」

結衣の元気の良い声。

僕もルリもだんまりだ。

なんて空気なんだ。僕としてはゆっくりできていいんだけど。

車は母さんの運転で出発。実というと母さんは運転は得意なほうで、僕も以外だったんだけど大型の免許も持っているらしい。見せてもらったこと無いけど。というより、実は母さんが運転する車に乗るのは今日がはじめてだったりする。

「そういえば、これからどこに行くの？」

何となくさつきから思っていた疑問を口にする。

「この近くで服とかを揃えようと思うとあそこしかないでしょ」

「そうだよ、そうくん！ 双葉デパートしかないでしょ！」

「双葉デパートって、確かにやら何まで揃うデパートだったっけ」

「その通り！ この近くで一番早くに流行のファッションを取り入れているあの双葉デパートだよ！」

結衣がすごく興奮している。そういえば結衣って服好きだったっけ。

「ルリちゃんには可愛い服、買ってあげるからね」

「ありがとうございます！」

少しこわばっていたルリの顔が緩む。

そんなに痛かったんだろうか。

「良かったね！ 私も選んであげるから」

「結衣ちゃんの分も買ってあげるからね」

「ほんとに！？ 奈々さんありがとー！！大好きだよー！！」

「私も好きだよ」

二人してにやける。

なんで服一つでこんなにテンションが上げれるんだ？

「どうしたの？ 奏ちゃん。心配しなくても服、買ってあげるよ」

「そんなこと思っていないから！」

つい声を張り上げてしまった。

「ルリ、そんなに震えて怯えないで！別にルリを脅かそうとしたわけじゃないから！」

今のでビックリしたのか、ルリは小刻みに震えている。

「何笑ってるの？ ルリちゃん」

「えっ！？ 笑ってたの？」

「はい・・・すみません。みなさんを見てると楽しくなっちゃって」

ルリは申し訳なさそうな顔をしながら言う。

「謝ることないよー。楽しいに気持ちになる事は悪いことじゃ無いんだから。ね、そうくん」

「楽しいことはいいこと。結衣の言うとおり謝ることじゃ無いよ」

「そうだよ。楽しいことはみんなで共有するのが普通なんだから」

母さんは真後ろの後部座席に座っているルリの方を向きながら言った。

「はい・・・」

ルリは顔を赤らめながら言った。

「奈々さん！前、まえーーーーっ！！」

結衣が声を張り上げる。

前？

「うがーーーー！！！！」

僕の声。

「ううつ、きゃー！！！！」

ルリの声。

「あらら」

母さんの声。

そう言っただけで母さんはおもいつきりブレーキをふみ、ドリフトター
ン。

「道、間違っていたみたいね」

母さんは笑って言う。

「そういう問題じゃないからね！？ 事故起こすところだったじ
ゃないか！」

「そうだよ奈々さん！」

結衣と僕は母さんに文句をいう。ルリはというと

「……………」

放心状態に鳴っているようだ。口をポカンと開けていて白目を向
いている。

トラウマなんかにならなきゃいいけど……

「はーい到着です」

あのトラウマドリフトから何度か危ない運転を繰り返して今に
至る。皆ぐったりとしている。

僕もぐったりだよ。

「奈々さん……私ちょっと気持ち悪い」

「……私もです」

二人の顔がげっそりとしている。

「ちょっと休憩してから買い物に行こう。二人も気分が悪いみた
いだし」

「大丈夫？車によっちゃったのかな。結構安全運転したんだけど
な」

「あれのどこが安全！？危険しか存在していなかったよ！」

「そう？安全だったとおもうんだけどな」

いつもはどれだけ危険な運転してるんだ!?

「はい。それじゃあ降りてね」

パーキングに入れてから母さんが言う。

みんなが車から降りて、四方八方にふらふらと散る。

「どこにいくの? 入り口はこっちだよ」

その声ができる方へふらふらと付いていく。

「到着」

母さんの声がする。

僕も意識が朦朧としているのか?

「うわっは! すごくいい。この前来たときよりもお店が増えてる

!」

「あれ!? 結衣車酔いは!?」

「そんなのもう吹き飛んじゃったよ。それより早くいこ」

なんという回復力。

僕もただルリなんてもつとひどいことになっているのに。

ルリは見るからに吐き気を催しているように見えるんだけど。

「・・・気持ち悪い・・・」

口元を抑えながらルリが言った。目の焦点が定まっていない。今にもリバーズしてしまいそうだ。

「ちよつとまって! あと少しだけ我慢して!! 結衣と母さん! ルリを早くトイレに連れて行って上げて! やばいから! こんなところでやつちやったらトラウマになるから!!!」

「ルリちゃん大丈夫?」

「大丈夫じゃないからいつてるんだけど!」

「ん」。トイレってどこにあったっけ?

「マイペース!」

「・・・私、もう・・・」

顔色がどんどん悪くなっていく。

「多分こつちだったっけかな」

「どっちでもいいから早く連れて行ってあげてー!」

「一時はどうなるかと思ったよ」

ルリをなんとかトイレに連れて行くことができて本当に良かった。
トラウマなんかを植えつけさせずにすんで本当に良かった。

「ルリちゃん気分はどう？もうちよつと休む？」

結衣が心配の声を掛ける。

「もう大丈夫です。はい・・・」

見た目からして少しはしんどそうだ。

「無理しなくていいよ。辛かったら言って」

僕も声を掛ける。

母さんかというと

「飲み物買いに行くっていつてから帰って来ないね。奈々さん」

「ほんとにどこ行っただか」

「おゝい。遅れてごめんね」

母さんが手を振りながらこちらに向かってきた。

いや、そんな大声で・・・恥ずかしいから。

「ちよつ、みんな観てるじゃないか！ちよつとは考えてよ。とい

うかどこに行ってたの？」

僕は母さんにとりあえず説教をして当然の質問をぶつける。

「えゝつとね。ルリちゃんに似合いそうな服があったから買った

った」

てっへつと言わんばかりに舌を出して首を傾げて自分に軽いげんこつ。いつの時代の少女マンガだよ。

「でも奈々さん。サイズは大丈夫なの？」

「それはだいじょうぶ」。この前一緒に寝たときにだいたいのサイズは把握したから」

「さわっただけで！？」

「ふふゝん。それが全国のお母さんのスキルです」

全国のお母さんにそんなスキルはない！

「あの・・・飲み物・・・が」

ルリの苦しそうな声。

「え〜っと、忘れちゃった」

「・・・そんな・・・」

ルリの声が今にも消えそう。

「ちゃんと買ってきてよ！もう僕が行くからおとなしくそこで待っててね」

そういつて僕は自動販売機がある方へと足をすすめる。

それにしても、なんでトイレの近くに自動販売機が無いんだよ。こんなことなら最初から僕が行くんだった。

「あれっ？ここに自動販売機がある。母さんどこまで行ってたんだ！？すぐそばにあるじゃないか！」

ここはさっきのトイレから少し進んだところにある休憩所。歩いて一分もしない。

「・・・ミネラルウォーターでいいか」

母さんのことであんまり考えるのは良くないな。うん、考えただけで疲れる。

僕は飲み物を待っているルリを待たせるわけには行かないと急ぐ。

「い、いない。・・・もういや」

もういや~~~~つ。

「だけど僕も学習はする」

携帯電話をとりだして結衣に電話をかける。

近くから着信音が聞こえる。

「・・・携帯が落ちてる」

いい加減にしてほしい。

いうまでもなく着信画像には僕の名前が。

「なんだろうこの状況。あの3人をこんな広い場所で探さないといけないのか？」

もう帰ってもいいかな？

そんなことを考えていると近くから声が聞こえる。

「こっちのほうが似合ってると思うんだけど」

「そうかな。私はこっちのほうが似合っていると思うんだけどな」

「えっと、私はどちらでも、どちらも可愛いですね」

あんなところに。いや、近くにいて良かったと思うのがこの場合正解なのか？

僕は3人がいるところに寄っていく。

「あつ、そうくん。どっちがルリちゃんに似合ってると思う？」

「こっちのほうが似合っているとおもうんだけどな」

「いや、それよりルリはもう大丈夫なの？」

「そういえば、もう大丈夫みたいです」

ルリも女の子っていうことか。服一つで元気になれるなんて。

「・・・僕はもう疲れたから、ちょっと向こうで休んでいるよ」
近くにあつたベンチに腰を下ろす。

何分くらい待ったんだろう？

どうして女の人って買い物がい長いんだろう。

「遅くなってすいません。待ちましたか？」

「いや、待ってたというか・・・他の二人は？」

ルリだけが僕の座っているベンチに寄ってきた。

他の二人は影すらも見えない。

「えっとですね、結衣ちゃんと奈々さんは違う階に行ってしまった」
「えっと、ルリは一緒に行かなかったの？」

呆れた気持ちをこまかすようにルリに質問をぶつける。

「それは奏吾さんがここにいないからじゃないですか」

当たり前みたいに僕にそんなことを言ってくれる。

「そんな事を言ってくれるなんて・・・どこかに消えた二人にもたまにはそう思うくらいはしてほしいよ」

「何か言いましたか？」

「いや、何も言っていないよ！それより、僕の事心配してくれてあ

りがとう」

「心配ですか？心配なんてしてませんよ？」

「えっ！？じゃあ何で僕の所に」

さつきは僕がいるからっていてくれたのに。

「それはここにベンチがあるからですよ？私も疲れたので休もう
と思って」

そういうことかーっ！

何か早トチリしたことが恥ずかしい！

ありがとうとかいっちゃったし、穴があつたら入りたい！

「ブツブツ何か言っているみたいですけど、どうしたんですか？」

あっ、やばい。口から漏れてた。

「な、なんでもないよ！あっ、その袋、かつてもらった服？」

「はい！奈々さんにいっぱい買ってもらっちゃって、ほんとに申し訳ないです。でも、とっても嬉しいです」

ルリは満面の笑でいう。

本当に嬉しそうだ。

「良かったね」

嬉しそうにするルリを見て僕もなんだか気分が上がる。

「はい！」

ルリは可愛く返事をする。

「・・・ふっぐ・・・ぐすっ」

どこからか嗚咽が聞こえる。

「どうしたんですか？ 大丈夫？」

ルリの声。

僕がそのほうを見るとルリはしゃがんでいた。子どもに目線をあわせるために。そこには嗚咽をもらしている、もとい泣いている子供がいた。

大声でないはいないけども、小粒の涙を絶やさず流している。

「泣いてないで教えてくれるかな？」

できるだけ易しい声で話しかける。

「・・・僕、お母さんと、はぐれ、た」

帽子を深くかぶっていてよくわからなかったけど、自分の事を僕と言っているようだからどうやら男の子みたいだ。

「お母さんと迷子になってしまったんですか。奏吾さんどうしましよう？私、こういうの良くわからないんですけど」

僕が別にどちらでもいいことを考えているとルリがとっても心配という顔を見せて言う。

「うーん、迷子センターにでも行こうか」

「迷子センターですか？それって迷子を預かるところの？」

「そうだよ」

軽く返事をする。

「でわそこに行きましょうー！」

ルリが言う。

しかし迷子の子は動こうとしない。

「どうしたんですか？迷子センターに行くのが嫌なんですか？」

その子は軽く頷く。

「でも迷子センターに行けばアナウンスしてくれるし。すぐにお母さんに会えると思うけど」

こどもがぎゅっとルリの服をつかむ

「・・・一人は、いや」

帽子のせいで表情は読めない。

「一人じゃないよ。係の人もあるし、遊具だってあるはずだから退屈はしないと思うんだけどな」

その子からの反応はない。

「奏吾さん。あの、私たちが探しませんか？」

ルリがそんなことを言う。

僕達で親を探す？

「なんでそんな事・・・」

「だって、一人は寂しいじゃないですか」

ルリの顔が少し暗くなる。

そういえばルリは僕と合う前は、自分が知らない場所に一人でいたんだもんな。一人が寂しいのは嫌というほど分かっているってとか。

「うんそうだね。それじゃあ僕らで探そうか」

「はい！　ありがとうございます！！」

ルリの顔に明るさが戻る。

「それじゃあこのフロアから探そうか」

このデパートは6フロアあって、屋上は小さな遊園地みたいになっている。

今僕達のいるフロアは二階で洋服店。

「あゝ、僕の名前はなんて言うんですか？」

そういえば名前聞いてなかったつけ。お母さんを探すのに名前は重要だね。

「・・・葵^{あおい}・・・です」

小さな声で答えた。

「葵ちゃんって言うんですか。可愛い名前ですね」

「ほんとだね。でも、男の子の名前としては珍しいね」

葵ちゃんはうつむいたままだ。

「それじゃあ行こうか。ルリ、葵ちゃん」

僕達はとりあえず探し始める。

「僕達、葵ちゃんのお母さんの顔知らないから見つけたらルリが僕に言つてね」

僕は葵ちゃんの方を向いて言う。

「そうですね。それがいいです！」

ルリが僕の言葉に反応してくれる。

「・・・」

葵ちゃんは無言のまま頷く。

ゆつくりと歩いて行ってすれ違う人や、お店で物色している人に注意して見ていく。

「このフロアにお母さんはいましたか？」

このフロアをだいたい見て回ってからルリが言う。

「……………」

無言のまま首を横に降る。

さつきから僕やルリが話しかけても首を降るだけで言葉を発しない。

どうやら葵ちゃんは無口のようだ。

「このフロアにはいないようですから、他のフロアも探しますか？」

「いや、それは少しまずいんじゃないかな？ このフロアで逸れたんだから、きっとこのフロアにいるとおもっただけど」

きつとお母さんも探しているだろうし。

「……………がう……………」

「えっと、葵ちゃん。今、なんて言っただんですか」

小さすぎて僕も聞き取れなかった。

「……………違……………う……………」

「何が違うんですか？」

「……………逸れたのは……………違……………う……………所……………」

「違……………う……………ところなの……………!……………」

僕の言葉に葵ちゃんがビクつとなる。

「奏吾さん！ 葵ちゃんがビクリしてるじゃないですか!」

「えっ、いや。ごめんなさい」

ついついルリに謝ってします。

「私にじゃなくて葵ちゃんに謝ってください!」

「……………はい。葵ちゃん、ごめんね」

「ごめんね、じゃなくて謝るときはごめんなさいでいよ!」

ルリの両方の眉毛が釣り上がっている。

ルリ、ごめん。その顔ちよつと可愛い。

「葵ちゃん、ごめんなさい」

だからと言って謝るのを怠ってはいけないよね。ルリにも葵ちゃんにも嫌われたくないし。

「・・・大丈夫・・・」

心なしかその大丈夫の声が笑って聞こえたのは気のせいかな？

「奏吾さん。許してもらえて良かったですね」

ルリの機嫌は戻ったようだ。

「話がそれちゃったけど、逸れた場所がここじゃないってほんとは？」

「・・・本当・・・」

さっきまで質問には首しか振らなかったのに、今回は答えてくれた。

少し打ち解けてくれたってことかな？

「それじゃあ、どこではぐれちゃったんですか？」

「・・・屋上・・・」

葵ちゃんのか細い声が微かに聞こえる。

「屋上ってあの小さな遊園地のある？」

僕の問に葵ちゃんは小さく頷く。

「遊園地ですか！ 面白そうですね。楽しみです！」

いや、ルリが楽しむために行くんじゃないんだけど。

「というか、ルリのいたところでも遊園地あったの？」

僕がふと思ったことをルリに聞く。

天使が遊園地で遊ぶイメージって、あんまり浮かばないな。

「はい！ とっても面白いですよ！」

前言撤回。ルリを見ていると容易に想像が付く。

「・・・屋上行こっか」

僕の言葉に反応してくれた葵ちゃんが大きく頷いた。

なんだかこの大きな頷きはうれしいな。

僕達はエレベーターを使って6階のフロアへと移動した。

「あの奏吾さん。ここ屋上じゃないですよ」

僕達が向かっていたのはルリが楽しみにしている屋上であって、このフロアではない。ルリは少し困惑した顔で僕に言う。

「エレベーターは屋上までは行かないんだよ。ここからは階段で

行くしかないんだ」

「そうだったんですか」

ルリの顔から安堵の表情が見える。

遊園地にどれだけ行きたいんだよ！

「ルリあのね、ここの遊園地は子供が遊ぶところであって、僕達
が楽しめるようなアトラクションとかは無いよ？」

たしかにここには普通のデパートとは違って少々クオリティの高
い物は置いてあるけど、やっぱり普通の遊園地とは比べ物にならな
いくらい見劣りする。さすがにデパートの屋上と言う狭いスペース
で大きな場所の遊園地と張り合おうとするのは無謀。

「た、楽しむだなんて。私はこれっぽっちも楽しもうなんて思っ
てませんよ！ 葵ちゃんのお母さんを探すためですから。屋上に行
くのは！」

ルリが分かりやすく動揺している。

僕が言ったルリが楽しめるかって所に反応してしまったらしい。
屋上に行ってがっかりしないといいけど。

そして屋上に続く階段まで来た。

「えっと、この先が屋上なんだけど」

ルリの目がさっきよりも輝きを増している。

そんなに期待しなくても。残念な顔が目に見え。

「それじゃあ、行きましょう！ 葵ちゃん、いっぱいあそびまし
ょうね」

本音がもれてるから！ お母さん探すんじゃないかな？

「・・・」

葵ちゃんは首をたてに降る。

葵ちゃんも遊びたいんかい！

でも、ルリに合わせているだけかも。

「・・・登ろうか」

あんまり考えないでおこう。

そして僕達は屋上の遊園地へと続く扉の前へ。

「ここが遊園地だけど、準備はいい？」

ルリ、できるだけがっかりとかしないでね。

「はい！」

ルリの元気のいい声。

「・・・・・・」

葵ちゃんは首を縦に降る。

そして僕は屋上へと続く扉を開ける。

「・・・・・・あれ？」

だれもいない。

「あの、誰もいないんですけど」

そこには人が一人もいなかった。

遊園地の係員でさえも。

「えっと、どういう事？」

全く訳がわからない。

「奏吾さん！ こっちに来て下さい！」

ルリが何かを見つけたみたいで僕を呼ぶ。

「どうしたの？」

「これを見てください！」

ルリが指を指す方を僕は見る。

「真に申し訳ありませんが、都合により

本日は休館とさせていただきます」

「今日休み！？」

こここの案内状に張り紙がしてあった。

「・・・・・・みたいです」

ルリが見て分かるくらいにしょんぼりしている。

いや、やっぱり楽しみにしていたんじゃないか！

なんて言えないし・・・・どうしよう。なんて声をかけようかな。

「あれ？」

ふと疑問に思う。

「どうしたんですか？」

ルリが落ち込んでいるところなのに反応してくれる。

「本日休館なんだよね？」

「はい」

ということは

「葵ちゃんってここでお母さんと逸れたの？遊ぶ場所もないのに」
「ホントですね。どうしてだろう？」

休館のはずの遊園地。

もし今日遊園地が開いていたらおかしくはないけど、閉まってい
るということは普通ここでは遊ばない。この遊園地に係員なしに遊
べる遊具と言うものがない。

「・・・・・・」

葵ちゃんは答えない。

「葵ちゃん？大丈夫ですか？」

答えない葵ちゃんを心配してルリが優しく声を掛ける。

それでも葵ちゃんに反応はない。

「とりあえず探そうか。もしかしたらお母さんいるかもしれない
し」

葵ちゃんに反応はないし、ルリは困った顔をして動く気配がしな
い。ここは僕が動かないと。

僕が左手で葵ちゃんの手を握って連れていこうとする。

「えっ？」

「・・・・・・」

つないだ手の方から少しだけ光が。

「えっと、今は・・・」

ルリの時と似ている。

あの時は確か僕が右手でルリに触れた時だったか。

「奏吾さん！ 今光って」

「うん分かってるよ。葵ちゃんってもしかして・・・天使」

ルリとの経験からして天使という答えにたどり着く。

「・・・天使？・・・」

葵ちゃんが久しぶりに発した言葉は疑問系。

「葵ちゃんは私と同じ天使なんですか？」

ルリがもう一度質問をする。

「・・・？・・・」

葵ちゃんは首を傾げるだけ。

「えっと、なんだかごめんね」

何も知らない葵ちゃんからしたら僕達はおかしな人。僕がルリに天使と聞いたときは電波な人と思ったんだから当然のこと。

「あの、えっとですね。えっとー」

ルリが変にフオーを入れようとしている。

ルリはそんなことをいわないでいいよ！ややこしくなるから。僕はそう思っていた間に手に感じていた温もりが消える。

葵ちゃんが僕の手から離れてしまったみたいだ。

「葵ちゃんどこいくの？」

葵ちゃんは遊園地の奥の方へと入っていった。

「えっと、どうしましょう！？」

ルリが慌てている。

「とりあえず追いかけるしか無いよ！もしかしたらお母さんを見つけたのかも知れないし」

もしくは僕達をヘンな人と認識してしまっただけかも知れないけど。

あの位の歳だと流石に天使は信じないか。

「葵ちゃん！待ってくださいーい」

ルリが走りながら叫ぶ。

それにしても葵ちゃん走るのはいいな。全然追いつけない。とか思っていると突然葵ちゃんが止まる。

僕達も葵ちゃんと少し離れた距離で走るのをやめ歩いて近づく。

「葵ちゃん。いったいどうしたの？急にはしって」

周りに人が見えない。ということはお母さんを見つけたわけではないと。

あゝ、変人扱いされたか。

僕の中では二択しかなかったので答えは自動的に導きだされる。でもそんな事信じたくないの理由を聞く。

「そうですね！ 勝手に走っていくと危ないんですから！」

ルリは何にも気づいていないみたいだ。

ルリの声に反応してか葵ちゃんがこつちを向く。

そして黒い霧が葵ちゃんを包みこむようにして現れた。

「何ですかあれ！？ 葵ちゃん！」

ルリが声を上げる

ルリの声と同時に僕は葵ちゃんに向かって走りだしていた。

だけど近づいていたとはいえず、葵ちゃんとは少しの距離がある。

全く間に合わなかった。

僕が二歩くらい進んだところで黒い霧は葵ちゃんの全身を包みこんでしまった。

「葵ちゃん！」

腹の底から声を出した。少しでも葵ちゃんに届くように。その声で黒い霧を吹き飛ばすように。

黒い霧は吹き飛ばない。

それどころかその黒さは増していくばかり。

僕はそれでも葵ちゃんに近づく。

そしてどす黒くなってしまうている霧に右手を伸ばす。

「うわっ！」

右手は軽く弾き返される。

痛みはそれ程にはない。

「けど、近づけない」

霧は大きさまでも増していく。

後退するしか無い。

「奏吾さーん！ 葵ちゃん！」

ルリの声が微かに耳に入る。

「ルリは離れていて！ あぶない！」

僕は精一杯の声でルリに叫ぶ。体は葵ちゃんの方を向けて。

「・・・葵ちゃん」

決心を決める。

僕は左手をさつきとは違いおもいつきり突っ込む。

「へっ？」

おもいつきり突っ込んだせいか、弾きだされると思っていたせいか僕は前のめりにずっこけた。

弾き返されるところか通り抜けてしまった。

「どうゆう？霧の中じゃない？」

通り向けたと思っていたの周りに霧はない。

その霧はというと葵ちゃんがいた場所へと凝縮していく。

「奏吾さん！ 大丈夫ですか！？」

ルリが僕を心配してか寄ってきてくれる。

「あれって、どういうことなんでしょう！ 葵ちゃんは大丈夫なんでしょうか！？」

ルリの動揺が見て取れる。

そんなことを見て取れているということは僕は今冷静でいられているんだろうか？

そんなどうでもいいことを考えている時点で僕はもう冷静を失っていたのかもしれない。

そして黒い霧は段々と晴れてくる。

そこからは段々シルエットが浮かび上がってくる。

葵ちゃんのシルエットのハズ。

「なにか羽みたいなのが・・・」

ルリがシルエットを見てそう言う。

確かに羽が。

そして霧が晴れていく。

黒い羽に黒い角が二本。

これはどう見たって

「どうも、悪魔です」

僕の目の前に悪魔が姿を表した。

悪魔の友達（前書き）

久しぶりの投稿です。

内容が結構めちゃくちゃになりつつ有りますが付き合ってくださいと嬉しいです。

悪魔の友達

「どうも、悪魔です」

今は帽子もなくなっていて顔がはつきりと見える。葵ちゃん、いや悪魔はにつこりとしている。出来事が突然過ぎて頭の中が全く整理できない。

「ジャジちゃん？ ジャジちゃんじゃないですか！」

ルリが驚いた顔を見せながら大声を出す。

ジャジちゃん？ どこかで・・・

「あつ！ ルリを撃ち落としたっていうあの！」

「それは心外だな。あれは事故」

ジャジちゃんは顔を少しだけしかめて言った。

「それより、ルリのことを気安く呼び過ぎじゃないかな？ まだ

あつて間もないと思うんだけど」

なんだろう。よくしゃべる子じゃないか。

葵ちゃんに比べると全くの正反対。

「葵ちゃん・・・葵ちゃん！」

ジャジちゃんの急な登場のせいで葵ちゃんが僕の脳内の端っこに追いやられてしまっていたみたいだ。

「そうです！ 葵ちゃんをどこに隠したんですか？ ジャジちゃん！」

ルリの顔が自分の友達に会えた嬉しそうな顔から、若干困惑した顔へと変わる。

「僕と葵は同一人物。見れば分かるよね。葵の時の容姿に羽と角が生えただけなんだし。他には僕が少しばかりしゃべるようになっただけであつて、後はそのままなんだからさ」

そのままと言われても顔なんて殆ど見えなかったし。

「ごめんなさい！ ジャジちゃん友達なのに気づかなくて」
ルリだつて顔さえみえればわかっただろうに。

「そんなこと、僕は全く気にしていないよ。むしろ都合がよかったぐらいだ。それより、君はルリに近づきすぎ」

ジャジちゃんは僕とルリを引き離す。

「あの、ジャジちゃん。なんだか僕に冷たくない？」

「そんなことはないよ。ただ君の性格をあまり知らないと言う事が僕の警戒心を高めているだけかな。それに、よく知らない男性がルリの側に居てほしくないと思うのは当然だと思うけど」

何なんだこの子は！？ 僕のこと嫌いなのか？ なんだか悲しくなってくるからやめて！ 葵ちゃんといった楽しい時間に戻って！

僕が変なことを考えている時にふと思う。

「そういえばジャジちゃん。なんで葵ちゃんなんて嘘の名前なんか言って僕達を騙したの？ ルリに会いに来ただけなら本当の名前と姿で会いに来ればよかったのに」

それにルリを助けに来たのなら尚更そうすべきだと思っただけど。

「それは君がいたからだよ」

ジャジちゃんは僕に指を指す。

「えつと、僕？」

僕がいたからってどういう事だ？

「ルリを助けてくれたのは感謝してる。僕もルリと同じで、力を失っていて迂闊には動けなかったから」

「力を！？ じゃあ今までどうしてたの？」

ルリを見ている限り力がなければ只の人と同じ。そんな子が一体どうやって。

「二日くらいなら大丈夫。君は僕を子供と見過ぎじゃないかな？

僕はルリよりも歳上だよ？」

「歳上！？ とゆうことは僕よりも」

「歳上」

少しにつこりとして言う。

全然見えない！ こんなに幼い容姿なのに。

「君はルリの年齢を知っているの？」

えっと、そういえば聞いてなかったな。

「君と同じ年だよ。そんなことも聞かないで、君は見た目で判断するのが得意のようだね」

「仕方無いじゃないか！ どこからどう見たって小学生にしか見えないうい！」

「君は失礼な人だね。ロリコンというやつなのかな？」

「ロリコンじゃない！ それにロリコンの意味を間違えてるよ！

ロリコンは小さい女の子を好きな人のことで。ジャジちゃんは男の子だから」

ショタコンって言うんだっけかな？

「僕はどっちかというとなんなだけれども」

「えっと、女？」

ジャジちゃんは小さく頷く。

「えっ！？ どう見ても男の子にしか・・・」

「胸もなければ身長もない。髪だって短いし間違っても無理はないけれど。でもそれは失礼じゃないかな？」

かなりの失礼を犯してしまった！

「いや、というかルリ！ 知ってたなら教えてよ！」

僕はルリの方に目をやる。

「葵ちゃんがジャジちゃん、ジャジちゃんが葵ちゃん。私が誤ったのは葵ちゃん？」

なんでそんなに混乱しているの？

「ルリはいつもの事だからいいよ。それより、君の事が知りたいな」

ジャジちゃんが言う。

「ぼ、僕の事？」

「そう。君の事」

突然僕のことを知りたいだなんて、もしかして僕の性別を判断できてないのか！？ さっきの僕の失態をあまり怒っていないように見えるのは、自分も性別を判断できなかったからか。

「あのね、男に間違われたことは今でも怒ってるよ。それに君の性別位は分かっているつもりだけれども。それとも君は女なのかい？」

「僕は男です！ はい、もうバッチリ、毛が一本も通ることのない完璧なまでに男です！」

少し笑っているところが怖い！ 一体僕はこの後何をされるって言うの！？

「だから、君の事を教えてって。君が男であるという情報以外の事をね」

よかった。僕の事を教えるだけであの笑みを消せるのであればいくらでも話すよ！ それこそ湧き水のように。それにジャジちゃんの事も聞けるかも知れなし。

「わかった。それで、何から聞きたいの？」

「当然名前から」

「そ、そうだよね。僕は神木奏吾。高校生で、今は母さんと二人で暮らしているんだ。それで僕の趣味は」

「ねえ」

「えっと、何かな？」

「君の事はもういいから、ルリとあつてからの事を教えて」

・・・自分から聞いておいてそれはないよ

「どうしたの？ そんなに悲しい顔をして」

それからルリに出会った経緯、ルリの力が一瞬戻ったことなどを話した。

「だいたい理解したよ」

「次は僕の番でいいよね？」

僕だつて聞きたいことが色々あるし、ここはぜひとも聞いておきたい。

「わかった。僕が話せることは何でも話すから」

「それじゃあジャジちゃんのこと教えてくれる？」

「僕のことかい？ 僕の名前はジャルジ・ウォルク・ハンク。気

軽にジャジとでも呼んで、奏吾」

「僕の名前呼び捨て・・・」

「呼び捨ては嫌だった？ 年上だから構わないと思ったけど、
そうだった！ 見た目にダメされる。」

「全然いいですよ！ むしろこっちが呼び捨てでいいのかと」

「構わないよ。ルリの事も呼び捨てで呼んでいるみたいだし。そ
れにちゃん付けよりはマシだからね」

「ちゃん付けごめんなさい！ 次からは気をつけます！」
くっ、なんてやり辛い。

「敬語もいいから。これから厄介になるんだから馴々しくても一
向にかまわないよ」

「いや、馴れ馴れしくなんて・・・ん？ 厄介になる？」

「そう。僕もルリと同じく君の家に住まわせてもらうことにした
から」

「えっ！？ このままルリを連れて帰るんじゃないの！？」

僕はてっきりそのつもりで来たんだと思っていただけ。

「今の僕にその力はないんだ」

「でも今、悪魔に戻っているんじゃないの？」

「この力は君から借りているような物なんだよ。君から離れると
長くは持たないから持続もしないし」

「僕、何か貸してたっけ？」

「・・・これから説明するよ。ルリにも聞いて欲しいから正気に
戻ってきて、奏吾」

「なんで僕が、ジャジちゃんがやればいいんじゃないかな？ 長
い付き合いみたいだし」

「呼び捨てでいいよ。ちゃん付けは虫唾が走る」

「ごめん！ ジャジ」

「なんで少し笑うの！？ その笑顔は怖いだけだよ？ 分かってよ
！ ここに怖がっている人がいるということを！」

「僕はそういう事は苦手だから」

「そういう事って笑顔の事？」

「奏吾、君は何を言っているんだい？ 何の話をしていたかも忘れてしまったのかい？ 君の記憶力という存在の有無を考えなくちゃいけないかな？」

言葉に棘がある！ 僕の胸に深く突き刺さって苦しい。

「君は思い出す気があるのかい？」

「あります！ もうバツチリ、針が一本も通ることのない完璧なまでに思い出します！」

「君はその例えが好きなんだね」

なんでジャジは苦笑いをしてるんだろう？

えっと、僕がルリを呼びに行くって話をしていたんだっけ。混乱状態を直すだなんて、ジャジにとって苦手そうにはみえないけど。でも頼まれたんだし僕が頑張るしかないか。

「ルリ！ ジャジが大事な話があるって」

困惑中のルリに呼びかける。

「ジャジちゃん……ですか？ 葵ちゃん……ですか？ 葵ちゃん？ ジャジちゃん？」

ゲームでの混乱状態だったらとくに治っていると思うんだけども。

「ジャジのほうだよ。葵ちゃんは今休憩中なんだって」

とりあえず適当に言ってみる。

「なんだ、そうだったんですか！ 奏吾さん、もっと早く言ってくださいよ」

今の訳の分からない説明を信じたの！？ 葵ちゃんが休憩中って、なら早く休憩を終えて帰ってきて欲しいよ。

「ルリは前から信じやすくって思い込みが激しいから気にしなくていいよ」

あつ、そうなんだ。ルリは信じやすいのか。これはいいことを聞いたな。

「奏吾、ルリを騙したら許さないから」

「ぼ、僕がそんなことするはずが無いじゃないか！」

全く、心外だよ！　僕は紳士の中の紳士と呼ばれるほどに紳士なんだから。

「君は勘違いをしているみたいだけど、紳士といえば教養の高い人に視えるわけではないよ？　むしろバカに視えるからやめたほうがいい」

バカだなんて、僕は自分は悪い事はしないということを分かって欲しかっただけなんだけど。バカって言われると亮介と同じだって言われているみたいで嫌なんだけど。

「あれっ、今僕声に出して言っただけ？」

心の中でも読まれた？

「心の中なんて読めないよ」

「そうだよ」

僕の勘違いだったみたいだ。

「話ってなんですか？」

困惑状態から抜け出したルリがジャジに近寄りながら言う。

「僕の力の事を教えてくれるんだよ」

「奏吾さんの力のことですか？　ジャジちゃん、それってどういう事ですか？」

「それは今から話す。僕の知っている限りをね」

ジャジの顔つきが変わる。

「まず最初に人間の力の事から。人間の力というのは、僕達悪魔や天使の力を作り出すことができるということなんだ」

「人間にもジャジやルリのようなことができるって言うの？」

「いうことは人間もルリがやった回復魔法のような物が使えると」

「そういう意味じゃないよ。」

ジャジは僕の方を見上げながら言った。

「そんなことが人間にできるなんて聞いてないですよ！」

ルリが驚いた顔をしながら言う。

「それはそうだよ、ルリ。このことはトップシークレットの情報

だからね」

「トップシークレットですか？」

ルリが不思議そうな顔で言う。

「そうだよ。この情報、本当は誰にも話してはならなかったんだけど、ルリだから特別に話すんだからね」

ジャジは微笑みながら言った。

その言い方はツンデレっ子が使うものだとはかり思っていたけど、案外誰でも使うのか。というかルリだけって言ってたけど、僕も聞いてちゃっていいのかな？

「それは構わない。君はこの話に多いに関わっていることだからね。君にも理解してもらわないと僕が困るんだよ。それに君は特別中の特別だからね」

特別中の特別？

「それってどういう事なの？」

「今からちゃんと説明する」

ジャジは一つ咳払いをする。

「人間達を作り出す力と言う物は極小さいものであって、僕達の力の百万分の一よりも低いものしか作り出せないんだ。本来は」

「本来は？」

「そう、本来は。だけれども極まれに僕達を作り出す量と同等かそれ以上を作り出し、体内に貯めておくことができる人間がいるんだ。僕達はこういう人たちのことを器を持つ者と呼んでいる。器というのはね、天使なら天使の力、悪魔なら悪魔の力を保持している存在の事で天使たる器、天使の力を保持してられる者を天器^{てんき}、悪魔たる器、悪魔の力を保持してられる者を悪器^{あくき}と呼んでいる。

ちなみに悪魔の力を魔力、天使の力を天力と言うんだ。まあ、呼び方に意味なんてないんだけどね。でもあつた方が便利というだけだよ。実際、天使と悪魔の力の源は殆ど同じだから天使だって悪魔の力、魔力を使うことだって、悪魔が天使の力、天力を使うことだってできてしまうんだよ。全員ができると言うわけじゃなくて極

少数だけだね」

「なんだか話がごちゃごちゃしていて分かりにくい。

「要するに天使の力を貯めておけるのが天器、悪魔の力を貯めておけるのが悪器って言うことですか？」

「ジャジはルリに笑みを向けながら言う。

「そういう事だね。ルリは物分りがよくて助かるよ」

僕は物分りが悪いとも言いたいのか、その目は。

「だけれどもジャジに言われたことを聞いて、ルリはというと少し頬を赤らめて恥ずかしがっている。ジャジに褒められて嬉しかったみたいだ。

「ごめんジャジ。よく分からないことがあるんだけど、力を作り出せる人は全員の力を蓄えることができないの？ それに蓄えることができなかったら、一体その力をどこにいつちゃうの？」

「えっと、説明してなかったかな？ 力を蓄えれない人は常に力が漏れているって考えてもらって構わないよ。殆どの人は元々の力がかかなり弱いし、身体への影響は全くないから、心配することはないけれど」

「ジャジは安心してと言って僕の肩をポンと叩く。
身長に差があるからジャジはハイタッチのポーズになっているけど。」

「えっと、それじゃあ僕はその器と言うことなの？」

「そういうことだよ、奏吾。そして君はその力を僕達に貸せることが出来るんだ」

「力を貸すか。あの時ルリの力が戻ったのは僕が原因だったということなのかな？」

「その通り。ルリは君の力を借りたということだよ」

「それじゃあ、僕は天器と言うことなの？」

「君は悪魔の力も持っているだろう？」

「悪魔の力も？ そういえば今はジャジも悪魔に戻っているんだっけ。僕が原因で。」

「ん？ でもさっきのジャジの話じゃあ、まるで天使の力と悪魔の力をどちらかしか持っていない言い方じゃないか」

名前を付けて区別までしているし。

「確かにそうですね。ジャジちゃん、どういう事ですか？」

「さっきも言ったよね？ 天力も魔力もさほど変わらないって。でも、使えるのは全員じゃないとも言ったよね？ 極少数だって。その少数が君と言う事なんだよ。これ位は理解できるよね？ 奏吾」

「あの、僕のこと本当にバカだと思ってないよね？」

僕だってそれくらい理解できるよ。それにさっきの話だって分かりにくいと思っただけで理解はしていたし。

「なら僕の説明が悪かったって言うのかな？ 君は」

その笑顔以外の表情はできないんでしょうか？

「できないこともないけど、君にはこれが効果的みたいだからね。これから何度も使わせてもらっよう」

「その笑顔は僕にとって凶器だよ」

「なに言ってるんですか奏吾さん！ こんなに可愛い笑顔、私にとっても凶器です！」

「ルリ、君が言ってる凶器と僕が言っている凶器は意味合いが違うと思うよ」

そんな？マークをだされても。

「あのさ、僕が力を貸すって言ってるけど返してもらっているの？」

突然の質問に対してジャジはきよとした顔をする。

「返しはしないよ？ だって力は使うとなくなるものだし。返しようが無いじゃないか。それがどうかしたのかい？」

「いや、それじゃあ貸すという表現より、渡すという表現の方が正しいような気がするんだけど。僕の気のせいかな？」

「・・・君は僕をバカにしているのかい？」

さっきまでの笑顔とは違う！ なんだか笑顔が少し崩れて殺気さえ感じるのは僕の思い過ごしだと信じたい！

「君は信じる信じない以前に僕に何か言う事は無いのかい？」

僕に謝れって言うの！？ ジャジがいい間違いをしていただけなのに！

「文句があるのなら聞くよ。後でたつぷりとね」

一体何の後って言うんだ！？ その時に僕は元気な姿で立っているとは想像できない事と関係してないよね！？

「大丈夫。痛いのは最初だけだから」

「もう、僕は諦めるしか無いのか・・・」

「どうしたんですか？ 奏吾さん。人生が終わったような顔をしていますけど？」

「ルリ、僕がいなくなっても僕のことを忘れないでね」

「君は何を言っているんだい？ 冗談はここまでにして、力を渡す話だったよね」

あつ、渡すに変わってる。

「君には少し僕の怖さと言う物を知ってもらったほうがいいのかな？」

「そ、それだけは遠慮しておくよ！」

危うく僕の人生という幕が閉じるところだった。

「僕が言いたかったのは、君は僕達二人に力を渡せるということなんだよ」

僕はルリに力を渡していたみたいだし、ジャジにも同じ用に力を渡したのだから、ジャジが区別している意味が分からない。どちらも同じような力とも言っていたからジャジかルリがどちらの力も使えると言ったことなのか？

「違うよ。何度も言うけれど、全員がどちらの力を使えると言うわけじゃないんだ。どちらの力も使える人なんて稀って何度も言ったよね？。僕もルリも使うことなんてできない。だから君は特別中の特別なんだよ、奏吾」

僕が特別中の特別だって？

「普通、器を持つ者はどちらか一つの力を持っていると考えても

らえるとすぐに分かるんじゃないかな？　つまり特別なものでもどちらか一つの力しか莫大には保有していない。この意味も分かるよね。つまり君の特別中の特別たる所以は二つの力を莫大に所有していると言う事なんだよ。僕の言っていることは理解したかな？　だから君はこの話を知っておかなくてはいけない。そして自分の力の貴重性、そして君自身の危険性を」

ジャジの顔が一段と真剣味を帯びる。

僕の中にある力ってとんでもないことだったんだな。

「あの、ジャジちゃん。貴重性はわかったんですけど危険性って、奏吾さんは危険な存在と言う事なんですか？」

ルリは少し心配そうな顔を浮かべながらジャジに問いかける。

危険性？

そういえば最後にジャジが言っていたな。確か力は莫大にあったとしても人間にはその力を使えないんじゃないやなかったっけ？　危険性を感じるころなんて一つもないと思うんだけど。

「ごめんね。少し言い足りなかったみたいかな。僕が言いたいことは君が危険な存在じゃなくて、君の身が危険だと言う事を言いたかったんだよ」

僕の身が危険？

「なんで奏吾さんの身が危険なんですか！？」

ルリの顔がすごく心配していると分かる顔に変わる。

「この情報はトップシークレットって言ったよね？　なんで分かる？」

「いえ、分かりません！」

なんてすがすがしい返事なんだ。僕にも良く分からないや。

「奏吾、人事じゃないんだよ。あまり軽く考えるのは良くない」

「あつ、ごめん」

怒られてしまった。

「それじゃあ例えの話をするね」

例えは分かりやすく助かるよ。

「あるところに悪い悪魔がいました」

「えっ？ 悪魔なのに悪いとかあるの？」

悪魔という名前からして皆悪そうだけど。

「だから例えっていったよね？」

ジャジの表情、悪魔のように怖くなったよ！

「悪魔のようにつて、僕は悪魔だよ。それに僕が悪そうに見える？」

「見えます」

限に今の顔、すぐぶる悪そうに見えますから！

「・・・怒るよ」

ジャジの瞳孔が開く。

怖い！ 僕泣いちゃうから！！

「ジャジちゃんが、ジャジちゃんが・・・ものすごく怖いです」
ルリが半泣きでジャジに訴えかける。

そんなルリを見てか、ジャジの顔は一瞬にして笑顔へと変わる。
なんとという早業！

「冗談だよ、ルリ。何真に受けてるんだい？」

冗談か。よかったよかった。

僕がそう考えているとにつこり笑顔のジャジが僕の方を向く。

「（ルリをいじめるなよ）」

その目からは僕にはそう聞こえる！ 瞳孔がまた開いてらっしや
いますよ！

「その目、怖いからやめてほしんだけど・・・」

「あの、何か言いましたか？」

僕の力ない声をルリが拾ってくれる。君は僕の助けになってくれるんだね。

「奏吾は話を進めて欲しいだけだよ、ルリ」

僕の助けの船が・・・

「さてと、本題に戻ろうか」

よかった。許されたみたいだ。

「別に許したとかじゃ無いからね。話が進まないから一旦置くだけだからね」

一旦置くってなに！？　どれだけ根に持ってるの！？

「例えの話に戻るから。えっと、悪い天使が、だったかな」

悪い悪魔じゃなかったっけ？

「奏吾、君ってやつは」

またあの目！？　あの目をするって言うの！？

「僕、もう君に合わせるのに疲れたから話を進めるよ」

僕に合わせてくれていたのか。何だか悪いことをしたな。

「何だかじゃなくて、悪いと思ったたら謝る」

「ご、ごめんなさい」

「うん、いいよ。なんで誤っているかわかっていないみたいだけど」

分かってはいないけど、怒っているのは分かる。

僕が誤ったからか、気分が少し晴れたようだ。さっきまで感じていた怒りが薄れているように感じる。

「あるところに悪い天使と悪い悪魔がいました。ある日その二人の悪者は上の世界の侵略を考えました。しかし、悪者二人だけでは当然適うはがありません。そんな二人の耳にある情報が飛び込んできました。それは僕達がトップシークレットとして扱っている情報でした。君達がこの二人ならどうする？」

話し方が本を読み聞かせる保母さんみたいだな。

「私なら侵略を諦めます！」

ルリが元気良く答える。

あ、こんな場面小さい時にみたことある。

「うん。実にルリらしい答えだね。僕もそうあって欲しいと思うよ。だけど今回はこの二人は侵略を諦めないこととして考えてみてほしいな」

「そうですか。残念ですけど分かりました」
ルリはにっこりとする。

「奏吾ならどうする?」

僕なら、そうだな。

「人間が力を持っていると分かっているなら、それを奪いにいくかな」

「うん、僕はその答えを聞いたかった。君の言うように奪いに来るとして、どうやって奪おうと思う?」

「どうやって。それは僕がルリやジャジに力を渡したみたい
に奪いとるんじゃないの?」

「そうです。私もそう思います」

「そうだったのならまだ良かったんだけどね。二人とも覚えてい
ると思うけど、ルリの力は継続したかい? しなかったよね。限に
今のルリは力がないままだろう?」

「でもそれは僕の力を全部渡していなかったからじゃあ」

「それは違う。すべての力を渡したからと言っても自分で作れな
いのなら意味が無いんだよ。奪っただけの力ならいつかは底を付き
てしまうのだから」

なくなる力を奪う必要が無いんじゃないのか?

「それなら奪う人数を増やしたらどうですか?」

確かに一人じゃ足りないなら二人、三人と増やしたら。

「確かに、それは考えられる最善の策だとは思っよ。でもね、力
を莫大に持っている者はやっぱり少ないんだよ。奏吾のように力を
多く持っている者以外の力だけを奪ったとしても意味がない。もし
奏吾と同等の力を奪おうと思ったら百万人でも足りないんじゃない
かな」

普通の人はジャジ達の百万分の一よりも低い力しか無いんだっ
つけ。

「それじゃあ、力を奪う必要なんてないんじゃない?」

「力だけを奪うならね」

「それ以外に奪うものなんてあるんですか?」

「その通りだよ、ルリ。力だけを奪うんじゃないんだ。その元か

ら取り出す元からね」

「元ってどういう事？」

「元と言うのはね、要するに力を作る導力とそれを蓄える器を奪うと言う事」

「導力と器ですか？」

導力？ また新しい単語が増えたな。

「それならコツコツと貯めることも、莫大な力を受け継ぐことが出来るからね。奏吾、察している通り導力も天使と悪魔で名称が違うよ。天使は天導力、悪魔は魔導力と言うんだ。天の力、魔の力を導くと言う意味なんだけれども、深くは考えなくてもいいよ」

深くはって、深く考えることもないと思うんだけど。

「でも、受け継ぐことができるとか奪えるとか言ってるけど、結局どうやってそんなことをするの？ それになんだかすごい力みたいだし、そんなにホイホイ渡せるとは思えないんだけど」

「そうですね。そんなうまい話がある理由ないですよ」

「そう、そんなうまい話なんかある理由がないんだ。渡すには特定の条件がいる」

特定の条件？

「その条件とは力の根源。つまり生命そのものを奪うということ。この意味は分かるよね？」

生命そのもの奪う？ ということはもしかして。

「・・・命を取るってことですか？」

ルリが消え入りそうな声で答える。

「そういうことだよ。正確には命を奪った後に出る魂を食べるんだ」

「魂を食べちゃうんですか！？」

今日のルリの一日は驚く為にあるんじゃないかと思うくらい今日は驚いているな。

「食えることによつて器とその導力を取り込むことが出来る。自分の体内に。それならこちらの世界に来てまでも欲しくなるだろう

？」

ジャジは不敵に笑う。

「世界のバランスは、一体世界のバランスはどうなってしまっているのか！」

世界のバランスが何だって？

「だからトップシークレットと言っているんだよ」

ジャジの顔に真剣味が帯びる。そしてルリはというと怯えているのか、小刻みに震えている。

「えっと、バランスがどうとかって言うてる意味がいまいち分からないんだけど」

「奏吾、僕らの世界と君たちがいるこの世界とは繋がっているんだ。死者の魂は天に昇るとか聞いたことはないかい？ その天というのは僕たちの世界のことと置き換えて聞いて欲しいんだけど、天だからと言って天使だけの世界というわけじゃないよ？ その所も理解して聞いてほしいんだ。つまりはね、その死者の魂は僕達の世界に来る。そしてその魂は僕達の世界で再び生を受けるんだ。生まれ変わるんだよ。そして僕達の世界で生きていく。そして時が来ればその生も亡くなってしまふよね？ 要するに死者になる。そうすれば魂はどうなると思う？ 次は君たちの世界に降りるんだよ。そしてまた新たな生として誕生する。この繰り返し。魂の循環。だから、魂を食べられてしまふとその連鎖は止まってしまうんだよ。つまりどちらの世界からも消えてしまふということ。これが一人だけならばこの循環は崩れはしないんだけど、ルリも言っていたよね？ 一人がダメなら二人、三人と。百万人の力を奪っても言ったけれど、その器や導力ごと奪ったとして、それをコツコツと貯めればどうなる？ 当然その分は力がつくよね？ この世界の人口は億単位でいるだろう？ もし少しずつ、コツコツと貯められでもしたら僕達だって気づくかどうか。そうすれば確実に、少しずつではあるけれども魂の循環から外れる魂が有るということ。そうなればこの循環は崩れ去ってしまう恐れがあるんだ。魂の循環が崩れて

しまつと僕も何が起きるか分からない。何が起るか分からないのは怖いことだよ。何も起こらなければそれはそれでいいんだけど、その確証がないと言うことは僕達や君達の世界が消えるかも知れないという恐れだつて出てくる。僕達はそれが怖いんだ。とてつもなく」

ジャジの顔に曇りが見える。

ルリは魂の循環のことは知っていたのだろう。だからこんなに怯えているのか。ルリのことから最悪の場合を想像するだろうし。

「トップシークレットな理由はわかったよ。だけど、僕が危険とというのが分からないんだけど。だつて、僕じゃなくても力を奪えることなんだし」

「君は忘れているみたいだけれども、普通の人は百万分の一よりも低い力しか生み出せないと言つたよね？ 君の力は僕達よりも明らかに大きんだよ。大きい力は狙われる。小さい力をコツコツと、と言つても小さすぎると思わないかい？ 一気に力をつけたいという奴なんてゴロゴロいると思わないかい？」

「えつと、今さっきから僕達つて言つてるけど、達つてジャジの他にもこの情報を知っている人がいるつて事なの？」

僕の質問を聞いたジャジは、少し困つたような顔を見せて

「その情報もトップシークレット。君には関係の無いことだから教えられないよ」

これ以上追求しないでおう。

あんなジャジの顔を見てしまつとそう思つしか無いように思えた。

「私、私奏吾さんを守ります！！」

突然そんな決意を声高らかに宣言するルリ。

「奏吾さんにはお世話になりましたし、それに私達の世界も奏吾さん達の世界も崩壊させる訳にはいきません！ だから私が奏吾さんを守ります！」

ルリの目は真つ赤に燃えるようにギラギラとしていた。

さっきの怯えはどこへやら、だ。

「あ、ありがとう」

とりあえずお礼を言っておこう。

「ルリ、その覚悟忘れないでね。これは僕達が受けた任務なんだから」

ぼそつとジャジがつぶやいたのが僕の耳に入った。

任務？ 一体どういう事だ？

でもジャジには聞きづらい。またさっきのような困った顔をされると僕の良心が痛むからね。

「奏吾、なんだかかつこいいこと考えているみたいだけど、実際そんなにかつこ良くは無いから」

「くそつ、何だか熱いぞ！ ここは暖房の効きすぎじゃないか」

「ここは屋外だよ、奏吾」

ジャジは僕を追い詰めてなにが楽しんだ！

もうその恥ずかしい奴を見るような目で僕を見ないで欲しい！

「ごめんね、奏吾。僕もあまりからかう気は無いんだけど、何だか君を見ていると、ついね」

ジャジは笑う。

その笑顔は僕がさっきまで見ていたジャジの表情の中で一番自分を表している自然体に思えた。

「それじゃあ話を戻すよ」

「戻すといっても僕が知っている限りの君の、というより人間の力については話したから、次は君の力の発生条件とその有効時間、有効範囲の説明でもしようかな」

「またややこしい話？ 今日はもうさっきのお腹いっぱいだよ。明日にしてくれないかな。母さんや結衣もそろそろ買い物済ましてるだろうし」

それにジャジも今日から僕達の家に住みたいだから。

「いえ、聞きましょう！ 奏吾さんをお守りするには力は必要不可欠なものですから！」

「奏吾、自分が狙われているという自覚がなさすぎるよ」

同じような理由で起こられてしまった。

自覚がって言われても、実感なんかわかないよ。

「君がそう思うのも無理は無いけど、この話もとても重要な事なんだ。君だけじゃない、戦う僕やルリの命だって君次第なんだよ？」
そう言われると何も言えない。

「それでは話を続けるよ」

「はい！」

ルリの元氣な返事。

パンクしそうな頭に少しでも知識を詰め込もうと、今までのジャジの話を要約して保存。

・・・やっぱりパソコンのようにはいかないみたいだ。

「そんないらんないことを考えている暇があるなら少しでも僕の話覚えてよね」

「そんなこと言わなくても、僕だっていっぱいいっぱいなんだから」

「奏吾、ならこれだけを覚えていたらいいいんだ。君は狙われている。命が危ない。ただそれだけを」

「確かに、それは簡単だ！」

僕の言葉にジャジは半分呆れ顔になる。

「君って奴は。少しは危機感を覚えて欲しいものだよ」

危機感を持ってって言われても、やっぱり狙われているという実感が沸かない。

「わかった。それは仕方のないことかも知れないから、とりあえずは狙われているということだけは分かっていて」

ジャジは諦めたように小さな溜息をついて一旦話をきる。

そして小さく息を吸う。

「まずは奏吾の力についておさらい。君は天使と悪魔の力、二つを持っている。そしてそのどちらも僕達悪魔や天使に比例するほどに強大な物である。これがさっきまでに言ったこと。そして君の身体の右半身が天使、左半身が悪魔の力を宿しているということが新

しいこと」

「半分ですか？」

ジャジがその言語に対して頷く。

「奏吾の右半身には強力な天導力が、それでいて左半身にも強力な魔導力が備わっている。さらにはその膨大な力を収める器までも両半身にそれぞれある。」

ここまでは何となく分かってもらえればいいんだけど。奏吾とルリに覚えてほしいことは右が天器で左が悪器であるということ。これだけは覚えておいてね」

「はい！ 私は奏吾さんの右側から力を貰えばいいんですね！」

「ルリがいう右側って、僕の右半身のどこでも力って渡せるの？ それと、どうやって渡せばいいのかも分からないし」

「そんなに急かさなくていいのかな？」

「別に急かしてなんか」

ルリの言葉に誘われたただけなんだけど

「まずは君の力はどうやら手からの受け渡しになっているのだと思うよ。僕もこれは確証がないんだ。だって仕方ないだろう？ 君のように力を渡すなんてやり方、前例がないんだから。今まで力を手に入れていた者はみんな魂を食べていたからね。だから情報を得るべきがない。むしろ僕が知りたいくらいさ。そのことは後で検証をさせてもらえないかな？ いや、絶対する」

あの、そんな下から睨みつけたような目をされても、上目遣いをしているようにしか見えないよ？

ジャジの上目遣いは可愛いな。

「奏吾、そんなことばかり考えていると死ぬよ？」

死ぬって！？ 戦闘で殺られるって事！？ それともジャジに殺られるってことなの！？

「僕は君を護るって言っているんだよ？ 殺る訳がないじゃないか、ふふっ」

それじゃあその笑いは何なの！？ 憎悪しか感じられないんだだけ

れども、気のせいだよな！？ 気のせいなんだよね！！

「そんなことは置いておいて」

置いちゃうの！？

「あとは力を渡す方法、これも僕の推測の域を脱せてはいないんだけど、おそらく君が気を許した相手に流れこむんじゃないかと言うのが僕の考えさ」

「えっと、推測なの？」

てつきりわかつているのかと。

「さつきも言っただろう？ 前例がないって」

「でも、この話のはじめに力の有効範囲と有効時間の話をするって得意げに言っていたよね？」

発生条件とかも分かっている風だったのに。

「奏吾さん！ ジャジちゃんは数少ない情報からここまで理解して推理して説明してくれているんですよ。そんなジャジちゃんを追い詰めるようなことを言うのは良くないと思います！」

「いや、追い詰めるってことなんて」

「ありがとうルリ。君はいつでも僕の味方をしてくれる。こんなに幸福なことはないよ」

そんな、僕の味方にもなつてよ、ルリ。

「ルリは僕が一番の友達だからね。当然の事だと言うことだよ。

わかったかな？ 奏吾」

・ ・ ・ 悔しい。僕だって少なからずルリとは親しくなつたつもりでいたのに。

「ルリ、僕達つて友達だよな？」

「違います！」

「そんな！ 僕達友達じゃないの！？」

僕だけが友達と思っていたのか！？

ジャジ！ そんな可哀想な目を向けなくて欲しい！

「奏吾、友達というのは親しい者同士の事を言うんだよ。君はルリとそれほど親しかったかな？」

ジャジの言葉に胸が張り裂けそうになる。

苦しい。この状況が僕には辛い。

「それじゃあルリにとつての僕って」

赤の他人ということなのか!?

「はい！ 奏吾さんは私にとつて命の恩人なのです。友達だなんてとてもとても。おこがましいと思います！」

「いやおこがましくなんか無いよ！ 僕をそんな女神のように崇めるのはやめて！」

「君は何を言っているんだい？ 奏吾、女神というのはルリのような天使の最高位で、尚且つすべての種族に崇められる存在なんだよ？ 君のような者が女神だなんてそれこそおこがましい。それに君は男だろう？ それとも女装でもしようと言うのかい？」

ジャジ！ 僕の余計な一言に反論しすぎじゃない!?

とりあえず気を取り直して

「とりあえず、僕はルリと友達という関係でありたいんだ。命の恩人だなんて言って距離をおくのはやめて欲しいんだけど」

「そうですか・・・」

ルリは少し考える仕草をして

「分かりました！ 命の恩人からの頼みですから。私は今日から奏吾さんとは友達です。これからよろしくお願いします！」

今日からという言葉が心を突き刺す。それに命の恩人だからって、そんな命の恩人じゃなかったら友達にもなれなかったってことなの？ でも、まあ友達という立ち位置に付けただけでも良しとしたほうがいいのかな？

「命の恩人からの頼みだからね。ルリはしっかりとお願いを聞くべきだよ」

その仕方なくみたいな言い方は僕を追い詰める為なの!?

一体ジャジは僕をどうしたいというわけ!?

「どうもしないよ？」

「どうもないならやめてよ！ 僕って傷つきやすい体質なんだか

ら」

笑ってないで何か言って！ ルリもジャジに釣られて笑わないで！

「ごめんよ奏吾。もう言わないから泣かないでくれ」

「泣いてないから！ 勝手に泣かさないでくれる！？」

「奏吾さん！ 私もジャジちゃんもいますから。だから泣かないで下さい」

だから泣いてないって。

「奏吾の事は置いておいて、話を戻すよ」

そんなこと言わないで。何だか寂しくなってくるから。

「さて、有効時間と有効範囲の話だったね。これは話すのは難しいから長くなる・・・と思ったけど、話すよりも実践。今までのおさらにも兼ねてね」

「実践って、戦うっていうの？ というよりそれも憶測？」

「そうだよ。悪いかい？」

「悪くはないからね。だから怒らないでね！」

「怒らないよ。それより、来たよ。二人とも気をつけて」

そう言っただけジャジは空を見上げる。

僕とルリは釣られて空を見上げる。

ズドン！！

「うえ！？」

「きゃあああ！！ な、ななな、なんですか！？」

僕達の後方から凄まじい音が響いたのを聞いて驚く僕とルリ。

「彼が今回の対戦相手」

ジャジはその音のした方向を向き言う。距離は30m程の所。

2mくらいありそうな身長に長い手、それに反しては短い足をしていた、口からはみ出した牙が上下に二本ずつ生えている。そして頭には二本の立派な角がこれ見よがしに生えていた。

「いや、あれが対戦相手だとしても何で空なんて見上げたの！？ 上から何か来ると思ったじゃないか！ なんでフェイントなんてかましてくるの！？」

「奏吾うるさい。もう戦闘は始まっているんだよ？ それに僕は空から来ると言ったかい？ ルリを見てみなよ。ルリから放たれるこの緊迫感、もう戦闘態勢に入っている」

緊迫感か。

僕にはルリが只怯えているように見えるんだけど、気のせいなのかな？

「ルリ、大丈夫？」

「ふあい！ 私はいつでも大丈夫です！ もうバツチリです！

脚が震えるくらいのバツチリ加減です！」

「脚が震えているのがバツチリじゃないよね！？ それはもう戦える状態じゃないよね！？」

「何を言っているんだい？ あれは戦闘の前に興奮して体が震えてしまう現象だよ」

「僕には武者震いには見えないよ！」

ルリには心配要素しか見当たらない！

「今回は僕一人で戦うから、二人とも手を出さないで。奏吾の力は借りることはなるけど」

「一人で戦うなんて危ないです！ 私も戦います！」

「こつちの世界での戦い方が良く分からないルリは不利な立場にあるわけだし、もちろん奏吾は戦えないからね。力があっても使えないんじゃない意味が無いからね」

そう言われると自分が情けなく思えてくる。

「奏吾、そんなに落ち込むことはないよ。君がいるから僕達が戦えるんだから」

僕の気持ちを察してか、ジャジが優しい言葉をかけてくれる。

「あの、ジャジちゃん。どうしてさつきからあの怪物さんはこちらを攻撃してこないんですか？」

確かに、さつきからこちらに攻撃してくる素振りが見えない。一定の距離をとって眺めているだけのようには見えなくてもない。

「ルリも彼を怪物と呼ぶんだ」

「ジャジ？」

聞こえるか聞こえないかの声でジャジが言った言葉。

僕はその言葉がひどく悲しそうに聞こえた。

「なぜ向かって来ないかだったね。それはこちらの様子を伺っているんだよ。多分向こうからはまだ仕掛けてこないと思うよ」

「そっか。それなら安心だね」

「安心なわけないよ。まだって言ったよね？ 戦闘態勢を崩したら殺られるよ？」

「そうですよ！ 私たちが安心して油断したときに食べに来るんです！」

「その通りだよ、ルリ」

二人の気迫に押される僕。

「わかった。油断は絶対しない。それより僕はあの存在が何なのか知りたいんだけど、天使や悪魔ってわけじゃないよね？ ルリは知っているの？」

「いえ、私も詳しくは知らないんです。ただ、怪物だと学校では教えられて、その存在は悪い者だって」

怪物って、そんな曖昧な言葉の中に入られても分からないし。

その言葉を聞いてジャジはルリから顔を背ける。

「どうしたの？」

「なんでもない。それよりあの存在の話だね？ あれは怪物という名前で私たちの世界では呼ばれているんだ。でもね、本当の名前は別にあるんだよ。奏吾も思っただろ？ なんでそんな曖昧な括りに放りこまれているだけなんだろうって、それは知られなくなつたからだよ。この、「鬼」の存在を」

鬼！？ 鬼ってあの桃太郎が退治したって言う！？

「鬼ですか！？ あの桃太郎が退治してくれたっていう！？」

「君達は同じことを考えているみたいだけれど、僕は桃太郎を知らないからね。何とも言えないんだけど。鬼というのはね、魂の循環の話を覚えているかい？ その循環ではたまに循環から漏れ

てしまう魂があるんだよ。幽霊とでも言っておこうか。その幽霊はね、この世に未練があつてつて話はよく聞くよね？ でもそれは違うんだ。魂の循環にはね、ある程度の力が必要になるんだよ。悪魔でも天使でもどちらでもいい、どちらかの力をほんの少しでも持つていけば漏れたりはいらないんだ。でもね、奏吾みたいに莫大な力を持つている者がいるつてことは、その逆もあるつてこと。全く力を持つていない人は漏れてしまう。その魂の循環から。僕達の世界で生まれられないからね、力がないと。そしてこの世に残るしかないんだ」

「それであうゆう存在になつてしまつてことなの？」

「そうだよ。魂はね、いろんな感情を避雷針のように受け取つてしまふんだ。そしてこの世界には憎しみや怒り、悲しみが大半を占めている。そしてその感情に魂が耐えられなくなり原型を留められなくなる。そして鬼という存在になつて魂を保つんだよ。消えないようにね」

「でも、それじゃあ悪者つて決めつけているの、おかしいんじゃないですか？」

「確かに、悪者という言い方は少し違うかもしれない。感情を受け取ると言う事は、それを自分の中に貯めこむと言う事だよ？ そんな状態で自分を保てるとは思えない。いや、保てないんだ。一人分の感情だけなら受け止められるかも知れないよ？ だけれども多くの人からその感情を受け取ればどうなるか分かるよね。」

感情の爆発。発狂。

僕だつて何回か怒つたことはあるけれども、あの時の気持ちを全部今降りかかってきたりしたら、僕は感情をコントロールできる自信は無い。というより精神が崩壊してしまうと思う。

「ジャジちゃん！ 鬼さんを助ける方法つていうのはないんですか？」

ジャジの顔が優しい笑顔になる。

「ルリはいつでも優しいね。怪物と呼ばれている者を助けようだ

なんて。いや、嫌味じゃないよ?」

ジャジはルリに笑顔のまま言う。

「ジャジ、それで助ける方法は?」

ジャジの顔から笑顔が消え、曇った表情へと変わる。

「・・・ないよ。鬼を助ける方法なんて」

助ける方法が無い? つまり、助けられないということ!?

「そんな! 何とかならないんですか!??」

ルリの不安な顔を見ると僕まで不安になってくる。

「僕にはどうしようも。ごめんよ、ルリ。君の力になれなくて」

ジャジの顔がさらに曇り暗くなる。

ジャジはルリの頼みを聞けなくて落ち込んでいるのか。

それにしても、どうしても鬼を助けられないのかな? 確か鬼になつてしまうのは魂の循環から漏れてしまったからで。

「あのさ、ジャジ。その鬼に力を渡すことってできないの?」

「力を渡す?」

「僕がルリやジャジにやったように力を渡して上げるんだ。それなら力を持った状態になつて魂の循環に戻るんじゃないの?」

「そうですね! それなら力を手に入れた事になりますから私たちの世界に生まれることができますね!」

鬼を助ける希望が生まれたからか、ルリは笑顔を取り戻す。

「ルリ、奏吾。それは不可能な事だと僕は思うよ」

「えっ!? 不可能って、まだ試してもいないのに」

「そうですね、ジャジちゃん! 試してからでも奏吾さんの考えを否定してもいいんじゃないんですか!??」

「鬼というのはもつと、君たちが思っているよりもずっと難しい存在なんだよ」

「難しい存在ですか?」

難しい存在だつて? 一体どう難しいってジャジは言つんだ?

「さつき二人に話した鬼の事は一部の話し。簡単に言えば、初めはそうやって鬼は誕生したということ」

初めはってどういう事だ？

「ジャジちゃん。初めはってことはその後は違うつていうんですか？ その、鬼さんが生まれる方法というか、誕生の仕方というか」

「そうだよ。初めは鬼は確かに魂の循環から漏れた者、つまり人の魂が鬼となっていたんだけど、今はそれも変わってきているんだ。確かに今も魂の循環から外れてしまう者はいるよ？ けれどね、鬼は学習するんだよ」

「学習する？ 鬼は無知だつて事なの？ 元は人の魂なのに」

「それを説明していなかったね。魂の循環に外れてしまった者は鬼になつて魂を保つて説明はしたよね？ なぜ鬼になると魂が保てるのだと思う？ つまりはね、鬼という存在になると感情を避雷針のようにキャッチすることはなくなるんだ。そして今まで貯めた感情を消すことが出来るんだよ。一緒に人間だった時の記憶や本能などを忘れてね。そして魂はとりあえずの安定を得る事が出来る。ただどね、人間の時の知識を捨てているわけだから、自分が何者なのかも分からない。そして鬼の本能に従つてしまふんだ」

「鬼の本能ですか？」

「鬼の本能というのはね、力を求めるということ。力の話はしたよね？ 魂を食べると力が丸ごと手に入るつて」

それじゃあ鬼の本能つて。

「鬼の本能は力を集めること。つまりは魂を食べるということだよ。普通の鬼には天使や悪魔の力は使えないみたいだけど」

人の魂を食べることが本能！？

「そ、そんな。なら、あの鬼さんは私たちを食べに来たんですか？」

ルリの声に力がない。

「そういう事だよ、ルリ。おそらく僕の力に反応して現れたんだと思うけど」

ジャジは小さく息をはいて話を続ける。

「ちよつと遠回りをしちゃったけど、話を戻すよ。そしてここか

らが別の鬼の生み方。鬼は人を見て学習する。感情をね。でもその感情を学習できても鬼はそれを出すことはできないんだよ。つまりは感情が貯まる。そうすると魂はまた耐えられなくなるんだよ。次は感情の詰め込みすぎでね。魂を保ちたいならどうする？ 当然感情を排除したいよね。だから鬼は感情を吐き出すんだよ。食べた魂に感情をぶち込んでね」

「感情をぶち込むって、そんなことしたらその魂はどうなるの！？」

「当然鬼はその魂を自分から切り離す。そしてぶち込まれた感情のせいで魂を保てなくなり鬼になる。これが今の鬼の誕生の仕方。つまりは魂の循環に漏れることのなかった魂すらも鬼に変えられてしまうということだよ」

「でもさ、それが僕が言った力を渡す作戦が不可能だって言えないよね？」

「君はまだ分らないのかい？ 食べられた魂も鬼になってしまっただけで話したろう？ 食べられているということは力があつたってこと。つまり力があつても鬼になってしまっただけは魂の循環には戻れないと言っ事なんだよ」

「そう言われると確かにそうなのかも知れない。力を持っている魂も鬼になる。」

「なら鬼の外側だけを倒すという事はできないの？ 魂だけは無傷で」

「そうですね。それなら魂を循環に戻せることだって」

「それが出来るならもう教えているよ」

「だね。ルリがここまで真剣に頼んでいるのにその方法を教えないなんておかしいから。でも、それなら一体どうやって魂を助ければいいんだ。」

「あの、ちなみに鬼さんを倒したら魂はどうなってしまうんですか？」

「もう分かっている答えをそうであって欲しくないのか、覚悟を決

めるために確認したいのか、どちらかは分からないけれどルリはジャジに問いかける。

「もう分かっていると思うけれど、鬼という存在と共に消滅してしまうよ」

「そうですか・・・」

やっぱり答えが分かっていたからか、今までの落胆の仕様とは違って落ち着いていた。けれども落ち込んではいえるようだ。ルリの顔から元気が感じられない。

「ジャジちゃん。それじゃあ鬼さんを消してしまうことしか出来ないんですか？」

「何度も言うけれどそうなんだよ。僕達は彼ら鬼を消すことしかできない。そう言われているんだ」
言われている？

「ジャジ。もしかして悪魔と戦ったことないの？」

「そりゃそうだよ。下の世界に来るのなんて初めてだし、そもそも純粋な鬼を間近で見るのなんて初めてなんだから」

「えっ！？ そうなんですか！ 私はてっきりジャジちゃんも鬼との戦闘をこなしていると思っていましたんですけど、違うんですか！？」

「僕もてっきりそうだと思っていたんだけど」

「違うよ。それにルリは知っているだろう？ 一緒に学校に通っていたじゃないか」

「あつ、そうでした。ジャジちゃんとは毎日学校に行っていたんですした！」

「学校なんてあるの？」

「当然あるよ。僕達はそこで勉強を学んでいるんだ。君は学校には行っていないのかい？」

「行っているけど、でも君達の世界で学校があるなんて以外だと思っ」

「そうなんですか？ ここの世界とそんなに変わりませんよ？」

「そうなの？」

「そうだよ、奏吾。基本的な物はここの世界の物と変わらないよ。違うところと言ったら車が無いことかな」

「ジャジは車を知っているんだ」

「上の世界ではこっちの事を多少は勉強していたからね。いや、というより今はそんな話をしている場合じゃ無いんじゃないかな？現実逃避している場合じゃないよ？」

そんなことは分かっているよ。でも、さっきから魂を助ける方法を考えているんだけど何も浮かばないんだ。鬼を倒すだけじゃ魂は助けられない。ましてや消滅してしまう。そんなことジャジにはやって欲しくない。それを何としても回避したい。どうすれば。

「ジャジちゃん、やっぱり私が戦います！ ジャジちゃんに魂を消す役なんて似合いません！」

「・・・ルリ・・・ありがとう。でも、やっぱり僕がやるよ。君こそこんな役は似合わない」

くそっ！ 僕があゝの鬼と対決することさえできれば、二人になつらい役をやれせなくても済むのに！

「二人とも気をつけて。長々と待っていてくれた鬼が、流石にしぶれを切らしたみたいだよ」

そう言われて鬼の方を見ると、その鬼はさっきまでじっとしていただけだつたのに小刻みに震えだしていた。

「君の言う武者震い、なのかな。あれもさっきのルリから学習したのかな？」

そう言っているジャジは悲しげな視線を鬼に向けているように見えた。

「それじゃあ行ってくるよ。二人は離れていてね」

ジャジは翼を広げ、飛ぶ体制をつくる。

「ジャジちゃん！ やっぱり私が！」

「ルリ、最初に言ったとおり君は戦い方をわかってないじゃないか。そんな君が鬼と戦えるわけないだろう？ それはもう戦いじゃ

なくて犬死というんだよ。だからといって一緒に行くなんて言わないでくれよ？ それは足手まといにしかないからね」

さっきまでのルリにしていた優しい話方とは違って、棘のある言い方をジャジはした。

確かにジャジの言うとおり、戦い方を知らなかったらルリの言うただの犬死。ルリが戦闘に絶対に参加させないためのあの棘のある言い方ということか。

「・・・分かりました。気を付けてくださいね」

ルリは全てを分かってか、涙を浮かべつつも笑顔をつくりジャジに向ける。

「うん。二人とも気をつけて」

そしてジャジは鬼に向かって飛び立った。

僕はというと、ただつつたっていることしかできなかった。

そしてジャジと鬼との攻防が始まる。

ジャジは飛びながら鬼に近づきつつ、右手に黒い弾を作り出す。そして右手を鬼に伸ばしながら黒い弾を放つ。その放たれた弾は鬼の右腕に命中する。

「ぐわああああああおおおお」

鬼の雄叫びが僕の耳を貫く。

なんてすごい雄叫び何だ。鼓膜が破れそうだ。

そして鬼が苦しんでいるのか、雄叫びを挙げている隙に懐に入り込む。

「はあーっ！」

ジャジは右手に拳を作り一発、鬼の腹にお見舞いする。さらに左でもう一発打ち込む。そしてまた右、次に左と連続で打ち込む。連打。

鬼の雄叫びはいつの間にか止んでいた。ジャジに腹を殴られているせいで声が出ないんだろう。

「なんて早い攻撃なんだ。ジャジはあんなにも強かったなんて」
強いとは思っていたけどあれほどとは。

ジャジはかなりの数の拳打をし後方に下がる。そして両手を引き、両方の手にさつきと同じように黒い弾を作り出す。

「これで、終わり」

ジャジは引いていた両手を一気に前に、鬼に向かって突き出す。それと同時に二つの黒い弾は鬼に向かってものすごい速さで飛んでいく。

その二つの弾は鬼に当たると同時に、爆発でもしたかのような凄まじい音を立て、あたり一面に煙が立つ。

「お、おわったんですか・・・すごい煙がたっているんですけど」
煙のせいでジャジの姿が見えない。

「段々煙が晴れてきたみたいだよ。ほら、ジャジだ」

ジャジはというと、戦闘態勢を解いているのだろうか、構えは解かれていて力を抜いているようだ。顔は下を向けている。

やっぱりジャジも鬼を倒すのは辛かったんだろう。

「・・・ジャジちゃん」

ジャジのそんな様子をみてルリは心配しているようだ。

こういう時ってジャジにどんな言葉をかけてあげればいいんだろう。仕方がなかったんだよ？ それとも、ありがとう、助かったよ？ それとも他の言葉？ 僕には分からない。どれが正解でどれが不正解なのか。今の僕にはどれも不正解にしか思えない。どんな言葉をかけたとしても、その言語はただただジャジを傷つけてしまう。としか思えない。なら、僕は一体何ができるんだ？ これからもこんな状況が続くと思う。それでジャジや、次はルリだって戦闘に参加するだろう。そして二人に傷を、二人の心に傷をつけなくちゃいけないのか？ そして僕は見えているだけ、二人が傷つく姿をただ眺めているだけ？ 僕は何もせずに二人に守られているしかできないの？

「くそっ」

そして僕はジャジを見つめる。ジャジはこっちに飛んで戻って来ずに歩いて向かってきた。ジャジの羽を見ると羽が少し薄くなっ

きている。あの時ルリの力が消える前の現象に似ている。さっきの戦いでかなりの力を消耗したんだろう。

「ジャジちゃん！ 危ない！」

その声にジャジは後方を振り向く。そこには大きな拳がジャジの体目がけて飛んできた。

「ジャジ危ない！！」

僕が叫んだ頃には何もかもが遅かった。その大きな拳はジャジの身体を貫く。

そしてその反動で後方に飛ばされ、地面に体を打ち付ける。そして、そのあたりの煙が完全に取り払われる。

「あれは鬼！？ あそこまでやっててもだめなのか！？」

あんな猛攻でも倒せないのか！？

「奏吾さん、ジャジちゃんが！」

鬼は角と角の間に力を溜め込んでいるのだろう。その間に小さな弾が形成され、その弾は段々と大きくなっていつている。トドメを刺そうとしているのか！？

「ジャジ！ くそつ、僕は名前を呼ぶことしかできないのか！」

「私が行きます！ 奏吾さん私に力を貸して下さい！」

ルリは僕の右手をつかみながら頼む。

僕は何もできない、力を渡す以外では。ルリに頼むしかジャジを助ける選択肢が無いってことは分かっている。それしかない。

「ルリ、それじゃあ頼むよ」

僕は精一杯ルリの力が渡されるように願う。

「奏吾さん、どうしたんですか！？ 早く力を、ジャジちゃんが！」

「分かっているよ！ 今やっているから！」

けどなんで？ なんで力がルリに渡されないんだ？ もうルリに頼ることもできない。ジャジを助けるところも出来ないって言うのか？ 僕が唯一できる力を渡すことすらもできないなんて。僕はなんてどうしようも無い奴なんだよ！

そして鬼の弾が角に当たりそうなほどの大きさまで膨れ上がっている。

「もう撃つつもりか!？」

「奏吾さん! もう時間がありあせん。早く! お願いします、ジャジちゃんを助けさせてください!」

「くそっ! なんでだよ、なんでルリに力が渡されないんだよ!」
そして鬼のつくりだした弾はジャジへと放たれる。

「ジャジちゃん!」

「くそっ、がー!」

一瞬大きな光に包まれる。そしてあたり一面煙が覆う。
そして煙は段々と薄れていき、ジャジの姿を映し出す。

ジャジはぐったりと地面に倒れており、悪魔の力は失ったんだろう。羽が消えてしまっている。

「ジャジ・・・僕は、なんで、何も、でき・・・ぐっ」

言葉が出ない。僕はジャジを見殺しにしてしまった。その現実が受け止められない。受け止めたくない。涙をこらえきれない。

「奏吾さん。ジャジちゃんは大丈夫ですよ。安心してください」

「・・・ル、リ? なんで、天使の姿に?」

何故かルリは天使の姿に変わっていた。

どういうことだ? さっきは何度やっても力を渡すことができなかったのに。

「いや、それよりジャジが大丈夫って!？」

僕は涙を拭い、ルリに問う。

「ぎりぎりで間に合いました。私の得意な天術が防御壁で良かったです」

天術? 防御壁? 一体何の話をしているんだ?

「ジャジちゃんは無事です。力はもう尽きているみたいですけど、最後の一撃は防げたので命に別状はないと思います」

「それは良かった! 良くわからないけどジャジは助かったんだね!」

「はい！ これも奏吾さんのおかげです！」

「僕のおかげ？ 僕は何もしていないじゃないか。それを言うならルリのおかげだろう？」

「違います！ 奏吾さんのおかげです！ 私、今ものすごい力を自分の中に感じているんです。この力のおかげであの一撃を防ぐことが出来ました！ もし、私の本来の力だったとしたら、私が作った防御壁は壊れていたと思います！ だから奏吾さんのおかげなんです！ それに、私今なら何でもできる気がします！ 私、行つてきます！」

「行つて来るつて、あそこに！？ でも」

「大丈夫です！ 私を信じてください！」

ルリは僕にとびつきりの笑顔を見せてくれる。
なんだろう。この安心感は。

「ルリ、僕をジャジの元まで連れていってくれないか？ ジャジをあのままにしておくわけにはいかないだろう？」

「はい！ では、行きますよ」

ルリは羽を広げジャジの方へと飛び立つ。

「ジャジ！ 大丈夫か！」

ジャジは目に見える傷は擦り傷などが多くあった。

「奏吾？ 僕は生きてるのかい？ さっきの攻撃は？ 君達は無事だったのかい？」

「僕達は無事だったから、心配しないで。それより怪我の具合は？」

「肋を二本か三本折られたただだよ。気にしないで」

「それなら私に任せてください」

ルリはジャジに両手をかざす。するとみる内にさっきまでみえていた擦り傷が消えていく。

「ありがとう、ルリ。痛みが消えたよ。折れた肋も治ったみたいだ。それにしてもなんて早い回復力なんだい。一体君に何があったんだい？」

「私にもよく分からないんですけど、奏吾さんからものすごい力をいただけたので」

「二人とも、その話は後にしよう。鬼の方は二度も僕達の会話を待つ気は無いみたいだよ」

鬼はさっきもやった技をもう一度しようとしている。

「でも、僕は戦えないみたいだ。君の左手を握っても全く力が流れてくる気配が無い」

「大丈夫です。私がいるじゃないですか」

「ルリが！？ でも君は戦闘経験もないし、それに君の力では」

「大丈夫です。奏吾さんにいっぱい力をもらえたので。奏吾さんにもいったんですけど、今なら何でも出来る気がするんです！ それに、ジャジちゃんが戦えない今、誰が鬼さんを助けるって言うんですか？」

「助けるって、ルリ。僕は鬼は助けられないって言ったよね？」

「大丈夫です。見ていてください」

「ジャジ、僕はルリが嘘を付いているようには見えないんだけど、でも、信じてみない？」

「ルリを信じなかったことなんて一度ないよ。ルリ、任せたよ」

「はい！」

ルリは羽を広げ地面から足を離す。

「鬼さん。今助けてあげますからね」

そう言ってルリは両方の手の指を胸の前で絡ませ祈る仕草を作る。

「ルリが光ってる？」

ルリが突然光だし、そしてその光はルリを中心とした球体へと変わる。ルリの姿は微かだけに見える。

「ルリが光に包まれちゃったんだけど、あれは何？」

「僕にも分からないよ。ルリのある天術、僕は見たことがない。鬼の方に目をやると、鬼はさっきよりも大きな弾を作り出していた。」

「ルリ！ 気をつけて！」

僕の言葉は届いているのか分からないけれども、届いていると信じて。

「私のこの祈り、届いてください！」

ルリを包んでいた光がルリを離れ鬼のもとへ。それと同時に鬼はルリに向けて弾を放つ。

「ルリ！」

「大丈夫ですよ」

鬼から放たれた弾はルリが創りだした光へ吸い込まれていく。そしてそのまま光は鬼を包みこむ。

「あれって、鬼の形が！？」

光に包まれた鬼はその形を変え、一つの小さな塊へと姿を変える。

「あれはもしかして」

ジャジが取り乱している。

そしてその塊はゆらゆらと上へと登っていった。

そして見えなくなると、ルリが僕達の方へと降りてきた。

「奏吾さん！ ジャジちゃん！ 私やりました！ 鬼さんを綺麗な魂に戻せました！」

「やっぱりあれは魂だったんだね。でも一体何でそんなことが」

「どうだつていいじゃないか！ 魂を消さずに済んだんだし」

「よくないよ！ 君も鬼の攻撃がこれっきりだなんて思っただろう？ いつでもこの力が使えないとダメじゃないか」

確かに、ごもつともです。

「でもさ、とりあえず家に帰らない？ あまりここに長いすると誰かが来ちゃうだろうし、あんなにもすごい音とか立てたんだから」

今だれもここに以内の奇跡なんだし。

「そうだね。でも、ここに人がだれも来なかったのは奇跡でも何でもないよ」

「それってどういう事？」

「そのことも君の家で話そうか。君のお母さんにも挨拶しなくて

はいけないからね。それにルリが限界のようだし」

ルリを見ると何だか眠たそうにしている。

「力の使い過ぎだと思うよ。多分もう少しすれば天使の力も消えるだろうし、それと同時に眠ってしまうかも。僕はルリをおぶれないし、その前には合流しておきたいものだよ」

「大丈夫だよ。僕がいるじゃないか」

「君にルリの太ももを触らせるとでも？」

「いや、別に僕はやましい気持ちなんて持ってないから！」

「関係ないよ。ルリが後から聞いたら落ち込むかも知れないだろう？」

「そんなこと・・・」

無いよね？ ルリ、僕は信じてもいいんだよね？

「ということで行くよ。ルリは僕が引つ張っていつてあげるね」
ジャジはルリの手を引いて出口へと向かう。

「待つてよ！ 僕をおいて行ってどうするんだよ！」

屋上を出る前にその屋上を見渡す。

「えっ！？ 一体どういうことだ？」

屋上での死闘がなかったかのように、元の遊具がある屋上へと戻っていた。

悪魔の友達（後書き）

次の投稿はできるだけ早くしたいと思っています。
でわ

三人娘

「あつ、ジャジおはよう。随分と早いね」

リビングの扉を開けるとジャジが一人で朝食をとっていた。

「おはよう奏吾。君もこのトースト食べるかい？」

テーブルにはトーストと、湯気が立っていていかにも苦々しそうな黒色のコーヒーが置かれていた。

「あれ？ ジャジってトースター使えたっけ？」

「いや、さつき君のお母さんに作ってもらったんだよ。トーストって結構美味しんだね。この飲み物も入れてもらったんだ」

そう言ってトーストをひとかじりする。

もう母さんが起きてるなんて珍しい。

「それでその母さんはどこにいるの？ 見当たらないんだけど」

「さつき大きな荷物を持って出ていったけれど、君は何も聞いて無いかい？」

大きな荷物か、多分父さんの所にも行ったんだろう。

「母さんが出て行ったってことは、ルリはもう大丈夫なの？」

「さつき測ったら平熱になっていたし、ルリの顔色もよくなっていたから大丈夫だと思うよ。君のお母さんも安心していたよ。あれから三日も寝こんでしまっていたからね。かなり強力な力を使ったからだろうけど、こっちの世界に着いてからの疲労も溜まっていただろうし、慣れていない環境のせいもあったんだと思うよ。こんなに長い時間寝込んでいるルリを見るのは初めてだからね」

あの戦いの後、結衣と母さんに合流したときにルリは倒れてしまったんだよね。

「ルリが病院は嫌だとか言い出した時は大変だったな。僕が行かないとダメだよって言うてるのに、三人とも嫌なら仕方ないみたいな。行っていたらもっと早くに治っていたと思うけど」

「ルリは前から病院嫌いだったし、それにルリは天使なんだから

心配することないと思つたんだよ」

「それってどういう意味なの？」

「天使はね、体のあらゆる病氣や怪我の治りが早いんだよ。これは天使ならではの特性なんだ」

「天使の特性？ なんなのそれって」

「そういえばルリの件もあつて色々と話せてなかったね。その特性以外にも話させてもらうよ」

「以外って何？ 何かあつたっけ？」

「君は僕に質問をしておいて忘れたのかい？」

ジャジはあの目を僕に向ける。

「いや、仕方ないじゃないか！ 三日も前の話なんだから」

「君はあの出来事をたつたの三日で忘れたとでも言うのかい？」

それはなんて素敵な記憶力をしているんだろうと言わざるおえないんだけど」

「そこまで言わなくてもいいじゃないか。それにあの時に何があったか位は覚えているよ」

あんなに、あんなに自分が惨めで何も出来ない存在だと思ひ知らされた日を忘れるわけがない。

「君は何も出来ない存在だと言う事は無いよ。君がいたからこそ鬼を魂に戻すことができた。それに僕は助けられた。だから自分を少しは褒めてあげてもいいんじゃないかな」

ジャジ、君はなんて良い奴

「さて、そんな君の話は置いておいて話を戻そうか」

と思つたけど、そうでもないみたいだ。

「まずは天使の特性から話そうかな。と言っても今から話すことは全て特性によるものなんだけれどもね。天使の特性、まあ天使それぞれで変わつて来るから要するに特性にも種類がいくつかあると言う事だよ。例えば傷の治りが早かったり、大抵の病氣ならすぐに完治する回復力。壊れた物などを元あつた状態に戻すことができる原状回復。この現状回復は天術と合わさつての特性になるんだけど

この説明はまた後で。他にも色々と有るんだけども大抵はこの二つのどちらかな」

「特性ってかなり便利なんじゃないの？」

「いや、特性と言ってはいるけれどそんなに大したものではないんだよ。例えば野球で白球が投げられるからと言って誰もが百六十キロ以上を投げられわけでもないし、サッカーでボールが蹴られるからと言って狙ったところへ打ち込めはしないだろう？ それと同じなんだよ。回復力の特性を持っていたとしても傷が一瞬で治るわけでもないし、病気を患ったとしてもそれが必ず治るとは限らない。原状回復を天術を使って行ったとして、それを広範囲にわたって発動するのはできない。そういうことができるのは居るにはいるよ。でもね、百六十キロ投げられる人、ボールを狙ったところへ蹴り込める人は何人いるんだい？ 多分それを出来る人と同じくらいの人数が、私たちの特性の出来る以上に出て来る人の数ということかな」

特性というより才能ってこと？

「そこら辺の言い方は君に任せるよ。僕の言ったことが理解できたらね」

そしてコーヒーを一口。

「それにしてもこの飲み物、なんでこんなに苦いんだい？」

「砂糖でも取ってくるよ」

僕はキッチンに入って、食器棚に置かれているコップ、砂糖の入った小瓶を取り出す。ついでにトースターに六枚切りを二つほどセツトする。

「ジャジ、牛乳もいる？」

「それを入れたほうが美味しくなるなら頼もうかな」

「美味しくなるかは人それぞれだけど、今より甘くはなるよ」

僕は冷蔵庫を開けて牛乳を取り出す。

僕は牛乳でいいか。

「コーヒーに牛乳いれるなら砂糖はいらなかったかな？」

テーブルに戻ってジャジに牛乳と砂糖を渡す。

「僕はよく分からないから君に任せるよ」

「ん、分かったよ。とりあえず牛乳いれるから、それでも苦かったら砂糖を入れるといいよ」

僕は牛乳しかいれたことないけど。

僕はコーヒーの入ったカップに溢れない程度牛乳を注ぐ。そしてジャジが一口。

「・・・砂糖入れようかな」

そう言ってビンの蓋をあけカップに向かって傾ける。

「あっジャジ・・・」

一体スプーン何杯分入ったんだろう。

「これはかき混ぜたほうがいいんだよね」

カップにスプーンを突っ込みかき回す。

かき混ぜるだけでゴリゴリと聞こえる。それにかき回すときのスビード感が感じられない。相当重そう。そしてカップを口に近づけどドロドロになっているだろう液体を一口。

「少し甘いけど、なかなか美味しいよ」

「・・・そうですか」

ジャジは以外に甘党だと言う事か。

「何か言ったかい？」

「いや何も。それよりさ、ルリの特性って何なの？」

ジャジの初めの言い方から察するに回復能力かな？

「そうだね。しかもかなりのものだよ。だから今回のような場合は初めて何だ。天使の力が使えなくても特性、回復力は残っていると思っただけだけど天使の力が無いせいかな」

そしてコーヒーを一口。なんとなくカップの中に視線を落とす。

白いカップの中の黒かったコーヒーが白に変わっている。

なんだか口の中が甘くなってきた。

「ジャジにも特性ってあるの？ 悪魔の特性ってことになると思うんだけど」

「僕の場合は、簡単に言ってしまうえば人を寄せ付けなくする事が

な。君も不思議に思ってただろう？ あんな戦いがあつたのに誰も屋上に来ないなんて。この特性にも条件が有るんだけれどもね」

あれはジャジの特性のおかげだったってことか。

「そういえば戦闘で壊された物が直っていたんだけど、あれもジャジが？」

「違うよ。あれはルリがやったんだ。さっきも言っただろう？

現場帰りの特性だよ。ルリは鬼を元の魂だけの存在に戻したときに直していたんだよ」

「特性？ 一人に一つじゃないの？」

「万能といえば分かるかな？ 何でも出来る人。それがルリだって話ただけだよ」

「なら他の特性も使えるって事なの？」

「そういう事。さて、もうこの話は終わりにしようか。僕が言いたかった事は全部言ったことだし。あまり話を伸ばしても全く覚えてもらえなかったら話損だからね。僕としては、それは腹立たしいことだから」

「覚えてるよ！ 忘れたことなんて一度も無いから！」

「逆に忘れてもらったら困るんだけどね。忘れないように要約してまで話したんだから。それにそんな大きな声を出さなくても聞こえてるよ。今は朝なんだから迷惑になるだろう？ そういう事も考えたほうがいいんじゃないかな」

「・・・ごめんなさい」

特性についての話をしていただけなのに、なんで僕は説教されてしまってるんだ？

「話を終わるまでに最後に一つ聞いていいかな？」

「なんだい？ もう君が聞きたいことはないと思っていたんだけど」

「いや、天術だったっけ？ それについて何も説明を受けてないんだけど」

「ああ、そのこと。天術というのは天力を使う技の事。防御壁を

君は見たんだろう？ あれが天術。僕の傷を癒すのも見ただろう？
あれも天術。これで分かったな？ 君なら話さなくても分かって
くれているとは思っていたけど、ちょっと買いかぶりすぎたかな」
「確認しただけだから！ 分かってたから！」
「君は学習をしないのかい？ そんな大声をだしたらルリ達が起
きてしまうじゃないか」

「・・・ごめんなさい」

本日二回目の謝罪。ジャジには謝る機会が多い気がする。

「さつきから焦げ臭い匂いがするんだけど、君はトースターを
使っていたんじゃないか？」

「しまった！」

僕は慌ててキッチンのトースターに向かう。

「焦げてる。というかこのトースター飛び出すタイプなのに」
故障か？ バネでも緩んでいたのかな。

「そういえば、君のお母さんがそのダイヤルを回していたみたい
だけど」

・・・母さん。

僕は焦げたトーストをとりあえず皿に移す。

「それは食べられるのかい？」

僕が焦げた物を載せた皿をテーブルに置いたときにジャジは言う。

「食べれないことはないよ。ただ、少し苦いかな」

「なら砂糖をかけるといい。とても美味しくなるよ。かけてあげ
ようか？」

「遠慮しておくよ」

とんでもない量をかけられてしまいそうだし。とりあえず砂糖を
かける前に一かじり。やっぱり苦い。砂糖をかけるのもいいだろう
けど、これはバターをつけて食べるというのもいいかも。

僕はもう一度キッチンに向い、冷蔵庫からバターを取り出す。

「おはようございます！」

「おはよ〜」

ルリと結衣がリビングに入ってきた。

「ルリ、結衣おはよー」

「おはよう」

僕とジャジが朝の挨拶を返す。

「そうくん。今日起きるの早いんだね」

「あ、うん。今日は何だか早くに目が覚めちゃって」

「ジャルちゃんも早起きさん何だね」

「結衣、そのジャジの呼び方やめない？ 何だかどこかの飛行機会社の名前と被るんだけど」

「そうかな？ とても可愛く思っただけだよ。ジャルちゃんだって別にいいよね？ 可愛いよね？」

「僕は別に構わないよ。親しい仲になるには肝心だからね。それに結衣の言うとおり可愛いから気に入ってるくらいだよ」

「そうですね。私もとても可愛いと思います！ 私もジャルちゃんって呼ぼうかな」

「ならいいんだけど」

でも僕はこれからもジャジと呼ばせてもらうけど。

「二人もトースト食べる？」

僕がジャジの正面に座っていたので結衣はジャジの隣、ルリはその結衣の前の席に座る。

「私は食べる。ルリちゃんはどうする？」

「トーストってこの黒い食べ物の事ですか？」

「それは違うよ。こっちの方がトースト。それは奏吾が調理に失敗したただだよ」

別に僕のせいで失敗したんじゃないんだけど。

「それなら美味しそうですね。奏吾さん私も頂きます！」

それならって・・・まあ黒焦げのパンが美味しそうに見えるわけないけど。

「ルリ、もう熱が引いたみたいでよかったね。体が痛かったりしない？ 頭痛とかはない？」

「もうバツチリ大丈夫です！ 奏吾さん、結衣ちゃん、ジャジちゃん。ご迷惑をおかけしまして申し訳ありませんでした！」

ルリは深々と頭を下げる。

「違うよルリちゃん。ここは謝るところじゃなくて感謝するところだよ。誰の迷惑にもなっていないじゃない」

ルリは僕達を見渡す。

ジャジはコクリと一つ頷き、僕はにこりと笑った。

「・・・あ、ありがとうございます」

少し恥ずかしがっているのか、いつもの元気な声ではなく、少し消え入りそうな声。

「それでいいんだよ。でも本当に元気になって良かったね。倒れたときはどうしようかと思っちゃったよ。無理しちゃだめだよ。これからは倒れる前にしんどくなったら言ってよね」

「はい、そうします」

「ルリちゃん顔真つ赤になってるよ」

「えっ、あつ、すいません！」

「だから謝るところじゃないって」

ルリも元気になっているようで何よりだ。

僕はトーストをセットして、ダイヤルを今度は焦げないように調節する。

「二人とも何飲む？ といっても今はコーヒーか牛乳しかないんだけど」

「なら私は牛乳！ ルリちゃんは？」

「あの、コーヒーってジャジちゃんが飲んでるそれですか？」

「そうだよ。一口飲んでみる？」

「えっと、遠慮しておきますね。私も牛乳もらいます！」

ルリがタジタジになっている。あの白い物飲みたいとは思わないよね。

「とっても美味しいのにな」

そんなジャジの声が僕の耳にはいる。

ジャジ、君はどんなに甘党なんだ・・・

僕はコップを二つもって三人が居るテーブルに戻る。

「あのさあのさ、三人とも聞いて！ ルリちゃんも元気になったことだし、今日は夏祭りに行こっか」

「行こっか じゃないよ！ ルリだって病み上がりなんだし、今日は家でおとなしくしておく方がいいよ！」

「どうしたの？ そうくん。夏祭り行くのが嫌なの？」

「べ、別に嫌ってわけじゃないよ？」

「ならいいでしょ？ それにルリちゃんもジャルちゃんも行きたいよね？ 夏祭り行くよね？」

「夏祭りですか？ それって学校の行事か何かなんですか？」

「夏祭り知らない？ 夏にある風物詩的催しんだけど、ジャジは知ってるよね？」

「そうだね、私は知ってるよ。でも僕も書物でしか読んだことしかないから。僕達上の世界では春夏秋冬がないからね。それと君が言う夏祭りと僕が読んだ夏祭りとは違うみたいだ。夏祭りって病気や厄災をはらう為の儀式的なものだと書いてあったんだけど、どっちが本当なんだい？」

「僕に言われても、お祭りとは分からないな。でもジャジの言う儀式なんて見たことはないけど」

「どちらも含ってると思うよ」

結衣が二人の顔を交互に見る。

「えっとね、夏祭りとは夏季に行われる神社のお祭りなんだ。これはそうくんが言ってることと同じこと。それでこの夏祭りはジャルちゃんが言う儀式、とはちょっと違うんだけど病気や災厄とかをはらう祈願から発生したものなんだって。二人とも納得した？」

「納得したよ。結衣ちゃんは物知りなんだね」

・・・以外だ。結衣がこんなに難しいことをぺらぺらと話せるなんて。

「結衣、一体そんな事どこで覚えたの？」

「さつき辞書で調べたんだ。今日は夏祭りに行こうと思っ
たからね」

いや、普通行こうと思ったところの名前なんて辞書で調べたりし
ないよ。

「あの、すいません。結局何をするとところか分からなかったんで
すけど」

「簡単に言うところだよ」

「楽しいところですか、なら私も行きたいです!」

「ジャルちゃんは？ 夏祭りどうする？」

「僕も行きたいな。どんな夏祭りであれ一度は行ってみたいとは思
っていたからね」

「よし決まりだね そうくん、そういう事だから」

「そういう事だから じゃないよ! 二人が行くと言っても僕
はやめておいたほうがいいと思う。もしルリが夏祭りで倒れたりし
たら大変だろう?」

僕的にはなんとしても今日は夏祭りに行きたくない。とういより
あいつにこの状況を知られたくない。知られでもしたらなんて言わ
れるか。いや、何をされるか分からない。

「あいつって誰の事だい？」

「あいつって亮介に決まってるじゃないか。こんな状況、女の子
三人と暮らしているなんて知れたら・・・えっ？」

「そうくん。もしかしてそれが夏祭りに行きたくない理由なんて
言わないよね？」

しまったああ! なんで僕はこんなことを口走ってしまったん
だ!?

「そ、そんなことないに決まってるじゃないか! 僕はルリのこ
とが心配で、そりや確かにちよつとは亮介のこととかで心配したり
もごめんなさああああああい!! だからそんな物騒な物
をこっちに向けないで! お願いだから! ってどつからそんな物
だしたの!？」

結衣が僕にイビツな形の物を僕に向けている。先端が尖っているから身体に突き立てられることは容易に想像できる。

怖い！ 逃げたい！ 恐ろしい！

「ジャルちゃんに借りちゃった」

「そんな危険な物を向けられながらにつこりとされても困るから！ 僕が対処に困るから！ なんでこんな物貸しちゃってるの！？ というかジャジはなんでこんな物を持つてるの！？」

結衣と並んでにつこりとされても！

「それでそうくん。夏祭りには行くよね？」

「ぐつ、ええとえつと」

「そ・う・く・ん」

いやいやいやいや、その口調は僕に恐怖しか植えつけられないよ！？ 結衣はいつたい僕をどうしたいと言っわけ？ この状況を打破出来る策は、ここはキッチンに逃げこむしか。よし

「ちよ、ちよつとトースト取ってくるよ。焦げたら大変だからね」

「ああ、トーストなら僕が今さっき取ってきたよ。使い方は君のお母さんのを見ていたからね」

ジャジは何やってくれるんだ！？ 僕の逃げ道が

「で、どうするの？ 行くの？ それとも逝くの？」

あれ？ おかしいな。両方行くに聞こえたんだけど、なんでだろう。僕の選択肢が生きるか死ぬかと聞かれている気がする。

「・・・わかったよ。だから物騒な物をこっちに向けないでくれない？」

もう観念するしか無いということですね。はい、実際最初から行くしか無いとは分かっていました。やっぱり結衣には押し切られてしまうな。

僕達四人はそのまま雑談をしながら朝食を済まして各々が支度を始める。

「ジャジ、ちょっといいかな？」

僕は二階に上がろうとしているジャジを呼び止める。

「なんだい？ さっきの武器のことなら大丈夫。結衣ちゃんにはちゃんと返してもらったから」

「いやそれも聞いたかった事なんだけど、本当にルリは大丈夫なの？ ルリの事を大切に思っているジャジだから変だなと思って」
それにあの場面はジャジの応援もあつて抜けられると思つてもいたし。

「ああ、その事。特性の事は君に話したろう？ だから今は完全に回復していると思うよ。それにもしもの時は君がいるだろう」

「僕が？ もしもの時つて僕に何が出来るつていうの？」

「簡単な事だよ。君の天力をルリに渡すだけでいいんだ」

「それだけ？」

「それだけ。結衣の特性、今弱まっているのはわかるよね。それは天力が作れない状況。つまり天使に限りなく遠ざかっているという事。だから君が力をルリに渡してくれさえすれば天使に、完璧な天使になれるということだよ。そうすれば特性の効果が強く出るということ。だから夏祭りに行つて大丈夫だよ。ルリが行きたいなら僕はできるだけ行かせてあげたいからね」

「ジャジつてルリには優しいよね。それぐらい僕に優しくしてくれてもいいじゃないか」

「何を言つてるんだい？僕は結衣ちゃんにも優しくしているよ。それに君に優しくしても付け上がるだけだからね」

いや、付け上がるつて。

「それじゃあ僕は行つていいかな？ 結衣ちゃんに呼ばれているんだよ」

「うん。聞きたいことも聞けたし、ごめんね。引き止めちゃつて」

「別にいいさ。ルリを心配してくれているのが本当だと分かつて僕はほつとしているからね」

「ほつとしているつてなんで？」

「それは、君がただ夏祭りに行きたくないからと行つてルリをだしに使っただけなら、僕は手を出すしかなかったからね」

ジャジは僕にあの顔、僕に恐怖という感情しか抱かせないあの笑顔をむけ、そして二階へと上がっていく。

ジャジは僕に恐怖を植えつけて何が楽しいんだろう。

「今日の夏祭りは一波乱起きそうだな」

そして僕も自分の部屋に向かうため、二階へと続く階段を登った。そして正午、昼食の時間。

僕達は朝と同じ席で昼食を取ることに。ちなみに昼食を用意したのは僕。

「三人共一体何してたの？」

朝食をとってから三人は母さんの部屋ですつと何かをしていたみたいだけど。

「えつとね、それは浴衣だよ、浴衣。夏祭りといえぱやっぱり浴衣を着ていかないと。二人に合うサイズと柄を探していたら時間がかかつちゃった」

「とつても可愛いのをえらんで頂きました！ 着るのがとつても楽しみです！」

「そうだね。ルリはかなりの可愛い物を選んでもらっていたからね。奏吾に見せるのが勿体無い気がするよ」

ちよ、勿体無いって。

「でもさ、良く二人に会うサイズの物があつたね。それに種類だつてそんなになかつたんじゃない？」

「それなら心配ないよ。奈々さんから浴衣コレクションを貸してもらつたからね、種類だつていっぱいあるから悩んじゃったよ」

僕は別に心配はしてないけど。

「いや、というか浴衣コレクションって何！？ それって一体どこに隠してあつたの！？」

母さん達がない時は僕が掃除をしているからそんなコレクションと呼べる程の量を見かけたことはないけど。

「それは分からないな。昨日奈々さんから借りただけだから。でもそうくんには内緒って言ってたかも」

じゃあ僕に言うのはまずいんじゃないの？

「それじゃあ浴衣に着替えちゃおつか。ジャルちゃん、ルリちゃん行こ」

「いや、結衣。今から着替えるのは少し早くない？ 夏祭りは夕方からなんだし、それに浴衣って着慣れていないと落ち着かないと思うんだけど」

「そんなことないよ。女の子の支度には時間が掛かるものなんだから。今日は遅刻するわけにはいかないからね」

確かに結衣の支度はとつても遅い。それは僕が身を持って分かっている事か。

「でも待ち合わせまで四時間もあるよ？ いくらなんでもそんなには」

「私一人で三人分するんだから当然時間が掛かるよー。二人とも化粧もしたことないって言うから私がするしか無いんだから」

「別に化粧なんてしなくても」

「何言ってるの！ 二人とも元がこんなに可愛いんだから化粧をすればどう化けるか。腕になるわー」

化けるって、そんな表現の仕方でもいいのか？

「とにかく今から支度するんだから、そうくんは自分の部屋でおとなしくしてね」

「はいはい、了解しました」

「あと、食器の片付けとかもよろしく」

「それも了解」

「時間になったらリビングに集合だから。それじゃあ二人共行こ」

「はい！ よろしく願いますー！」

「お願いするよ」

ルリとジャジは結衣の後に連れてリビングを出ていった。

「それじゃあ僕も始めますか」

僕はテーブルの空の食器を集めてキッチンへと向かった。三十分

程で食器を綺麗に洗い終わった。

それにしてもまだ3時間以上の時間が有るのか。なら掃除でもしようかな。でもこの前母さんのおかげで大掃除もしたことだし、掃除だけじゃあ時間が潰せない。

「あつ、夏休みの宿題が！」

宿題、確か今年はかなりの量を出されていたんだっけ。やっておかないと後で結衣が写に来るだろうし、なら掃除は置いておいて頑張ろう。

あれから3時間程宿題をして時計を見ると時刻は午後四時。待ち合わせ時間は午後五時だから後一時間は余裕が有るんだけど、結衣達は準備ができたんだろうか？ とりあえずリビングに向かう為宿題の問題集の山を綺麗に積み直し、その横に今日やった分の問題集を積む。携帯電話といつもより少し分厚くなっている財布をポケットに突っ込みリビングへと向かう。

「そうくん遅い！ 私たちなんてとつくの昔に準備が済んじやってるんだから、女の子を待たすなんてあつてはならないことだよ！ そのところ分かってるよね？ 分かってるんだったら今日はリソゴ飴をいっぱい買ってもらうんだから覚悟しておいてよね！」

「え、ああつ」

僕は上の空だった。

「そうくんどうしたの？ 私たちに見とれちゃった？」

全くその通りだ。この前の花火大会とは違って紫を基調としたおとなしめ、だけでも大人の雰囲気醸し出してすごく色っぽい結衣のイメージが変わってしまいうさだ。ルリはピンク色の浴衣で牡丹の花が散りばめられている。ルリのイメージにぴったりだ。最後にジャジ。

「ジャジ、その格好は・・・ワンピース？ 浴衣じゃないの？」

「そうなんだよそうくん。ジャジちゃん一回は浴衣を着てくれたんだけど、動きにくいからって脱いじゃったんだよ。何回言っても着てくれないから、せめてワンピースで夏だけでも感じてもらう

「と思って」

「いや、ワンピースだからって言って夏を感じられる訳無いと思うけど。」

「ジャジ。なんで浴衣を着るのやめちゃったの？ 結構乗り気に見えたんだけど」

「奏吾。僕がいつたい何をしに着たのか忘れた訳じゃないよね？ 君を守るためにも、何があってもすぐに対処できるように動き易い服装が着たかったから浴衣はちよつとと言う事だよ。だから僕はこの服装をとつても気に入っているんだ」

「ジャジの服装は白のワンピース。ルリが僕とあつた時に着ていた服と同じ白色。」

「このワンピースかわいいでしょ？ イメージは天使。ルリちゃんをイメージしてみました！」

「いや、まんまじゃん。」

「結衣ありがとう。僕はこの服、とても気に入ってるよ」

「どういたしまして」

「ジャジは浴衣で無いにしろ、かなり似合っているのは言うまでもない。」

「それじゃあ行くよ」

「なんでそうくんが仕切ってるのよ！ 一番遅くに出てきたくせに」。それにまだ一時間ほどあるんだよ？ 出るの速くない？」

「でも神社まで歩いて三十分くらいあるだろう？ だからちよつどいいじゃないか」

「それもそうだね。それじゃ、行こっか」

「はい！ なんだか緊張してきました」

「夏祭りで緊張なんてすること無いよ。夏祭りはただ楽しめばいいんだか」

「結衣ちゃんの言うとおりだよ、ルリ。せつかくのことなんだから楽しまないと損だよ」

三人で仲良く話ながら玄関へと向かう。僕もリビングの明かりを

消してから玄関へと向かう。

「そうだ！ 二人にこれ、渡すの忘れてたから。ルリちゃん、ジャジちゃん。奈々さんからだよ」

結衣は二人に巾着袋を渡す。

「中には奈々さんからの小遣いと、女の子に必須のアイテムが入ってるから落とさないように気をつけてね」

「はい！ 大事に持っておきます！」

「僕も落とさないように気をつけるよ」

いや、結衣は浴衣を着ているから違和感がないとして、ジャジ。ワンピースに巾着は似合わないと思うけど。

「うん。二人共いいよ！ ワンピースにも巾着って結構合うから不思議だよ」

・・・僕には女の子のセンスが分からないや。

「あの、結衣ちゃんの分のこれはないんですか？」

ルリは結衣の目線の高さに巾着を持つてくる。

「大丈夫！ 私の分もしっかり有るよ！ ほらこのとおり」

そう言つて今度は結衣がルリの目線の高さまで巾着を持つてくる。

「あのさ、僕の分はあつたりしないの？」

「どうしたの？ そうくん。そうくんも巾着袋ほしいの？」

「そうじゃなくて、母さんから僕に渡す物は無いの？」

「特にもらつてないよ？」

「そ、そう。分かった」

なんで僕には何もないんだ！？ お小遣い少しは恵んでくれてもいいのに。僕の財布事情も少しは察して欲しいよ。

「そういえば、奈々さんからの伝言があつたんだった」

伝言？ 母さんからつて一体何の？

「甲斐性なしは持てないぞ だつて」

嫌がらせかあああつ！ 絶対分かつてたよね！？ 僕の財布事情、絶対把握してたよね！？

「奏吾、一体どうしたんだい？ 顔が引き攣っているみたいだけ

ど」

「・・・気にしないで」

まあ三人には渡っているんだから、今日僕がお金を出す必要もないか。

「渡す物も渡したし、出発するよ」

「はいはい」

僕達四人は玄関を出て少し曇った空の中、夏祭りの有る神社へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0641t/>

天使で悪魔

2011年10月31日17時05分発行